

霊性の神学

—ここでいう霊性とは、神との親しい交わり、神の愛の深い体験をもたらす祈りを経験することによって、自分を知り、人々と共感し、連帯し、とりなしていく上で、最も大切なことを選び取らせていく生き方です—



A 神との愛の交わりを育てる

B 人々とのかかわりを育てる

C 社会とのかかわりを育てる

空知太栄光キリスト教会 牧師

銘形 秀則

目次

A 神との愛の交わりを育てる

A-00	学びの視座	1
A-01	霊性の神学の今日的動向	2
A-02	ライフスタイルとしての Worship & Intercession	5
A-03	神と人との交わりの基礎としての三位一体(Trinity)	7
A-04	交わりの存在としての人間の創造	10
A-05	交わりのいのちのしるし <1>親密さ	13
A-06	交わりのいのちのしるし <2>豊かさ	16
A-07	交わりのいのちのしるし <3>喜 び	18
A-08	交わりのいのちのしるし <4>自 由	19
A-09	主との親しい交わりを実現する Life-style<1>	21
A-10	主との親しい交わりを実現する Life-style<2>	24
A-11	主との親しい交わりを実現する Life-style<3>	25
A-12	主との親しい交わりを実現する Life-style<4>	26
A-13	主との親しい交わりを妨げるもの <1>	27
A-14	主との親しい交わりを妨げるもの <2>	30
A-15	神との関係を育てる <1>	33
A-16	神との関係を育てる <2>	34
A-17	神との関係を育てる <3>	37
A-18	神との関係を育てる <4>	39

B 人々とのかかわりを育てる

B-00	学びの視座	44
B-01	神はとりなし手を求めておられる <1>	45
B-02	神はとりなし手を求めておられる <2>	47
B-03	イエスのとりなしの教え	49
B-04	霊的な突破口を開くための祈り	51

B-05	とりなし手に与えられている霊的な立場	53	
B-06	権威をもって命令する祈り	55	
B-07	御国の鍵としてのイエスの名による祈り	58	
B-08	共同体を建てるためのとりなしの祈り	60	
B-09	パウロのとりなしの keyword<1>	Christ's Love	64
B-10	パウロのとりなしの keyword<2>	Worthy Life	
B-11	パウロのとりなしの keyword<3>	Thanksgiving	
B-12	パウロのとりなしの keyword<4>	Peace Maker	
B-13	パウロのとりなしの keyword<5>	His Will	
B-14	パウロのとりなしの keyword<6>	Excellent	
B-15	パウロ自身のためのとりなしの要請	80	

C 社会とのかかわりを育てる

C-00	学びの視座と教会の今日的課題	84
C-01	仕えるということ	85
C-02	旧約聖書におけるディアコニア <1>	87
C-03	旧約聖書におけるディアコニア <2>	89
C-04	しもべなるキリスト <1>	90
C-05	しもべなるキリスト <2>	93
C-06	新約聖書におけるディアコニア <1>	96
C-07	使徒教父時代におけるディアコニア<2>	99
C-08	ディアコニア共同体となるために	104
C-09	おわりに	108

A 神との愛の交わりを育てる

◆三位一体なる神のゆるぎない愛の交わりと、その交わりの中に招かれた私たち。御父、御子、御霊なる聖三位一体の愛の交わりこそ、永遠のいのちであり、キリスト教信仰の本質である。そして、そこからすべてがはじまる・・・。

A-00. 学びの視座

マルタ的ライフスタイルからマリヤ的ライフスタイルへ

◆今日の教会は、神との親しい交わりに重きを置く代わりに、神のための奉仕に強調点が置かれている。十分かつ効果的に神に仕えることがキリスト者生活であると考え、そのための技術や方法が重要な役割を占めている。神を求めるのも効果的に奉仕をするための力を得るためであり、自分が神との正しい生きた関係を持っているかどうかということには、それほど時間を割くことがない。そのために、霊的ないのちの枯渇を招いている。

◆ルカの福音書 10 章 38 節から 42 節には、マルタとマリヤの話が出てくる。マルタはイエスをもてなすために「気が落ち着か」なかった。そしてイエスの御前でじっとみことばを聴き入っている妹マリヤに対して腹を立てた。それに対してイエスは言った。「マルタ、マルタ。あなたはいろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」

◆ユダヤ的な表現はきわめてはっきりとしている。例えば、「わたしはヤコブを愛した。エソウを憎み、」(マラキ 1 章 2、3 節)とか、「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えることはできません。」(マタイ 6 章 24 節)とあるように、中庸的な態度を容認する表現はない。とするならば、マリヤが「良いものを選んだ」とするならば、マルタは「悪いものを選んだことになる」。ここでは、優先順序が問われている。もしこの話をマルタの奉仕もマリヤも重要だと解釈するならば、ここでのメッセージは骨抜きになってしまうのである。

◆この話の前後のコンテキストを考えてみよう。ある律法学者は律法をどう読んでいるかをイエスから詰問された。律法学者は正しい答えをしたが、それを生きていることはなかった。いのちがなかったのである。サマリヤ人のたとえのサマリヤ人は実はイエスの生き方を表わしている。その生き方ができるのは、イエスがいつもマリヤのように御父の御前で祈りのときを過ごしておられたからである。事実、11 章では、イエスがあるところで祈っておられたというところから始まる。弟子たちはイエスの力の源泉が祈りにあると悟るようになって

いた。そこで、弟子たちはイエスに「主よ。・・私たちにも祈りを教えてください」と願ったのである。そこで教えられたのが、主の祈りと言われるものである。この祈りはだれでも祈ることのできない祈りなのである。

◆マリヤが選んだ「良いほう」を私たちが選ぶことは、現代の忙しい生活を考えるならば、決して容易ではない。むしろ時代に逆行するライフスタイルと言える。しかし、この「良いほう」を選び取らせるような「祈りへの渇き」—靈性に対する渇き—が、現代の教会に訪れようとしている。しかし、私たちがこのことのために、十分な訓練を受けることなく過ぎてきているのではないか。力の源泉である神ご自身を知ることにおいて、なんと貧しい者であることかを認めることから始めよう。

◆今日の教会はラオデキヤの教会のようである。生めるく、神を求めることにおいて、熱くも冷たくもない。そして「自分は富んでいる、豊かになった。乏しいものはなにもない」と錯覚している。実際の姿は、みじめで、あわれで、貧しく、盲目であり、裸であるにもかかわらず、そのことを知らない。まさに、神を知らないことは、本当の自分を知らないことを裏付けている。今日においても、イエスは私たちの心の戸をたたき、共に、主の食卓につくようにと招いておられるのである(黙示録3章14～22節)。

A-01. 靈性の神学の今日的動向

(1) 今日の教会に対する警鐘

◆アリストター・マグラスは『キリスト教の将来と福音主義』(島田福安訳、1995年、いのちのことば社)の中で、「もし福音主義の将来に何らかの長期的な脅威があるとしたら、それは靈性に対する注目不足である可能性が高い。徹底して福音主義的な源泉と見解を持つ形態を生み出すか、再発見しない限り、今日の福音派は、明日に元福音派になるであろう。これはわれわれが今日直面している、最も緊急な責務の一つである。」(p194)と警鐘を鳴らし、さらに福音派の靈性の神学に関しては、バンクバーのリージエント・カレッジ(※注1)に例外的に講座が設けられているだけで、福音派の神学校の盲点となっていると指摘し(p189)、福音派の靈性の神学に関する教育の急務を促している。

◆こうした背景には、これまでの日本の伝道至上主義を考えることが出来るかもしれない。日本の教会の多くが、18世紀にイギリスに始まり、ドイツ・北欧、そして、19世紀のアメリカおよびカナダのリバイバル運動による伝道至上主義の強い影響下にある。そこでは、靈的な信徒を育てることも、また、様々な実際の信徒訓練も、突き詰めると伝道のための手段とする傾向が強かったのではないか。伝道という目的に教会が機能するような教会理解が支配的であった。福音派の多くは、戦後に外国からの宣教師によって始められた教会がほと

んどであるため、開拓者たちは伝道し、そして人々は救われ、そのような中から献身者たちが起こされ、牧師・伝道者としてその働きを続け、教会を建て上げてきた。いわば、Doing(行なうこと)に重点が置かれた。教会の数と規模が拡大するにつれて、次第に、知的な渴望が生まれ、外国に留学して学位を取る人々の数が増加した。この時代は、Knowing(知ること)に重点が置かれた。しかし、今は Being(存在すること)について真剣に考えなければならない時代になってきている。つまり、現代の多くの人々が常に何かに駆り立てられて行動し、まちがった奉仕主義、業績主義、律法主義によって、さまざまな面において疲れ、霊的な枯渇と不毛状態に陥り、何か大切なものを見失ってきたと気づき始めたからである。これまでも Being への問いかけは全くなかったわけではない。しかし、その問いかけは、「今回の伝道集会に何人集まった。」「今年は何人受洗者が与えられた。」「礼拝出席者が何人になった。」といった伝道至上主義、業績主義の声によって、あるいは、また霊的な生命力の欠如した知性至上主義的神学によってかき消されてきた。そのために人々は、明らかに疲れ果て、本当の信仰による安息を見失ってしまっているのである。(※注2) まさにマタイ9章36節にある「弱り果てて倒れている」群衆の姿である。

◆Being とは神との親しい交わりである。神の御前に心を静め、神のみことばを黙想し、神ご自身を思うことである。そのような中で、私たちの存在は神の御前で安息を得るのである。Doing も Knowing も、この Being に根ざしたとき初めて主のみこころにかなうものとなる。

(2) Being による安息の必要

◆目的地に向かってただ走り続けるだけでは疲れ果ててしまう。人は、安息の中でこそ、自分の立っている位置を確認し、自分の信仰の旅を振り返ってその意味を深く考えることができる。今日の<霊性>の見直しの必要はここにある。安息がどうしても必要なのである。

「神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。『立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。』しかし、あなたがたは、これを望まなかった。あなたがたは言った。『いや、私たちは馬に乗って逃げよう。』」(イザヤ30章15、16節)

◆当時のイスラエルも主に信頼して安息を得るよりは、行動することのほうがより安全であるように思われた。いつも行動していないと不安だったのである。そうすることによって、自分自身の内側を見なくてもいいようにしている。そのようにして、自分の行動の動機を突き詰めて考える猶予を自分自身に与えないのである。

◆私たちは、主イエスが弟子たちに語られたみことばを、もう一度、前半だけでなく後半の部分も含めた全体を、よく考え黙想し、その意味するところを捉えて、再出発しなければならない時に来ている。でなければ、アリストアー・マグラスの言うように、「今日の福音派は、明日に元福音派になるであろう」という警鐘がそのとおりになってしまうであろう。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわた

しのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」(マタイ 11章 28～30節)

◆「主のくびきを負って、主から学(ぶ)」ことが何を意味するのか。これこそ、今日の私たちに求められていることではないか。御子イエスが御父の信頼というくびきを負って歩んだように・・・。

(注1)

◆カナダのバンクーバーにあるリージェント・カレッジ(1970年設立)の初代学長がジェームズ・フーストンである。彼はその大学に「霊性の神学」(Spiritual Theology)の部門を設立し、1978年に担当教授、91年には部長となる。この間、キリスト者の霊性、祈り、三位一体と霊性について教え、89年には『神との友情』(Transforming Friendship, 1999年、坂野慧吉訳、いのちのことば社)を、91年には『幸福の探求』(In Search of Happiness, 未邦訳)。92年には『心の渴望』(The Heart's Desire, 2001年、松本曜訳、いのちのことば社)の三部作を発表する。『心の渴望』は、多くの人の生き方を考察しながら、「心の渴望を満たすものは人格的な神との交わりのみである」ことを論じている。ジェームズ・フーストンは、福音的な教会、神学校の中で「霊性の神学」に関してのパイオニア的な存在である。『神との友情』を翻訳した坂野慧吉師は、本の〈あとがき〉の中で、フーストンの霊性の特徴を次のように記している。

- ①**聖書的である**・・・詩篇から祈りを学ぶことができるすばらしい霊性、「主の祈り」から祈りの真髄を汲み取る霊的な洞察、パウロ書簡から、祈りの深さを教える明確な彼自身の祈りの経験。聖書を通して、神の御声を聞きながら、そのみこころを冥想し、みことばを自分自身のものとする信仰。
- ②**歴史的である**・・・過去二千年の教会の歴史の中で、神に導かれた多くの信仰の先達の著書をよく読み学んでいる。聖書から学ぶだけでなく、共に歴史から学び、神と交わり、神に従った多くの先達たちに示された神のみこころを学ぶことが重要であるが、フーストンは、初代の教父から、中世のカトリックの著者からも引用する。そしてそれが聖書的であるかを確かめながら、福音主義の霊性を築く試みをしている。
- ③**経験的である**・・・彼の霊性は、聖書はこう言っているということだけではなく、また教会の歴史の中で、霊的な先達たちがこう言っているということだけでもなく、自分自身の生涯の中でそれを確かめているということである。彼の人間に対する深い洞察は、自分自身への洞察と霊的な経験から生まれたものである。それを、彼は、授業で説き、また文書にしている。
- ④**全生活の領域に及んでいる**・・・霊的ということ、個人の内面という狭い意味でとらえるのではなく、教会の中でも、家庭や職場、そして社会で生き生きと神との交わりの中に生きる霊性を求めている。つまり、「生の全領域においての霊性」を探求している。
- ⑤**三位一体の神の交わり**・・・フーストンの霊性の中核は、三位一体の神の交わりにある。三位一体を単に組織神学の神論の一部に閉じ込めることなく、それを霊性の全領域に広めている。三位一体の神の交わりに似せられた人間、そしてその交わりを失った人間、そしてキリストの贖いによって神との交わりを回復した人間、キリストをかしらとするキリストのみからなる教会、そして伝道、文化、その他すべての領域に広がっている。三位一体の神における交わりの中に入られた祝福こそ、永遠のいのち、すなわち、救いなのである。

◆フーストンは「霊性の神学」(Spiritual Theology)として、神との親しい交わり、神の愛を深く体験する、霊的な経験と神学との一致を目指しているのである。

(注2)

◆ビリー・グラハム師は40年前、17、18世紀に生み出された霊的生活への取り組みの知恵を反映させて、新しいキリスト者に聖書を毎日読むようにと助言した。この「日々の霊的食物」がなければ、飢えて霊的な活力を失うに違いないという懸念からであった。しかしこの助言は、次第に問題をはらむようになった。17、18世紀の「静思の時」の取り組みは、時間的余裕のあった時代の、個人的なプレッシャーの少ない生活を前提としている。かつての「静思の時」は、現代の非常に忙しい社会の中におかれているキリスト者にとってはほとんど不可能である。そのため「静思の時」は、実生活にそぐわない要求をつきつけた形となっている。なぜなら、それは長期間にわたっては持続できない事柄だからである。それは今日のキリスト者にとって、さらなるプレッシャーを生む結果となっている。

A-02 ライフスタイルとしての **Worship & Intercession**

◆**Worship** と **Intercession** は、決して別々のことではなく、むしろ、本来一つのライフスタイルである。この二つは、主イエスが最も大切な戒めとして教えた十戒を総括するものである。イエスは十戒を二つの戒めとしてまとめ、一つは「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」であり、もう一つは「あなた隣人をあなた自身のように愛しなさい」(マタイ22章36～40節)と教えられた。つまり、心から主を愛すること(礼拝)と、自分を愛すること、そして隣人を愛すること(とりなしの祈り、とりなしのわざ)は一つであるということである。このように、神との交わりと人との交わりは密接につながっており、不可分の関係にある。

◆ヨハネの福音書4章23節をみるなら、神は、いつの時代でも、どこにおいても、「霊とまことをもって礼拝する者を求めておられる」ということである。礼拝するとは、主を知ることであり、主を愛すること、主に従い、主に対して生きることである。主をあがめること、主の家に住み、主のふところにくつろぎ、主との親しい交わりを楽しむことである。

(1) 主を知ることを求める生き方として **Worship** への招き

◆真の礼拝者として招かれた者は、旧約を代表するダビデにしても、また新約を代表するパウロにしても、ただ一つのこと集中している。

① **ダビデ**

◆詩篇27篇4節「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」
「一つのこと」という意味は、最も大切なこと、最も優先されるべきこと、それを得るなら

ば、他のすべてのことが正しい位置を占め、機能していく。そんな位置を占めることながらあることをダビデは知っていた。それがあんならば、すべてのものが見えてくるような、的を得るような視点、あるいは鍵となるものである。ダビデはそれを求めた。そしてそのために祈った。ここに彼の偉大さがあった。

◆詩篇 8 6 篇 1 1 節では「主よ。あなたの道を教えてください。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。」と祈っている。

② パウロ

◆ガラテヤ 2 章 2 0 節「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」

◆ピリピ 3 章 8 節、1 2 ~ 1 4 節「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はこのキリストのためにすべてのものを捨てて、それらのものをちりあくたと思っています。・・・私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして追求しているのです。(それは、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったからです。兄弟たちよ、私は、すでに捕らえたなどと考えるはけません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいてうえに召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目指して(キリストを知るという目標)一心に走っているのです。

◆このような生き方を、シンプルライフと称することができる。シンプルライフとは、「(もはや私が生きているのではなく)、キリストが私のうちに生きておられる」というただひとつのあり方を生きることである。この表現の中に、キリスト者の経験の全体が総括されている。キリストからのいのち、キリストとともにあるいのち、キリストのうちにあるいのち、キリストのためのいのちすべてが、この一言で包括的に言い表わされている。

(2) 主のあわれみの通路としての **Intercession** への招き

◆神は、真の礼拝者だけではなく、神のあわれみの心を心として他者に関わっていく人を求めておられる。イエスは「すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかわいそうに思われた」(マタイ 9 章 3 5 ~ 3 6 節)。この「かわいそうに思われた」(ギ)(スプリングニゾマイ)ということばこそ、神のあわれみを意味することばである。

◆ヘンリー・ナウエンは『コンパッション』の中でこう述べている。「あわれみという言葉は自らかかわって、<共に苦しむこと、耐えること>を意味する。あわれみは、傷ついている人のところへ赴かせ、痛みを負っている場へ入って行かせ、失意や恐れ、混乱や苦しみを分かち合うことである。悲惨の中にある人とともに叫びをあげ、孤独な人と共に悲しみ、涙にくれる人とともに泣くように私たちを促す。それはまた、弱い人と共に弱くなり、傷ついた人

ともに傷つき、無力に人と共に無力になることを要求する。あわれみは、人間の状態の中にどっぷりと浸ることを意味する。あわれみをこのように見てくるなら、それは俗に言う親切とか、優しさだけでは説明し切れないなにかがはつきりしてくる。あわれみが、共に苦しむことだと分かると、私たちのうちに往々にして反発や拒絶、抵抗を引き起こすのも不思議ではない。あわれみは、決して心引かれることではないということを知ることは大切なことである。むしろ、それはできれば避けたいものなのである。したがって、あわれみは、自然な反応として生まれるものとはいえないのである。私たちの多くは、苦しむことを回避する者であって、・・・あわれみは、現実には、人間の行動の動機の中にはなりえないものなのである。」と。

◆そのように理解するなら、イエスが弟子たちに「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい」と語った理由が理解できる。このような働き人は神によって召され、神によって遣わされるのでなければ、決して存在し得る者ではないからである。イエス・キリストこそまさにそのような方であった。悲惨な状況に置かれている人間と関わり、とりなすために、神によって送られる働き手とは、まさに、御父のあわれみの心を与えられた人である。このような人を神はいつの時代にも求めておられるのである。したがって、とりなしの祈りという働きも、単なる一つの働きではなく、あわれみの心をもった人が求められているのである。

◆神は、このように、霊とまことをもって神を礼拝する真の礼拝者と同時に、あわれみの心をもって、あわれみの器として人々に関わる働き手を求めておられるのである。収穫とは、単なる働きの数的成果ではなく、神との交わりを喪失した者を、共に苦しむことを通して、三位一体なる神の愛による交わりの中に引き入れること、交わりのいのちを回復することを意味している。

A-03 神と人との交わりの基礎としての三位一体(Trinity)

<はじめに>

◆**Worship**—神との交わり— と **Intercession**—人との交わり—、このライフスタイルは密接なものであり、不可分な関係にある。そしてその関係を成り立たせている土台は、神が三位一体の神であるということである。このことを理解することは非常に重要である。

(1) 三位一体なる神の本質・・・それは愛の交わりである

◆三位一体ということばは聖書にはない。しかし聖書の啓示する神とは、三位一体の愛の交

わりの神である。神は、「御父」「御子」「御霊」なる三つの「位格」(ペルソナ)において存在され、その実体において唯一の神であることを意味する。

◆ $3 = 1$ 、 $1 = 3$ の世界。これは合理的に説明することはできない非合理の世界である。しかし合理的に説明できなくとも、御父、御子、御霊なる神は、永遠なる交わりの神秘の中に存在している。(※注3)

◆創世記から黙示録に至るまで、聖書の神は三位一体として、永遠の愛の交わりの中に生きておられる神である。この神の交わりこそ<永遠のいのち>なのである。後で学ぶように、神によって造られた人間は、実に、この神との交わりを共有するものとして造られたのである。



①交わりの概念を現わす「ことば」の存在

「初めに、ことばがあった。ことばは神と共にあった。ことばは神であった。この方は、初めに神と共におられた。」(ヨハネの福音書 1章1～2節)

a. 「ことば」はイエス・キリストのことである。

◆この方が神と共にあったとは、ただ存在していたということではなく、神と向かい、対話する関係にあったということ、つまり交わりの中にあつたということの意味している。しかも「はじめから」(時間的な意味ではなく、すべての事柄の前提としてという意味)

b. 「ことば」は父なる神をあかしする子なる神のことである。

◆「ことば」は「父のみもとから来られたひとり子」(ヨハネ1章14節)と紹介される。また、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」(同、18節)の聖句は、父なる神と子なる神との交わりがあることを示唆している。特に、「父のふところにおられるひとり子」という表現は、その交わりが親密なものであることを意味する。このひとり子は父を説き明かすために父から遣わされたのである。

c. 「ことば」とは、神と人とをコミュニケーションさせる存在である。

◆「ことば」とは交わりに必要不可欠なものである。それは見ることも、聞くことも、ふれることもできる存在である。ヨハネの手紙第一1章1～3節には「いのちのことば」とも「いのち」とも「永遠のいのち」とも表現される。つまり聖書のいう「永遠のいのち」とは、神ご自身(三位一体)の交わりであると同時に、神と私たちとの交わりのことをいうのである。「ことば」の存在は、三位一体なる神の永遠の交わりの中に私たちを迎え入れて下さる方なのである。これが救いである。

② 御父と御子の関係 および、御父と聖霊(御霊)、御子と聖霊の関係について

a. 御父と御子の相互内在性・・・御子は御父のうちに、御父は御子のうちにある

「子は・・・自分から何事も行なうことができません。」(ヨハネ5章19節)(8章28節)、

「わたしが・・・来たのは、自分のところを行なうためではなく・・・」(ヨハネ6章38節)、

「わたしの教えは、わたしのものではなく・」(ヨハネ7章16節)(ヨハネ14章24節)、
「わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているものではありません」
(同、10節)

◆ヨハネ17章のイエスのとりなしの祈り中にも、「わたしたちと同様に」ということばと「あなたはわたしにおられ、わたしがあなたにるように」「私たちがひとつであるように」という表現が見られる(11節、21節、22節)。これらはみな本質的に同義である。御父と御子の関係は「わたしたち」であり、そのあり方は「わたしたちが一つである」ということであり、そしてその一つということばは「あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように」という関係である。これらは愛による交わりであり、相手の心に深く関わることを意味する。そしてそのような関係は決して一方的なものではなく、相互的なものである。このように御父と御子は、互いに愛の交わりの中におられるのである。(※注4) しかもこのことをこの世において可能ならしめたのが、聖霊なる方なのである。

b. 御父と御霊、御子と御霊の相互内在性・・・御霊は御父と御子のうちにある

◆バプテスマのヨハネはイエスが洗礼を受けられたとき、こう証言した。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを、私は見ました。」(ヨハネ1章32節)

◆イエスの地上の働きはすべて御霊の助けなしにはありえなかった。「神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限にあたえられるからである。」(ヨハネ3章34節)

◆御霊は御子の栄光、御父の栄光を現わす。「御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、・・・わたしの栄光を現わします」(ヨハネ16章13～14節)。「父の持つておられるものはみな、わたしのものです。・・・御霊はわたしのものを受けて、あなたがたに知らせる(すべての真理を)・・・」(ヨハネ16章15節)

③ 父、子、聖霊の御名によって・・・洗礼の恵みとは

◆マタイの福音書28章19節には「父、子、聖霊の御名によって」と言って洗礼を授けるように命じている。ところで、「父、子、聖霊によって」ということばの意味を正しく理解するためには、「～によって」ということばに注意する必要がある。ギリシャ語原文では、εἰς(イス;～のうちに)という前置詞が用いられている。つまり正確には「父、子、聖霊の御名のうちに(入れる)」というニュアンスである。つまり、「その方の覆いの下に入り、その方のものとなる」ことを意味する。つまり、「三位一体の神の交わり(永遠のいのち)の中に入っていく」ということである。このように、洗礼を受けるとは、聖なる神の、永遠の愛の交わりの中に生かされる新しい歩みが始まるということである。

(注3)

◆これまで、「三位一体」を説明するために、いろいろな説明がなされてきた。たとえば、「三位一体」を水の性質にたとえ、水が氷点下になれば氷という固体になり、温められると液体である水になる。さらに熱せられると気体である水蒸気になる、というわけである。それらは形におい

て異なっており、すべて「H20」である。しかしこの説明はほとんど三位一体の説明にはなっていない。あるいは、ウェストミンスター小教理問答によれば、神の本質を「神は霊であられ、その存在、知恵、力、聖、義、善、真実において、無限、永遠、不変な方である」と説明している。また多くの場合、神は唯一であり、父も神、子も神性を持ち、聖霊も人格と神性をもっている、だから三位一体であると説明される。しかしそのような説明は決して十分ではない。

(注 4)

◆この御父と御子の相互内在性をカパドキアの三教父の一人、カイザリヤのバシレウスは、「ペリコーシス」呼んだ。その意味は四つある。第一に「**人格性**」である。これは愛を考える時に不可欠である。人格とは、知性、感情、意志を備えた存在というだけでは不十分である。むしろ人格とは、他者と交わりをもつことの出来る存在といえる。とすれば、神の人格性は三位一体を抜きして考えられない。第二には「**他者性**」である。ひとりひとりの人格としての独自性が確立していなければ、愛は可能とはならない。一方が他方に依存したり、または一方が他方を支配したりする関係は、決して愛とは言えない。第三は「**関係性**」である。真の意味において、ひとりの人格がその独自性に徹底していくなれば、逆説的に、他者との関係に進んでいく。他者との関係に進まない独自性はむしろ自己中心性となる。第四は「**自由**」である。真の人格的な関係における愛は、決して相手を縛ることがない。互いが互いにとって不可欠な存在でありながら、しかし一方が他方を縛って、不自由にするということがなく、また第三者に対して開かれた関係なのである。御父と御子の関係は、まさにこのような相互の関係である。

A-04 交わりの存在としての人間の創造

<はじめに>

◆神はどんな目的を持って人間を創造されたのか。神は言われた。「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。」(創世記 1 章 2 6 節) 神はここで「われわれ」と複数形で語っている。聖書の中で、神は何かを宣言するとき、常に、「わたし」という単数形を用いる。したがって、神がここで「われわれ」と言ったのには、偶然ではなく、深い意味がある。

◆神はここで外部の者に向かって語ったのではない。外部の者に向かって語る場合は「わたし」と言われる。ここで「われわれ」と言ったのは外部の者に向かって語ったのではなく、御自身の内にある三位一体の交わりの中で語ったことを意味する。神はその交わりの中で「われわれと同じようなかたちの人間を創造しようではないか」と語り合ったのである。

◆「われわれに似るように、われわれのかたちに」ということは、人間が神に似ていること、神のかたちであること、それゆえに、神に近い存在者であることを示している。つまり、三位一体の神が交わりの神であるならば、人間もやはり、他の被造物のように神の外側に存在すべき者ではなく、神の内なる交わりに預かるべき存在者でなければならない。

(1) 創世記 1 章 2 7 節の解釈・愛の交わりのとしての男と女、夫と妻

◆創世記 1 章 2 7 節には男と女の創造が神のかたちであることが明記されている。「神はこの

ように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」ここには三つの文がある。それらの文を並べてみると・・・

a. 第一の文は、「神はこのように、人をご自身のかたちに 創造された。」

b. 第二の文は、「神のかたちに、彼を 創造し、」

c. 第三の文は、「男と女とに、彼らを 創造された。」

◆この三つの文は、神は人間を創造したという基本的なことを述べている。最初の文は、神が人間を、御自身のかたちに創造したことを断定している。そして、第二の文は、神御自身のかたちとは、つまり、神のかたちであることを述べている。神は人間を神のかたちに創造した。では、神のかたちとは何か。第三の文がそのことをはっきりと述べている。つまり、それは男と女である。

◆神のかたちとは何か。それは父と子の聖霊による交わり、つまり、三位一体なる存在である。それは人間存在の中では、男と女の互いの愛の交わりとして存在する。

◆神は人間を神のかたちに創造したが、そのことが具体的な形として現われたのは、夫と妻という存在であった。神は三位一体なる方であり、御自身の中で、愛の交わりを持っており、御自身の中で「われわれ」と語り合う存在者である。そして、神は、人間をも、そのような交わりの存在者として創造されたのである。夫と妻は、互いに助け合い、愛し合うことを通して、三位一体なる神を地上で証する者とされたのである。

(2) 女の創造と存在目的

◆以上のことが、女の創造にあたってはっきりと示されている。人間の存在とは、夫と妻が協力する存在である。神は言われた。「人がひとりであるのはよくない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」(創世記2章18節)と。神は人間が孤独な者であることを望まない。そこで、神は、アダムのあばら骨の一つを取ってエバを造った。妻は、夫の体から取り出された。それゆえ、妻の存在の根源は夫にある。妻は夫を助ける者として創造されたのである。すなわち、妻の存在の根源と目的は、夫の中にある。それゆえ、妻は夫を離れて、独自の存在を確立することはできないのである。ただ夫を助けることを通して妻としての自己を確立するよう神から定められている。

◆妻の創造にあたって夫は一本のあばら骨を失った。あばら骨は人間存在の中心を占める大切な部分である。そして、夫のあばら骨の一本は妻の中にある。それゆえに、夫もまた妻なくしては自分の人生を完成することが出来ない。夫は妻の助けを得て始めて、自己の存在を完成することができる。アダムはエバを見て言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」(創世記2章23節)男は、そこに神が備えられた存在、つまり、自分と同じような存在でありながら、自分と違う独自の存在、そして互いに愛し合う存在を見出したのである。

(3) 男と女(夫と妻)との関係は、キリストと教会の関係のひな型である

◆エペソ人への手紙5章には夫婦の戒めが述べられている。妻に対しては、「妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。」

(22-23節)と命じられている。教会の頭はキリストであるように、妻の頭は夫である。それゆえに、教会がキリストに従うように、妻は夫に自発的に従うことが求められている。

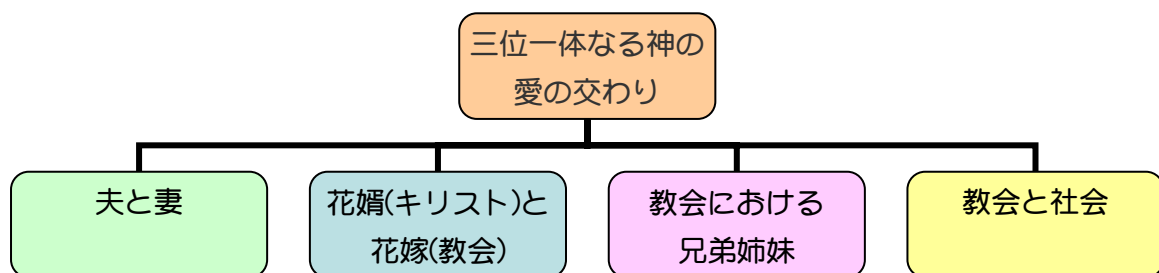
◆また、夫に対しては、「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」(25節)「そのように、夫も自分の妻を、自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は、自分を愛しているのです。」(28節)と命じられている。教会はキリストの体であるように、妻は夫の体である。それゆえに、キリストが教会を愛し、教会のためにご自身を捧げられたように、夫は妻を愛し、妻のために自分を自発的にささげることが求められている。

◆ここには、夫婦の愛による交わりがキリストと教会の交わりのヒナ形として示されている。そして、キリストと教会の交わりは御父と御子と聖霊による交わりのヒナ形である。まさに、神は夫婦の中に三位一体なる神の愛の交わりを実現しようとされたのである。

(4) 教会は三位一体なる神の交わりの投影である・・交わりとしての教会

◆教会は本質的に交わりの神秘であり、「父と子と聖霊との交わりの中に結ばれた民」である。兄弟愛に満ちた教会(共同体)は、この交わりの神秘の深さと豊かさを反映することが求められている。

◆このように、「交わり」は三位一体の神の本質であると同時に、教会(共同体)の本質でもある。私たちは、もう一度、すべてのことにおいて、「三位一体の神の交わり」と「交わりとしての教会」という視点から、聖書を学びなおしてみる必要があるのではないだろうか。そして、学んだことを実践してみることが求められているのではないだろうか。



◆「交わり」は三位一体の神の本質であると同時に、教会(共同体)の本質でもある。私たちは、もう一度、すべてのことにおいて、「三位一体の神の交わり」と「交わりとしての教会」という視点から、聖書を学びなおしてみる必要があるのではないだろうか。

<はじめに>

◆ヘンリー・ノウエンはその著『いのちのしるし』(女子パウロ会、宮澤邦子訳、2002)のはしがきの中で、「わたしたち人間は恐れに満ちた存在である。・・・恐れはわたしたちの内面深くまでしみこんでいるので、気づいているにせよ、いないにせよ、わたしたちの選択や決心の大部分はそれによって左右されてしまう」と述べている。(※注5)ひとたび恐れが私たちの生活を支配するようになるやいなや、私たちは愛の家から語られることばを非現実的なものとして信じられなくなってしまう。恐れをかき立てる現実的な世界のただ中で、果たして私たちは、「全き愛は恐れを締め出します」という真理を知り、それによって恐れから自由になることが出来るのだろうか。

◆ヨハネの福音書15章から<いのちのしるし>としてイエスが弟子たちに語っておられる三つのことばを選び、いのちのしるしについて考えてみよう。

- ①「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたのうちにとどまります。」(4節)
- ②「人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。」(5節)
- ③「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びかあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。」(11節)

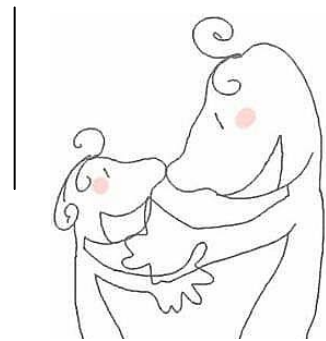
◆これらのことばは、私たちが「恐れの家」から逃れ出て、「愛の家」に住むようにとの御父からの招きの声である。

(1) とどまること

◆「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたのうちにとどまります。」(ヨハネ15章4節)(※注6)「とどまりなさい」という招きは、「わたしの家に住みなさい」との招きである。

◆親密さは共に住むことから生まれる。家族が共に住む家は、愛を育てる苗床である。聖書において、家に住むことは、神と私たちとの交わりについて明確なかたちをイメージさせるものとして表現されている。神が家を持っておられて、その家に私たちも住む。これは神と私たちとの交わりが最も親密であり、最も穏やかであることを詳しく説明するイメージである。

◆「わたしがあなたがたのうちに住むように、あなたがたもわたしのうちに住みなさい」とイエスが言われるとき、私たちは本当に「自分の家」と呼ぶことのできるような、親しみに満ちた、フレンドリーな場所が提供されているのである。家とは、私たちが恐れを抱く必要のないような場所である。そこでは私たちは心の防御を捨てて、心配事からも、緊張からも、



作画 S. Shinohara

自由になることができる。私たちが笑ったり、泣いたり、抱き合ったり、踊ったり、ぐっすり眠ったり、食べたり、飲んだり、遊んだり、一緒に語らいをすることのできる場所。私たちが休息し、くつろぎ、心が癒され、そこにいることの心地良さを感じるようなイメージの家。それこそが愛のホームである。しかし、私たちの世界にはそうした家を持たないホームレスの人々が大勢いる。ホームレス—これこそ現代の悩みを最もよく表すことばかも知れない。ハウスはあってもホームがないのである。

◆キリスト教は宗教ではない。神の家で共に住むという現実(リアリティ)である。そこには親しい関係があり、理解があり、受容があり、愛と信頼がある。そうした親しい人格的な交わりこそいのちなのである。イエス・キリストはそうしたいのちの絆の中に私たちを招いておられる。

①放蕩息子の帰郷(ルカ福音書 15章のたとえ話)

◆放蕩息子が父の家に帰ったたとえ話があるが、聖書は「父の家に帰ること」、これが救いであり、いのちなので教えている。しかもその家は、失われることのない、永遠の親しい家庭、愛の交わりのある家である。父の家とは、御父、御子、御霊なる三位一体の神の愛の交わりの親しさが満ち溢れているところである。

②詩篇 23篇の結論

◆「私は、いつまでも、主の家に住まひましよう。」(詩篇 23篇 6節 b) これがこの詩篇の結論である。ダビデはその生涯にわたって「主の家に住むこと」を優先すべき事柄として求めた。(詩篇 27篇 4節)

◆神の備えておられる家は、私たちがアットホームに感じる親しさにあふれた愛の家である。しかし、「恐れ」はそうした親しさにあふれた家を作り出す事はできない。生存の不安、存在の不安は、しばしば私たちの思いと行動をうながし、さらなる恐れの家に住むことを余儀なくさせる。ただ、主イエスの語られることばを信頼することを通して、はじめて、主の家に、愛の家に住むことができる。イエスは「わたしから離れてあなたがたは何もできない」と言われたように、イエスにとどまり、イエスのことばと愛に信頼するというフレンドリーな関係を築くこと—これがすべての基盤である。

(2) 神の友となること

◆いのちのしるしとしての「親密さ」について、ヨハネの福音書 15章には、もうひとつの大切なことばを用いている。それは「神の友」ということばである。「わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」(15節) 私たちは神の友として生きるように招かれている。ハンス・ビュルキ師(※注 7)はこう述べている。「私たちの根本的な召命とは、何になるとか、何をするとかではなく、私たちが神の友となることです」と。

◆「友」という関係は、自分は自分であり、友は友であるという互いの独自の存在を大切に
関係であり、決して互いを支配しない関係である。それでありながら、互いが愛と信頼によ
って深く結びついている関係であり、その関係の中で互いが成長し、いよいよそれぞれの独
自性が豊かにされている関係である。さらに、この友としての関係に新しい友が加わって
くる。この開かれた関係こそ<とりなしの働き>といえる。主は私たちを信頼し、ご自身の重
荷を友として私たちに担なわせ(「共働」)、主のご計画を共に実行することを期待してくださ
っている。

(注5)

◆ヘンリー・ナウエンは、「いのちのしるし」という本の中で、いのちのしるしとして三つのもの
をあげている。その一つは<親しさ>、二つ目は<豊かさ>、そして三つ目は<喜悦>である。
これらの三つのことばは、ナウエンが、ラルシュ共同体の創始者ジャン・バニエの招きで、ある
黙想の会に参加し、その黙想の間にバニエが口にしたことばであった。後に、ナウエンがイエス
の弟子たちに向けた決別説教を読んでいたとき、バニエが語っていたことばを思い出し、ヨハネ
福音書において、これらの三つのことばの重要性に目が開かれ、これらのことばがヨハネ福音書
全体に織り込まれた金の糸であることに気づかされたと述べている。そのインスピレーションに
よってこの本が著わされた。その本から教えられるところは多い。

(注6)

◆7節では「わたしのことばにとどまる」というふうに、9節では「わたしの愛の中にとどまり
なさい。」と言い換えられている。

(注7)

◆ハンス・ビュルキ師(1925年スイス生まれ)は福音主義の立場に立ちつつ「福音主義の霊性」を
探求している一人である。『主の弟子となるための交わり—日々の生活の中で霊性を培う—』(多井
一雄訳、いのちのことば社、1999)という本を書いている。ビュルキ師は、その著書の中で、日常
生活に根ざした信仰生活を確立する道として<交わり>という視点から、聖書の教えを深く掘り
下げようとしている。その中で、神に対する信仰は人間関係の中で吟味されて、真実なるもの、
純粋なものになると教えている。

(1) 関係における豊かさ

◆イエスは言われた。「人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。」(5節) 「多くの実を結ぶ」とは豊かな果実を表わす。ここでいう「豊かさ」とは、お金やモノのことではなく、関係(関わり、交わり)の豊かさである。イエスはその関わりにおける豊かな果実を私たちに与えると約束しておられる。

(2) 豊かさを妨げる恐れ

◆人は生まれてから親という存在によって関わりをもつ。その関わり方はその人の人生のすべてを決定付けるとも言える。精神病は関係の病であり、人と人との関係においてもたらされる病である。人は本来、他者とのあたたかい関係を持っていなければ、安定して生きていけない存在なのである。

① 恐れによる不毛さ

◆不毛は、恐れのもっとも顕著な現われ方の一つである。恐れを感じる時、私たちは自分のうちに引きこもり、豊かな関係を築くことができなくなる。ついには他者に背を向け、手を差し伸べることをしなくなる。そして自ら作り出した防御の態勢へと退行していく。その結果、不毛に陥る。不毛とは自分が本当に生きていないという経験であり、役に立たないという感覚である。人からほめられても否定し、他人の親切を素直に喜べない。あるいは勘ぐってしまう心。期待した関係が得られなければ、その怒りが中傷や陰口となって表われる。冷淡、しらけ、孤独は、みな期待した関係を得られなかったことの結果である。逆に、関係をさらに欲するゆえに起こる、甘えやしつこさという心の依存。これらはみな愛に病んでいると言える。

② 恐れによる生産性への駆り立て

◆恐れは、関係性における不毛に導くだけでなく、生産性に駆り立てる。つまり、生産物を私たちが自分で作り出さなければならない、何かをしなければならないという脅迫である。業績や成功を強調する今日の社会では、私たちは生産性の高さや実り豊かさが同じものであるかのような生き方をしている。生産性の高さがある種の名声を確認して、役立たずであることへの恐れを取り除いてくれると思っている。そのためにいつもプレッシャーを感じるのである。人間としての価値が手や頭で作り出すものに左右されることによって、私たちは恐れのもっとも被害者となる。拒否や批判に対して非常に傷つきやすくなる。生産性は決して私たちが渴望する深い帰属感を与えることができないことを知らなければならない。生産性と豊

かさとは別物なのである。

(3) 豊かさとお愛

◆豊かさは、私たちが自分の人生をコントロールするのをやめて、神に信頼して、自らを投げ出すときもたらされる。果実は親しい愛の土壌からのみ育つことができる。それはまさに作り出すものではなく、受け取るべき贈り物である。果実と生産性とを区別するのは、まさしくこの点にある。実り豊かな生活の側面としてヘンリー・ナウエンは三つあげている。

① 傷つきやすさ

◆私たちが互いを恐れている限り、私たちは武装して防御的な生活を送る。しかしそのような生活からはなんの果実も育たない。私たちは傷つきやすいという弱点を持っている。防御の盾を手放して、互いを信頼し合い、共有している弱点を認め合うとき、私たちは共に実り豊かな生活を送ることができる。

② 感謝する心

◆私たちが成功すること、他人の前に自分の価値を証明し、ライバルを打ち負かすことに気を取られているなら、感謝することはむずかしい。なぜなら、感謝は他人に依存し、人からの助力や支援を受けることを前提としているからである。しかし真の感謝とは、存在するすべてのものは神からの尊い贈り物ととらえ、他の人々と分かち合うことを喜ぶ心である。

◆ヨハネ福音書の6章5～15節にあるパンの奇跡の出来事で、イエスが空腹の群衆を見て、この人々に食べさせるパンをどこで買おうかと考えていた時、弟子のアンデレが「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人々では、何の役にも立たないでしょう。」と言った。しかしイエスはそれを受け取り、感謝の祈りをささげてから人々に分け与えられた。すると12の籠がいっぱいになるほどのパン屑が集まった。このように感謝することは神の家の豊かさを経験することとなる。たとえ貧しいように思えること(モノ)でも、それを神からのものとして感謝して受け取る時、そこに豊かさがもたらされるということである。

③ 人を気遣う心のゆとり

◆心に余裕がなくなると、大抵は自分のことしか考えられなくなる。そうすると人に対して気遣うことができなくなってしまう。普段はとて素晴らしい人なのに、仕事をしているときには、すぐくそっけなかったり、愛想がなかったり、笑顔がなかったりする。それが全部「仕事をしているから」という理由で認められているのが今の世の中だったりする。

◆心に余裕がなくなっている自分を発見すると、いつも本質的に自分は自分のことが一番だと思いき知らされる。人間の本質は、自分に余裕のなくなった時に確実に表面に出てくるものである。しかし、余裕のないときにこそ、通常の方法で相手に接することができるなら、こ

れこそ豊かないのちの果実と言える。

A-07. 交わりのいのちのしるし <3>喜び

(1) イエスの喜び

◆「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにありあなたがたの喜びが満たされるためです。」(11節)とイエスが言われたように、<いのちのしるし>の第三は、「満ち溢れる喜び」である。「満ち溢れる喜び」こそ、神の家における親しみがもたらす実り豊かな生活の報酬であり、イエス・キリストと関わりを持つすべての人に、例外なく、約束されているものである。しかし、この喜びを持って生きている人は決して多くはない。

◆ここでいう「喜び」とはなにか。この世における多くの歌の歌詞の中には、喜びにあふれた歌というものはいくつかある。むしろ、愛の悲しみ、愛を希求する歌が多い。それはなぜか。悲しみは多くの人々が共感できるものをもっているからである。その証拠に、人が悲しみを経験すると、悲しい歌を聞きたくなったり、歌いたくなったりする。しかしゴスペルはその反対で、その内容はジーザスに出会った喜び、愛されている喜び、決して失われることのない喜びがあることを歌っている。しかし、多くの人はその歌を歌いながら、その喜びを知らずに歌っている。

◆弟子たち70人が伝道の旅から喜んで帰って来た。「大成功」だったからである。「主よ、あなたの名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」彼らは有頂天だった。そのとき、イエスは「ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」(ルカ10章17～20節)と言われた。「あなたの名が天に書きしるされる」とはどういうことか。それは「たとえ地上で大事なものを失っても、ゆるがない喜びと安心を持てること」である。決して見離され、見捨てられることがない安心。たとえば、自分の父、母が私を見捨てたとしても、神は私を見捨てないという安心感、それは、神(父)とのゆるぎない信頼関係を持つことによるのみ与えられる喜びである。たとえ地上のものを失っても、ゆるがない喜びと安心を持っていることを喜ぶこと。それは親しい神との交わりから来るものである。それはまた「聖霊による喜び」という言い方もされる。ともかく、この喜びとこの喜びをもたらしてくださった方を伝えることが伝道である。

◆「天に」とは、「神に」ということと同義である。あなたの名が神の心に書き記されているということは、いつもあなたのことを忘れることなく、心にとめ、関わり続けてくださるということの意味する。そして神の子どもとして特別に扱ってくださるということである。

(2) 幼子のように、神の愛の中にとどまること

◆このようなことを、「賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださった」とイエスは父をほめたたえている。ルカ 10 章 21 節。「幼子たち」とは、心の素直な者、従順な者という意味である。それゆえ「賛美は心の直ぐな者たちにふさわしい。」(詩篇 33 篇 1 節)のである。

(3) 喜びはあなたの力となる

◆イエスは、ヨハネ 15 章 9 節で、「父がわたしを愛されたように」と言っている。10 節には「わたしの父の愛の中にとどまっている」という表現がある。御父と御子の関係は、まさにゆるぎない愛の関係で結ばれていた。そうした愛の家にイエスは私たちを招いておられるが、そこで実際に暮らしてみた者でなければ、その喜びは理解できないかもしれない。

◆その「喜び」というものは、単なる感情的なものではない。もちろん感情的なものを含んではいるが、決して表面的なものではない。それは私たちの存在が無条件に受け入れられていることからくる深い喜びであり、それゆえそれは私たちがどんな困難を乗り越えさせていく力でもある。

◆神とのゆるぎない愛による信頼関係こそ、喜びにあふれて生きる力である。実に、ネヘミヤはいみじくも、「主を喜ぶことはあなたがたの力である。」(ネヘミヤ 8 章 10 節、口語訳)と言った。

(4) あふれるばかりの喜びの油

◆あふれるばかりの喜びの油(ヘブル 1 章 9 節)。これがいつもイエスの中に流れていた。これがイエスのミニストリーの秘訣である。喜びの油が豊かにあること、そしてそれが神の玉座から流れて出て、流れ続けていること、それで私たちは神の愛に燃え、燃え続けていることができる。これが秘訣である。

◆イエスが公生涯に入られる前に洗礼を受けられた時、天から声がした。「これはわたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」と。父に愛されているという確信、自分の存在を喜びとして下さっていることの確信、・・・これは聖霊の助けを通して与えられる。この確信こそ、「聖霊による喜び」と言える。イエスの公生涯の働きはまさにこの確信の中でなされていった。そしてそれは絶えず祈りの中で再確認されていったのである。

◆自動車に潤滑油を補充しなければ、やがて運転の最中に突然にエンジンが止まることがあるように、私たちも神への奉仕の中で燃え尽きてしまうことが起こる。「燃え尽きる」のは神の仕事をしなからではない。神の仕事を一生懸命しながら燃え尽きることはある。それは喜びの油が欠如するからである。しかし、喜びの油が流れるならば、燃え尽きることはなく

なる。私たちが聖霊の内に油を注がれているなら、神は私たちを通して多くの働きをなすことができるのである。

A-08 交わりのいのちのしるし <4>自由

◆<いのちのしるし>として最後に取り上げたいものは<自由>である。それはかたちとしての自由ではなく、霊的な自由である。それは、自分の内に存在するある恐れや不安から、また肉の弱さから解放されることである。つまり自分自身から解放されることによって、神に対しても、人に対しても自由になることができることを意味する。

◆自分の心の傷を見ることができるようになるということは、自分に対して心が自由にされたことのしるしである。それはまた心が主に向いていることのしるしでもある。覆いが取り除かれて解放されることによって、私たちはありのままの自分を受けとめることができるのである。

◆しかし、私たちは目に見えるものに捕らえられやすい。たとえば、規則や習慣、伝統、あるいは一つのスタイルといったものにこだわり、その中に安心を求めてしまいやすいのである。聖書の時代には律法学者がそのよい例であるが、私たちもそうした律法主義に陥ってしまう弱さを持っている。つまり、自分たちの信仰生活で繰り返していることがいつのまにか規則のようになり、それを守らないと自分が属している教会や交わりからはずれてしまうという恐れが心に築かれていく。そしてそれはやがて形式化し、それを守っていくことが自分の中に安心感を与えるようになる。そしてひとたびそのような方向になると変えることは難しいのである。人にもそれを要求するようになり、できなければ裁くようになる。ここに私たちの弱さがある。悪循環と同時に、それは居心地の良い信仰生活を送ることを可能にする—これが律法主義である。そして恐ろしいことに、律法主義になればなるほど、自分の弱さが見えなくなってしまうのである。

◆このような律法主義から解放されるためには、私たちが真理の光であるイエスによって自分の本当の弱さを認めることである。イエスは言われた。「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にする」(ヨハネ8章32節)と。真理を知るとは、私たちの本当の姿を認めることであり、その私たちに対して神は恵み深くあってくださるという事実を知ることなのである。

〔附記〕

A-05～A-08 でのソースとなった『いのちのしるし』の著者、ヘンリー・ナウエンについて

◆1932年オランダで生まれたカトリック司祭で、生涯の多くを母国オランダの神学校、アメリカ・ノートルダム大学、イエール大学、ハーバード大学の神学部で牧会学、牧会心理学の教授

として過ごす。教育者、著作家、説教者として名声を博したが、著作では成功の背後にある深い渇き、葛藤や誘惑、弱さや迷いを告白している。引退後、生涯最後の十年間をカナダ・トロントにある知的障害を負った人々が生活するラルシュ共同体（創設者ジャン・パニエ）の牧者として生活。そこで彼が奉仕した人々から「多くの良きものを受け取る」という体験をし、真の魂の安息を得たと語っている。



◆『イエスの御名で』『いま、ここに生きる』はそのころの体験が基になっている。1996年、ナーウェンは心臓麻痺で64年間の生涯を閉じた。彼の著作はカトリック、プロテスタントの枠を超え、幅広い支持を受けており、近年日本ではナーウェンの著作もきっかけになって「霊性（スピリチュアリティ）」への関心と求めが深まっている。

A-09 主との親しい交わりを実現する Life style <1>

<はじめに>

◆チャールズ・スウインドル師は『全能の主との親しい交わり』（太田和功一訳、いのちのことば社、2001年）の中で、30年にわたる牧師としての忙しい働きから解き放たれた期間（2年間）について次のように述べている。「この期間は、私にとって今までにない特別な時です。日々の忙しさは相変わらずあるものの、仕事に追い立てられることは少なくなり、物事をじっくり考え、こころの思いを書き留める時間が増えた。音楽にたとえれば間奏曲のような時で、こころから必要としていた静まりの時・思い巡らしの時を持つ事ができた」と。著者にとってこの2年間は「計り知れないほどの価値」があったという。

◆今日の霊性における問題点を一言で言うならば、それは主との親密な交わりの欠如である。いろいろな活動やプログラムがあっても親密さが喪失している。それゆえに<浅薄さ>が教会を覆っているという現実である。いつも主の家に住まうことを誓ったダビデ（詩篇27篇4節）、キリストを知ることを目指したパウロ（ピリピ3章8節、12～14節）。チャールズ・スウインドル師は、その上記の著書の中で、全能の主と深く親しい交わりを持つためには四つの決断が不可欠であること、そして、その一つ一つのために、それぞれ必要な訓練がある

としている。

◆その四つの決断と訓練とは以下のことである。

- ①生活を整理し直すという決断・・・・・・・・・・シンプルであること(**Simplicity**)の訓練
- ②静まるという決断・・・・・・・・・・沈黙すること(**Silence**)の訓練
- ③静謐(せいひつ)さを培うという決断・・・・・・・・・・ひとりになること(**Solitude**)の訓練
- ④主に信頼し尽くすという決断・・・・・・・・・・明け渡すこと(**Surrender**)の訓練

◆これらの四つのことを実践することは、私たちの住む社会、生活の場においては決して容易なことではない。むしろ今の時代に逆行することと言える。教会においても、これらの訓練を実行することはとても難しいという現実にある。キリストのいのちにあふれるために、何を捨て、何を求めるかという今日的課題に対するチャレンジとして、スウィンドル師の挙げたポイントを援用し参考にしながら、主との親しい交わりを実現するライフ・スタイルとして以下のことを提案したい。

シンプル・ライフの勧め (※注8)

◆シンプルライフとは何か。以下のように、いろいろな意味合いがある。

- ①質素で、贅沢をしない生活をする
- ②無駄のない生活をする
- ③一本しっかりとした筋の通った生活をおくる
- ④何が最も大切なのかを知って、そのことに集中して生きること
- ⑤満ち足りた心をもっていること

◆キリストから与えられた「いのち」と私たちのライフスタイルとは密接な関係をもっている。私たちの生活に多くの浪費がないかを点検し、金銭のみならず、時間、食事、衣服、住居、家具、旅行、余暇等・において、それはどこまで必要なものかを考えなければならない。パウロは愛弟子のテモテに「満ち足りる心を伴う敬虔(信仰)こそ、大きな利益を受ける道」(テモテ第一、6章6節)であると教えた。私たちは目で見るものをほしがる。それがなくても生きていけるものばかりに・・・。知らず知らずのうちに私たちを蝕んでいる現代の物質文明の毒。その毒に犯されて、しなくても良い苦勞をし、やらなくてもいいことをやり、心をわずらわせてはいないだろうか。「人はパンのみにて生きるにあらず」とは、「パンよりも大切なものがある」ということである。しかし実際、心が飢えてくると余計なモノをたくさん買ってしまおうという傾向がある。

◆儉約した生活、簡素なライフスタイルの目的は私たちが必要な時のために蓄えておくためのものでなく、むしろ「多く与える」ためである。しかもそれは自発的でなければならない。

◆五つのパンと二匹の魚による給食の奇跡(しるし)の真意は何か。乏しいものでも神に感謝して受け取る時に、神は私たちに<満ち足りる心>を与えてくださるということである。そしてイエスは言われた。「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る

食物のために働きなさい(働く=追い求めること)。それこそ人の子があなたがたに与えるものです。」(ヨハネ6章27節)と。

◆イエスは「人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」(マタイ16章24~26節)とも言われた。全世界を手に入れても人は決して満足しない。今、私たちに必要なものはもっと多くのモノではなく、神とともに生きることを通して<満ち足りる心>をもって生きるシンプルライフである。イエスはマルタに「どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだ」と言っている(ルカ10章42節)。(※注9)

◆自分の生活の中において、もう一度本当に必要なものが何かを確認してみる必要がある。食生活、金銭、時間、人間関係、関心・・・など。

(注8)

◆チャールズ・スウィンドル師は、全能者と親しい交わりを深めるために、生活を整理し直すことが不可欠だと述べている。その提案の中身の第一は、忙しさから解放され、生活の歩調をゆっくりとしたものにする事だとしている。競争社会の中でストレスは増大するため、その緊張感からの解放は必須となり、その解放のためにさらに多くのものを求めるようになる。そして、そのような生活の中で誘惑の餌食となると警告している。第二の提案は、ねたみをやめることであるとしている。ねたみは神のことよりも自分や他人のことに一番の関心がいてしまい、その行き着くところは行き止まりだから、としている。

(注9)

◆シンプルライフという点から考えるならば、ひとつのモデルとして修道院の聖務日課がある。初期における聖ベネディクト派の修道士たちの生活は、毎日3時間を信仰に関する読書、5時間の共同礼拝、そして6時間の労働によって修道院での生活を成り立たせている。このようにして、彼らはいつもキリストにとどまる生活をしようとしたのである。聖ベネディクトが定めた聖書日課のスケジュールは、季節によって多少変動はあるが、午前2時が起床時間であった。その流れにある北海道の函館にあるトラピスト修道院の生活では、修道女(士)たちは午前3時半起床である。

神の前に沈黙すること(静まること)

◆全能の主との親しい交わりは訓練を必要とする。その第一は生活をシンプルにすることであった。次に必要な訓練は、沈黙して神の語りかけを聞くことである。もちろん、祈りは神との対話であるゆえに、こちらから語りかけ、願ってよい。けれども、こちらの願いに対して神が何とお答えになるか、神が自分に何を求めになるか、心の耳を澄ましてよく聞き取る必要がある。そうでなければ、祈りはこちらからの一方通行の語りかけとなり、結局は自己中心な祈りとなってしまう。

◆詩篇 62 篇 1 節「私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。」

62:1 Truly my soul silently waits for God

◆静まりの時をじっくり持たないでは、神とより深く、またより親しく交わることは決してできない。この静まりの時は最も稀な経験と言える「完全沈黙の時」も含まれる。

詩篇 46 篇 10 節 「静まって、わたしこそ神であることを知れ。」

46:10

Be still, and know that I am God; (NKJV)

(still・・・とどまって、だまっただままで、しんとして)

"Stop fighting," he says, "and know that I am God, (TEV)

抵抗をやめて

◆ここで私たちが命じられているのは、直訳すれば「止まること」である。それは休むこと(“セラ”すること)(※注 10)、リラックスすること、手放すこと、そして神のために時間をとるということである。じっとして静まり、神の御前に耳を澄まし、待ち望むことである。忙しい生活となんと無縁な経験であるうか。しかし神を深く親しく知るためにはこの訓練が必要である。もし霊的生活に深みが増すことを望むならば、沈黙は不可欠なのである。

◆ある人は、沈黙は「私たちのたましいのうちにある火を守ること」だと言っている。沈黙は、私たちの魂の刃を研ぎ澄ませ、天の父なる神から送られるかすかな合図に対して敏感にしてくれる。ややもすると、私たちは、騒音やことば、また、気が変になりそうな超過密スケジュールなどによって感覚が鈍り、神のかすかな細い声が聞こえなくなり、神の触れてくださる御手に対しても無感覚になってしまうからである。ゆっくりとした時間を沈黙のうちに過ごすことは、霊的なことにより敏感になり、共にいてくださる神とその恵みをより深く覚えるという経験をすることができる。一言で言うなら、沈黙は霊的な「深まり」の経験である。

◆沈黙について、マザー・テレサは次のように語っている。

「私たちは神を見いだす必要があります。神を騒がしく落ち着きのないところで見いだすことはできません。神は静けさの友なのです。自然をご覧ください。木や花、そして草は静かに

成長していきます。星や月や太陽をご覧なさい。なんと静かに動いているのでしょうか。沈黙の祈りのうちに、多くを受ければ受けるほど、私たちの活動においてもっと多くを与えることができるのです。」

◆確かに、現代のようなインスタント化の時代における私たちは、黙って待つことは苦手である。しかし沈黙の中で心を静めることは極めて重要なのである。聖書には「すべての肉なる者よ、主の前で静まれ。主が立ち上がって、その聖なる住まいから来られるからだ。」（ゼカリヤ2章13節）とある。黙ること、沈黙することは何もしないことではない。それは普段の生活の中で聞き取りにくくなっている神の声をしっかりと受けとめる時なのである。

◆しばらく沈黙の時を持って、今日、あなたに向けられた神の語りかけを心に刻み込んでみよう。

(注10)

◆詩篇の中にしばしば「セウ」という小さな語が見られる。39の詩篇に71回でてくる。「セウ」ということばは、音楽の記号の一つで、「休め」とか「ちょっと休止せよ」という意味である。「セウ」は音楽の一部である。私たちは「音」だけが音楽だと思っても知れないが、しばしば「休み」は「音」と同じくらいに効果的なのである。この小さい歌の記号である「セウ」から、私たちの信仰生活について大きな益が与えられる。

◆この「セウ」は換言するならば、『隠遁への召命』（身を隠すこと）といえる。ドイツのマリア姉妹会を立ち上げたバシリア・シュリンク女史は、預言者エリヤがアハブ王に神のことばを進言してから3年余の間、身を隠すように主が命じたように、彼女が聖堂の建設を終えた後、主は彼女を隠遁、孤独の中へと導かれた。彼女は典型的に社交的な、活動的な人物であったが、神は彼女を隠遁へと導かれた。はじめ彼女はその意味を悟ることができなかったが、やがてその隠遁生活から、現代における預言的な著作が数多く生み出された。隠遁生活とは主の前にひとりになることであり、それはイエスにとどまり完全にゆだることである。イエスと共にそれまで以上に多くの時間を過ごすことである。それを主ご自身が望まれたのである。」（バシリア・シュリンクの70年の歩みをするした霊的自叙伝『キリストの花嫁』、マリア福音姉妹会出版）参照。

A-11. 主との親しい交わりを実現する Life style <3>

ひとりになること

◆「ひとり」ということばには、孤独とか寂しいとかネガティブなイメージがつきまとう。しかし本当にそうであろうか。勉強や仕事や予定に束縛されず、ひとりで過ごす時間の豊か

さを私たちはどこかに置き去りにしてはいないだろうか。ひとりになるという行動は、今日、精神衛生的な面や社会心理学的な面からも推奨されている。その理由は、人間には生物学的にみな縄張りがあり、その縄張りが侵害されることでストレスになるからである。会社で、家庭で、教会等で人と一緒にいるということ自体がストレスとなる。夫婦であっても、あるいはどんなに親しい、好きな人と一緒であっても、やはり、ひとりになる時がないと人間は生物学的に疲れてしまうのである。ましてや霊的な生活においてひとりになる大切さは言うまでもない。もし、ひとりになるとき心が集中せず散漫になってしまう人には、なおのこと、この訓練が必要なのである。

◆ドイツのナチスに立ち向かった牧師、ボンフェッファーはその著『共に生きる生活』（森野善右衛門訳、新教出版社、1975年）という本の中で、ひとりになることについて次のように述べている。「ひとりであることのできない者は、交わりに入ることを用心しなさい。交わりの中にいない者はひとりであることを用心しなさい。・・・ひとりである日がなければ、他者と共なる日は交わりにとっても、個人にとっても、実りのないものとなる。」と。ボンフェッファーはここでひとりになることと、共に生きることの不可欠な関係を述べている。スウィンドル師は「ひとりで過ごす時、神は私たちのこころの奥底を探り、私たちの眼を開いて、しっかり見なければならぬところを見るようにしてください。ここで神は私たちが他の人から隠しておきたいことに向かわせてくださるのです。」と述べている。つまり、ひとりでいることの訓練は自己吟味にあるとしている。

◆詩篇の作者は徹底的な自己吟味の必要を認めていた。そして自分の心と思いの一番奥まで調べてくださるように神に願っている。

「主よ、あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。・・・神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」（詩篇 139 篇 1～3、23、24 節）

A-12 主との親しい交わりを実現する Life style <4>

主に信頼して明け渡すこと(ゆだねること)

◆神を礼拝する者にとって明け渡し(ゆだねること)は非常に重要である。明け渡しは、私たちの将来を、意志を、夢を、夫や妻を、財産等を自分のものとして主張する権利をすべて放棄することである。あるいは、私たちの一番奥にある宝物倉の錠前を開く鍵を主に明け渡すこ

とである。主は完全に信頼できる方であるゆえに、この方にゆだねことは非常に重要なことである。聖書はすべてのクリスチャンに主を信頼してゆだねること、明け渡しを勧めている。

「あすのための心配は無用です。なぜなら、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられるからです。」（マタイ6章32～34節）

「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」（箴言3章6節）

「あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない」

（箴言16章3節）

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」（詩篇37篇5節）

◆私たちに起きるすべてのことは、神の御旨と神の許しによることであり、私たちに必要なものであることを堅く信じる必要がある。そしてこのように確信するならば、私たちはすべてのことについて感謝し、満ち足りるようになる。また明け渡しは、過去を忘れ、未来を神に委ね、現在を神にささげることでもある。そして今、この瞬間に、満足することである。

◆神の主権にすべてを明け渡すこと—これこそ神への応答として私たちができる最高の従順の行為である。旧約のヤコブのペニエル経験(創世記32章)は、主にゆだねることの難しさを物語っている。しかも自分の力でゆだねることは不可能に近いことを教えられる。主の使いがヤコブのつがいをつたうことによって、ヤコブはイスラエルと名前が変えられた。この経験は私たちになにを示唆しているかを考えてみよう。

A-13 主との親しい交わりを妨げるもの <1>

<はじめに>

◆私たちの神との関係は、人々との関係と互いに不可分に織り合わされている。イエス・キリストのメッセージの中核は二つの要素からなっている。ひとつは神との内的な交わりの生活の必要性(**Worship**)と、世にあって、神のいのちを反映する生き方への招き(**Intercession**)である。それを実現させるのが豊かな祈りの生活であることを学んできた。しかし、その祈りの生活を妨げる障害となるものがある。ジェームズ・フーストンは『神との友情』(第2章)の中で、祈りの生活の障害となるものを以下のように四つあげている。これらのものは深いところでみなつながっている。本講義では、以下の(1)と(2)についてのみ取り上げてみたい。

(1)心の傷

(2)行動主義(自分を駆り立てている内なる衝動)

(3)神への不信

(4)内なる暗闇という恐れ

(1) 心の傷

①「心の傷」とはなにか

◆心の傷とは、ほとんどの場合、人との関係一ゆがめられ、損なわれた人格と人格の関係一から受けた傷のことである。(※注 11)

◆創世記 1 章にあるように、神は人間を<神のかたち>に創造された。「神のかたち」とは、神ご自身の存在のあり方、つまり、父なる神、子なる神、聖霊なる神が、三つのパーソナリティーを持ちつつ、真の愛の交わりにおいて一つであることを示している。人間もそれぞれのパーソナリティーを持ちながら、互いの交わりの中に生かされている存在なのである。人間は、神との交わりや人との交わりの中であってこそ、真に生きる者とされる。しかし人は神のみことばに背いて罪を犯し、神との交わりを失い、人との交わりを失ってしまった。その結果、自分自身の中で自己分裂を経験するようになった。自己分裂というのは、人が神に罪を犯した結果として、自分が裸であることを知り、いちじくの葉で自分たちの腰の覆いを作ったことにより、神の前に裸で出ることができず、他の人の前にもありのままの姿を出すことができなくなり、自分の真の姿を見ることさえも避けてしまったということである。つまり、神との交わりと他者との交わりとから疎外され、自分自身の内部に自己疎外を生じた結果、心の傷を持つようになったと考えられる。

◆自分自身のあるべき姿を知りつつ、そうっていない自分自身を見ては自分をさばき、自分で自分を傷つける。また、他の人の目を気にして自分ではない自分を演出すること(パフォーマンス)によって自分を傷つけ、また他の人の批判によって傷つけられる—という自己分裂。

◆本来、神によって造られ、神によって愛され、神によって自分自身のアイデンティティを確信できた人間が、神から離れたとき、他の不完全な、罪深い人間との関係においてアイデンティティを得なければならなくなってしまう。神から離れた人間は、特に、両親との関係において、自分の存在価値を見出さなければならなくなってしまう。その結果、この両親との関係において、「心の傷」を受けるようになってしまったと考えられる。

②親子関係における心の傷

◆ある人は、親子関係における心の傷、つまり、私たちが親から受けた影響がどのように自分の人格に影響を与えているかを<禁止令>(※注 12)という概念で次のように説明している。

- a. 「存在するな」という禁止令・・・「この子さえいなければ、こうできるのに(こうなったのに)」
- b. 「お前であるな」という禁止令・・・「お前が女の子(男の子)だったらよかったのに」
- c. 「近寄るな」という禁止令・・・「今、忙しい(疲れている)から、あっちに行ってなさい」
- d. 「属するな」という禁止令・・・「お前のような人間は一家の恥さらしだ、迷惑だ」

◆私たちは親からの言葉や態度(何気ないものから意識的なものまで)で何らかの禁止令を受けてきている—ある人にとってはそれがきわめて当たり前になっているため、気づかないこともあり得る—。そのような禁止令によって心に傷を受けてしまっている。それが人との関係において、また、神との関係において影響を与えているのである。

◆キリストにあって新しくされたクリスチャンの内なる生活は、祈りを通して、キリストの心に就くものへと変えられてゆく。しかし、多くの人々が豊かな祈りの生活を味わえないのは、まさに人との関係から受けた傷のゆえであることが多いのである。

◆例えば、人との関係に傷ついているとき私たちは人との間に距離を置く。もうそれ以上の傷を受けまいと人から遠ざかる。だまされた経験があると人を信用することが難しくなり、攻撃された経験があれば人を赦さなくなる。愛を感じることのできない状況に追い詰められたことがある人は怒りをもち続ける。そして、そのような経験はしばしば自分は誰からも必要とされていないと思込み、落胆し、自分は愛されていない、と感じるようになるのである。

◆このような感情は性格の隅々にまで深い影響を及ぼす。神は私たち人間を他と関わりを持つ存在として造られた。人を愛し、人から愛され、人と愛を共有するよう定められている。しかし心の内に傷ゆえの痛みや怒りがくすぶっていると、この愛し(与え)、愛される(受け取る)というバランスが崩れる。祈ろうとして行き詰まるのは、この隠れた傷の痛みと失意がその原因となっていることがある。赦そうとしない心の怒りは、私たちの想像以上に私たちを害するものである。その結果、神は遠くに感じるようになり、自分のことに無関心であるように思えるのである。このように、心の傷は神との交わりとしての祈りにおいて大きく影響している。

③心の傷のいやし、親(人)からの禁止令を解除する方法

◆心の傷がいやされ、親から受けた禁止令のことは解除するためには、私たちが造られた御父のことは絶えず聞くことが必要である。たとえば、「存在するな」という禁止令を受けた人は、それが非聖書的なことばであるゆえに、聖書のことば(神のことば、御父のことば)を受け取ることである。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」(イザヤ43章4節)、「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを(あなたの存在を)喜ぶ」(ルカ3章22節)という御父の声を聞き、御父との交わりが深まり、御父のイメージが豊かになるにしたがって、心は癒されはじめ、それだけでなく、肉の父に対して抱いていた感情も変えられて行くのである。

◆今日、心の傷のゆえに「弱り果てて倒れている」人々は大勢いる。イエスはそのような人々を「かわいそうに思われる」に違いない。イエス・キリストのいやしのミニトリーを見るなら、そこには、親や人々からも、また社会から疎外された人々がいる。そしてイエスはひとりひとりにかかわられたのである。(例)「ツアラアトに冒された人のいやし」(マルコ1章40～42節)、「生まれつきの盲人のいやし」(ヨハネ9章)等。

◆親から受けた<禁止令>の責任を親に持っていてもどうにもならない。また自分を責めたところで問題は解決しない。家系の呪いとしての心の傷のいやしは、深層レベルの領域である。それゆえ、その領域におけるいやしは聖霊の力によってのみもたらされる。私たちひとり一人がそうしたいやしにあずかるだけでなく、このように、聖霊による全人的ないやしをもたらしイエスのあわれみのミニストリーのために、教会における牧会の働きに関わる

人々を神は求めておられるのである。(※注 13)

(注 11)

◆この定義は、坂野慧吉師の『スピリチュアル・ジャーニー』(いのちのことば社、1999年) 200頁参照。200～220頁において、「心の傷と交わりによるいやし」について述べられている。そこでは人が心の傷を受けるようになってしまった聖書的原因について述べられている。

(注 12)

◆ここで言う<禁止令>とは、非聖書的なことばであり、ある意味で、神を否むことばである。もし人が禁止令を握るならば、それは三代、四代にまで影響が及ぶものである。

(注 13)

◆今日、深層レベルのいやしについて数多くの本が出版されている。たとえば、チャールズ・クラフト著『あなたの心の傷がいやされるために』(プレイズ出版、1995年)、ニール・アンダーソンの著書、『いやし・解放・勝利』等はお勤め文献。今日、牧師が教会を牧会していくとき、複雑化した社会、問題を抱えた家族、精神的な病について、その他多くの知識とそれに関わる経験が求められる。説教するにもただ聖書の知識があれば良いというわけではない。人々の心やその必要を見抜く洞察力、時代を判断する識別力、そして何よりも、説教を聞く人々に対する愛と祈りが求められる。問題を抱えてつめき苦しむ人々の相談にのっていくことは、単に「仕事」として割り切れない。それらの人々のことがいつも心に重荷としてのしかかってくるからである。そしてそれにすべて応えることは不可能である。

A-14 主との親しい交わりを妨げるもの <2>

行動主義—自分を駆り立てる内なる衝動—

①抑えがたい衝動としての「囚われ」

◆「人生で傷ついてきた人々は、その代償や人からの承認、自分の存在意義を求めるあまり、何事かを達成しようとする、抑えがたい衝動を持っていることが多いものです。」とフーストンは述べている。抑えがたい衝動とは、換言するならば、ある種の<囚われ>である。どんな人にも多かれ少なかれ自分自身の<囚われ>がある。たとえば、

- a. ある人はスケジュール表を予定で埋め尽くさなければという囚われをもっている。自分がいつも忙しく動いていないと不安になるほどである。こういう人は仕事中毒(ワーク・ホリック)と呼ばれる。

- b. ある人は自分の目標とか、結果とかを少しでも早く達成しなければという囚われをもっている。(※注 14) このような人はその目標の達成が遅れたり、なにかそれを妨げる人やモノが入ってきたりするとイライラしてしまうほどである。このような人はいつも何かに追いかけて走っている。ゆっくりしたり、休んだりすることに対する罪悪感と焦燥感。ゆっくりとは、のろまに等しいと考えている。
- c. ある人は自分が強くなければならないという囚われをもっている。そのために人には決して弱みを見せず、自分の弱点を突かれまいようにいつも緊張をしているほどである。
- d. ある人はすべてを完全にやらなければという囚われをもっている。決して、不完全な点があってはならないし、完全になるうとしていつも努力している。このこと自体は悪いことではないが、問題は不完全な自分を受け入れることができないことである。
- e. ある人はいつも人とうまくやっていかなければならないという囚われをもっている。そのためにいつも妥協しなければならない。
- f. ある人はいつも勝たなければという囚われをもっている。ゲームでもスポーツでも、テストの成績でも、いつも自分に勝利を義務づけている。健全な競争は必要であるが、現実的に考えていつも一番になることはできない。それゆえいつも不安を感じている。
- g. ある人は規則を守らなければという囚われをもっている。そのような人にとっては、規則の本来の意味するところよりも、規則を守ることが大切であり、それに反したり、逸脱したりすることは不安になり耐えられないほどである。安定志向の仕事(お役所務めや管理)をしている人が多い。

◆以上のように、共通することは「・・・できればいいが、・・・できなければダメ」とする点である。行動主義者の内なる衝動。囚われ。しかしそれは実行不可能な駆り立てであるため、しようとするほど、泥沼にはまり込むことになり、ストレスを感じるようになる。そして拳句の果てには、自分の無能を嘆くか、あるいは自分を人や状況の犠牲者(被害者)だと思ってしまうのである。

② 自己防衛のための「囚われ」

◆私たちはこれらの<囚われ>のどれか一つ、またそれ以上のものに囚われている。これらの囚われは、神が本来造ってくださった「本当の自分」を見失ったところから出てきている。「囚われた自分」は神が本来与えてくださった自分ではない。罪ゆえに神から離れ、自分の存在が不確実になってしまったために、自分が造りだした「自己防衛」のための囚われなのである。

◆このような囚われ—意識的、あるいは無意識的衝動—は、祈りの精神に反するものである。なぜなら、真の祈りの生活とは自分自身の意志ではなく、神の御旨を求めるからである。

③ 「囚われ」からの解放

◆自分の囚われに気づくことがその囚われから解放される第一歩である。そして大切なこと

は自分の力によってはその囚われから解放されることがないことを認めること。これが第二歩である。そして第三歩は主の助けを求めることである。

◆他の人と比較したり、自分ではない自分を演じたりすることなく、それぞれに与えられた賜物と「召命」を知ることである。そのためには、いつも「静まって神の声を聞く」必要がある。詩篇 62 篇の作者は「私の魂は黙って、ただ神を待ち望む」(5 節)と述べている。自分自身に備えられた神の計画があることを知り、その計画に沿えるように自分自身を神に明け渡すこと。そのように歩みはじめるならば、神の導きがはっきりと見えてくるはずである。

(注 14)

◆フーストンは「不幸なことに、達成を目指す人はどんなに努力しても祈りにおいて必ず失敗します。競争心が真の祈りを不可能にしてしまうのです。そういう人はおそらく、人間関係でも失敗するでしょう。人を思いどおり操りたいという誘惑がすぐに頭をもたげるからです。行動主義者は、思いどおり事を進めようと過度に活動することに慣れ親しんでいます。しかし、祈りは違います。祈りは、……受け身の「待ち」の姿勢が必要とされるのです。」(『神との友情』29 頁参照)



作画 S. Shinohara

<はじめに>

◆神との関係を育てるというトピックで<1>では、神の不在経験をすることが、より深い神の臨在の経験をもたらすということに注目したい。それによって神との関係はゆるぎないものとなっていくからである。<2>では、神との関係が自分にフィットした祈りのスタイルを築くことによって、より自然体な神との友情をもたらすことに触れたい。

ゆるぎない信頼を築く神の不在経験

①だれもが通る道

◆詩篇には嘆きの詩篇と呼ばれる詩篇がある。

その詩篇においては、しばしば主の臨在感と不在感(神が遠くにおられる感じがして、祈っても答えられないという不在感)が交錯している。これはいったい何を意味するのか。

◆神が遠くに感じられる時、実は、問題は私たちにあるのではない。これはクリスチャンであるならばだれもが通る道であり、たいてい何度か通されるのが普通なのである。それは痛みと動揺を伴うが、私たちの信仰の成長のためにはどうしても欠かせないものなのである。

◆神が遠く感じられるとき、神が怒っておられるに違いないとか、あの罪のことで懲らしめを受けているのではないかと思うかもしれない。たしかに、罪によって、神との親しい交わりから遠ざかってしまうことはあり得る。しかし、神に見捨てられ拒絶されたと感じるのは、往々にして罪とは関係のないものである。それはむしろ信仰のテストである。神の臨在が感じられず、神が自分の人生に働いておられるという明確な証拠を見出せない時でも、神を愛し、神に信頼し、神に従い、そして神を礼拝することができるであろうか。



作画 S. Shinohara

②神の不在経験の意義

a. 感情的体験から信頼する関係へ

◆クリスチャンが犯している最も典型的な間違いは、神ご自身を求めるよりも何らかの<体験>を求めていることである。つまり、ある種の感情的な体験である。しかしそれを求めることは間違いである。実際、神はしばしば私たちの感情を取り除いて、私たちがそれに依存しないようにされる。信仰が成長するにつれて、神は体験—感情的な高まり—の依存的状態から自立へ向けて私たちが乳離れさせられるのである。

◆神の臨在を感じることは神も願っておられる。しかし、神は<感じる>ことよりも、<信頼する>ことの方に関心をもっておられる。神を喜ばせるものは感情ではなく、信仰である。しかも私たちが信仰において最も成長するのは、人生が崩壊し、神などどこにおられるか分

からない、というような時なのである。旧約のヨブはそのようなところを通させられた。ヨブは一日にしてすべてを失ってしまった。家族も、仕事も、そして持ち物すべてである。しかも、最も落胆させられたことは、37章にもわたって、神が何も語ってくださらないことであった。

b. 不在経験は神の臨在を感謝するため

◆神の不在と臨在は、私たちの祈りをより人格的なホンモノの経験とするために神が備えられたものと言える。神はある意図をもって、しばしば私たちから少し離れたところに身を置かれる。神の不在経験は、神が聖であり、神のご性格やみこころについての私たちの見方がいかに真実とかけ離れているかを私たちに教える。私たちには、身近であるゆえにその偉大さに気づかず、むしろ神をないがしろにしてしまう弱さがある。それゆえ、神の不在経験は、むしろ神の臨在を感謝するためのものである。神の臨在と不在の経験によってもたらされるリアリティは、私たちの幻想を打ち砕いて、神に対するさらに深い信仰に導くことにある。神の光と闇とが、私と神との関係を浅瀬からより深みへと導いていくのである。自分のうちにある暗い感情に気づいて落胆したり、落ち込んだりしてしまうのではなく、それまで持っていた自分自身に対する幻想から解放されて、もっと神に柔軟にされることで、自己からの解放という現実を、よりはっきりと味わいつつ、内なる暗闇から抜け出すことができるのである。

c. 不在経験は神に対する新しい視点をもたらす

◆このように、神の不在を個人的に経験することで、結局、私たちは神の臨在をより深く、そして新しい視点で受けとめ、神に感謝できるところへと導かれる。ここに神の不在経験の意義があるといえよう。私たちが気づいていなくても、理解できていなくても、神は私たちの近くにおられ、私たちの人生に深くかかわっておられる。心が燃えているときも、あるいは心が燃えていないときでも、主は私たちの生活に親しくかかわっておられる。そのことに気づかされることこそ神のみわざであり、神のいのち(かかわり)に触れることなのである。そして、いのちにおける神のみわざは、たとえば、闇と苦しみの時に、「なぜこれが私の身に起こっているのか」ではなく、「このすべてにおいて御父はどのように私を愛しておられるのか」という問いに私たちを向かわせるのである。

A-16 神との関係を育てる <2>

不在経験における効果的な祈り

①私たちの身の内に何が起きているのかを神に話すこと

◆簡単であるが、とても効果のある祈り方がある。それは主イエスに自分の内側で何が起こ

っているのかを語ることである。私たちの身の上に何が起きているかだけではなく、私たちの身の内に何が起きているのかをイエスに話すことである。それは私たちの心を神の御前に注ぎ出すことであり、抱え込んでいる感情をさらけ出すことである。ヨブは「私は黙っていることが出来ません。私は怒りを募らせ、いらだっています。どうして話さずにいられましょうか」と神に自分の感情をぶちまけている。

◆詩篇77篇の作者は慰めを拒む自分の感情を次のように記している。

「夜には・・・自分の心と語り合い、私の魂は問いかける。『主は、いつまでも拒まれるのだろうか。もう決して愛してくださらないのだろうか。主の恵みは、永久に絶たれたのであろうか。約束は、代々に至るまで、はたされないのだろうか。神は、いつくしみを忘れたのだろうか。もしや、怒って、あわれみを閉じてしまわれたのだろうか。』」(6～9節)

◆まさに作者は暗闇の中で様々な迷いと疑いの火矢に打たれ、神の不在感を訴えている。そして作者はこう結論付けた。「私が弱いのは、いと高き方の右の手が変わったことによる」と。これは神に対する激しい怒りをぶつけている表現である。しかしこのような祈りはある意味で浄化(カタルシス)をもたらす。もし自分の内にある抑圧された感情―苦々しい気持ち、隠された怒り、否定的な感情―をそのままにしているならば、さらなる苦しみを自ら抱え込むことになる。こうした感情を神に向かってあらわにしていくとき、神との親しい関係は深められていくのである。

② 神がどのようなお方かに焦点を合わせること

◆状況はどうであろうと、また、私たちがどのように感じようとも、神の変わることはないご性質を信じ、そしてそこにしがみつ়くことである。

◆77篇の作者は、感情をぶつけた後で、再び、神のわざを思い起こし、神のなさったすべてのことを思い巡らし、静かに考えてこう告白している。

「神よ。あなたの道は聖です。あなたの道は海の中にあり、あなたの小道は大水の中にありました。それで、あなたの足跡を見た者はありません。・・・あなたはご自分の民を・・・羊の群のように導かれました。」(詩篇77篇13節、19節)

◆「あなたの道は聖です。」聖―それは人間をはるかに超越した神の本質である―、その聖なる神の知恵を表わす道がある。たとえだれの目に見えなくとも確かに存在している道。その道は海の中に、大水の中にある。まさに、神の聖は人の思いや考えをはるかに越えていて、あよびもつかない。そのことを知った作者は慰められた。感情に左右されずに神を信じ続けるとき、最も深いレベルで神を礼拝していることになるのである。

③ 祈りの実を期待すること

◆そして祈りの実を期待することである。祈りの実とは、祈りが私たちのものの見方を変えてくれることである。祈りの直後に「何も起こらなかった。時間の無駄ではなかったか・・・」と思うことがしばしばある。しかしそれからずっと後になって、ものごとを全く新しい視点から見ている自分を発見するのである。普通の事柄を新しい見方でその意義を再発見するの

である。これこそ祈りの実である。神と私たちの触れ合いの効果は、私たちの意識に上るまでには時間がかかることを心に留めておこう。

<付 録>

アメリカ南北戦争に従軍した無名の兵士が記した詩—『祈りはことごとく答えられた』—

私は、目的の達成を願って力を願い求めた。

しかし神は、謙遜に従うことを学ぶようにと、私を弱くされた。

私は、もっと大きなことができるようにと、健康を願い求めた。
しかし神は、よりすぐれたことをするようにと、私に病を送られた。

私は、幸せになりたいと豊かさを願い求めた。
しかし神は、賢くなるようにと、私を貧しくされた。

私は、人の称賛を得ようと、力を祈り求めた。
しかし神は、神の必要をおぼえるようにと、私に弱さを与えられた。

私は、人生を大いに楽しもうと、あらゆるものを祈り求めた。
しかし神は、あらゆることを喜べるような人生を私に与えられた。

求めたものは何一つ受け取らなかったが、その祈りはことごとく答えられたのだ。すべての人々の中で、私は何と豊かに祝されていることか。



愛する主よ

あなたをもっとはっきり見ることができるよう
あなたをもっと深く愛することができるよう
あなたにもっと素直に従うことができるよう

<はじめに>

◆前回では、神の不在経験を通してより深い神の臨在経験をもたらすことに触れた。祈りは、まさに神への信頼を学ぶ道である。私たちは神の子どもとして、祈りを通して、神への信頼を学ばなければならない。その神への信頼の道とは、常に、神の臨在の意識が生活の隅々にまで染み渡っている生き方を意味する。

◆ダビデがペリシテ人のゴリアテと戦うことになったとき、サウル王はダビデに自分のよろいを着させ、頭には青銅のかぶとをかぶらせ、身にはよろいを着けさせた。しかしダビデはそれを脱ぎ、川に行って石を取り、それを投石袋に入れ、石投げを手にしてゴリアテに立ち向かった。しかし石が、ダビデの本当の武器であったのではない。ダビデはこう言った。「私は、おまえがなぶったイスラエルの神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かうのだ」と。ダビデにとって大切な事は、方法や手段ではなく、「万軍の主の御名」を知っていたということであった。ダビデはこの「万軍の主の御名」の霊的現実をいつ、どのように知ったのであろうか。興味は尽きない。

◆神への信頼の道において、伝統的、あるいは定型化した祈りではなく、自分にフィットした、生きた自分の祈りのスタイル、あるいは礼拝のスタイルを築くことが重要であると考え

自分の祈りのスタイルを築く「マタイ・スタイル」と「ルカ・スタイル」の相違

◆ここで祈りの領域における一つの分野—<嘆願の祈り>についてのみ取り上げ、マタイとルカとの祈りについての見方を比較し、その違いを考えてみよう。マタイの福音書では「祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。」(6章7～8節)。これはマタイ6章の「祈るときに」の注意事項で、人に見られるような場所ではなく、隠れた所で密かに祈りなさいという教えの後に続いている。

◆ルカの福音書では全く反対のことが記されている。ルカ11章8節では、友だちが真夜中パンを借りにきた時、「彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないに

でも、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。」というたとえ話で、必死に、執拗に求め続ければ、祈りは聞き入れられるとしている。

◆同じ意味のことを、ルカは18章でも「やもめと悪い裁判官」のたとえで語っている。ここでは、ひとりのやもめが、ひっきりなしに、うるさい程、昼も夜も叫び求めている。そしてイエスはこのたとえを通して、「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教え、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教え」ている（ルカ18章1節）。しかしマタイでは、しつこい祈りは異邦人のすることだと否定している。

①ルカ・スタイル

◆ルカ・スタイルの主の祈りは、外向的・遠心的である。つまり、神に向かう必死な叫びの祈りスタイルである。なりふりかまわない祈り、泣き叫ぶ祈り、危機的な切羽詰まった祈り、神に助けを求めて思いを爆発させる祈りがこのタイプの祈りである。旧約では、出エジプト3章9節にある「イスラエルの人々の叫び声」の祈りがそれである。その祈りによって神はモーセを遣わされた。

②マタイ・スタイル

◆マタイ・スタイルの祈りは、内向的・求心的である。ルカ・スタイルとは反対に、心を自分の内側に向かせ、聖霊の訪れを願い求める祈り。思いを内に深く凝縮させ、心を内面に集中させた祈りである。主の祈りや定型的な祈りに心を潜め、あるいは、「みこころのままに」と神の摂理を信頼した祈りがこれに入る。また、マタイ21章22節には、「あなたがたが信じて祈り求めるなら、何でも与えられます」しある(並行記事のマルコ11章24節では、「祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすればそのとおりになります。」となっている。)

◆ルカは聖霊の働きを重視して、異邦人教会のカリスマ的現象—異言を発したり、恍惚状態に至る神秘的祈り—を尊重している。従って祈りのスタイルも熱狂的になる傾向があった。マタイは伝統的ユダヤ人教会らしく律法を重んじ、カリスマ的な祈りは異邦人のスタイルとして忌避している（マタイ7章21～23節）。

◆ここでマタイ・スタイルか、ルカ・スタイルか、どちらの祈り方が正しいのかというような問いは無意味である。マタイはユダヤ人教会、ルカは異邦人教会の事情から、それぞれの祈りのあるべき姿を教えているからである。聖書は二つの祈りのスタイルを良しとしている。

◆こうしたスタイルの違いは、祈り(嘆願)だけでなく、礼拝においても見られる。(※注15) 例えば、詩篇を見よう。65篇1節には「神よ。あなたの御前には静けさがあり、シオンには賛美があります。」とある。ここには沈黙の賛美がある。しかし149篇1、2節では「・・・イスラエルは、おのれの造り主によって喜べ、シオンの子らは、おのれの王にあって楽しむ」とある。ここには喜びの爆発があり、感情に任せて主を礼拝する姿がある。前者は、主との深い交わりを味わう礼拝であり、特徴は静息的である。しかし、後者の特徴は活動的であり、喜びと楽しみがその場の雰囲気である。いずれのスタイルも聖書的なのであるが、

現代における諸教会や個人においては、そのいずれかがドミナント(支配的)となっている。

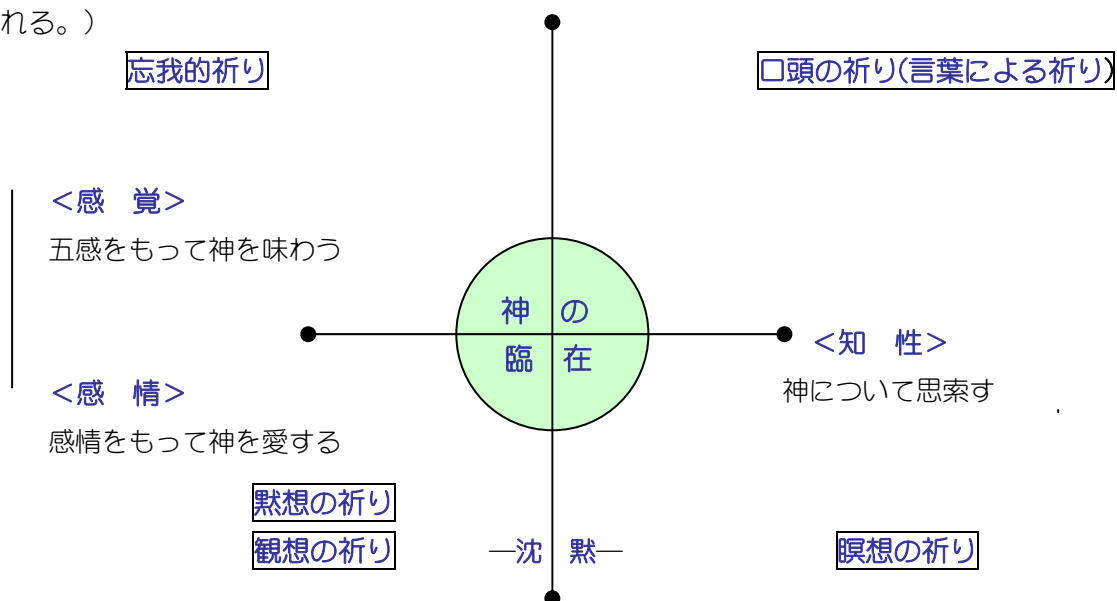
(注 15)

◆クリスチャニティー・トゥデー誌(1999, July 12, vol.43)に「プレイズ・ソングの勝利 ~ ワーシップ戦争(Worship Wars)において、ギターはいかにしてオルガンを打破したか」というショッキングなタイトルの記事が掲載された。その序論の部分より引用する。「1950年代頃から、教派的な相違というのは、米国の信仰者達の信仰生活にとってはあまり重要な事ではなくなっている。・・・新しい分派主義、それは礼拝スタイルを巡るものであり、そこにおける信仰告白の内容は、音楽に関するものである。礼拝セミナーこそが、この新しい分派主義の神学校であり、そのセミナーの指導者こそが、彼らの神学者である。・・・現代の礼拝と音楽のスタイルの相違と多様性の克服は、21世紀の教会にとっては、教会の一致という課題と直結した問題となるであろう。」
今や米国の教会では、教会を選ぶに際して、教理よりも礼拝のスタイルが問題になる、それほど賛美や礼拝のスタイルの違いというものは、信仰生活にとって重大事項となっている、という事である。

A-18 神との関係を育てる <4>

瞑想的な祈り、および黙想・観想の祈りというスタイルについて

◆ここで大切な祈りのスタイルについて紹介したい。これは本講義の主要参考文献であるジェームズ・フーストン著『神との友情』にも述べられているものである。(第9章、「聖三位一体の内にある友情」参照。一この章は、著者フーストンが最も言いたいところであると思われる。)



(1) <瞑想>という祈りのスタイル

a. 沈黙による知性の祈りである

◆瞑想とは、神をより全人格的に愛し、神が私たちに臨まれる生き方をするために神のことばを知性をもって熟考することを指す。瞑想の祈りは沈黙の祈りであり、声なしの祈りである。そして口頭の祈りよりもさらに内面的なものである。

◆瞑想の祈りとは、神のことばを手掛かりとした神とのコミュニケーションである。そこには知的活動があり、思考と感情の両方が働いている。そして聖書の教える瞑想はきわめて積極的な修練である。瞑想は、決して思考停止ではなく、むしろ目を開いて神のわざを見ること、しかも、個別に、細かく見て数えること、それをよく考えること、その上で語り出すこと、歌い出すことのすべてをその内容として含んでいる。

b. 瞑想の効用

◆聖書のことばを瞑想することの結び実のひとつは、そのことばが自分の祈りの中に、知らず知らずのうちに口をついて出てくることである。私たちの祈りは、ややもするとワン・パターンになりやすい。この傾向を打破し、いのちにあふれた祈りに近づくためには、聖書のことばに思いを潜め、その深い意味に触れるほかない。したがって、自分の愛用する聖書以外の翻訳を読み比べることは祈りの豊かさを増し加える上できわめて有益である。他の翻訳はある意味でひとつの釈義であり、そこから新しい光を投げかけられることがしばしばあるのである。

c. 瞑想の修練のための詩篇

◆「幸いなことよ。悪者のはかりごとには歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかったその人。・・・その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もその教えを口ずさむ(瞑想する)。」 この詩篇1篇は、おそらく詩篇全体を読み解く大切な鍵とも言える詩篇である。詩篇が書き記された目的は神の民の瞑想に用いるためであった。詩篇は元来、神の御前で瞑想から生まれたものであり、今なおあらゆる瞑想の祈りの源となっている。

◆瞑想の祈りでは、特に詩篇を用いるとみことばの奥深い不思議に対する驚きと喜びが湧いてくる。それは想像力や喜び、与えられた思想を人々と分かち合いたいという思いを啓発する。祈りの時間は短くても、祈りの心は瞑想的な姿勢という形で、祈りの場を離れた後にもずっと保たれる。その結果、魂の隅々まで神を待ち望む思いに包まれるようになる。(※注16)

(2) <黙想>、あるいは<観想>という祈りのスタイル

a. <黙想>と<観想>の違い

◆黙想の祈りと観想の祈りという世界がある。祈りの中で「黙想」と「観想」を区別する。その違いは、神に対しての姿勢の違いである。祈りが神の対話だとするならば、神へ向かう、

つまり自分の立場を離れて神に向かう方向が<黙想の祈り>である。対話の世界、祈りの世界では、「向かう」ことは「迎える」ことに通じる。自分を離れて神に向かうという動きは、ここでは逆に、自分のところに来るものを受け入れる姿勢となる。つまり、自分のところに神を「迎える」方向が<観想の祈り>である。

◆しかし、私たちが神に「向かい」、神を「迎える」祈りをすることができるためには、神がまず私たちに「向かい」、私たちに「迎え」ておられるという事実が先立っていなくてはならない。私たちは「キリストなしに何もできないから」(ヨハネ 15 章 5 節)であり、「私たちがまず神を愛したのではなく、神がまず先に私たちを愛してくださった」(ヨハネ第一 4 章 19 節)というこの二つの事実こそが、私たちを神へと向かわせ、神を迎え入れる祈りが可能となっている。

b. 黙想は観想の中に含まれる

◆神に「向う」のでも神を「迎える」のでもなく、神に迎えられ、招かれていることをいつの場合にも、より深く感じ、さらには神の愛にまったく心が奪われ、引き寄せられる。これが<観想(黙想)の祈り>と言われるものである。黙想は、ここで観想の祈りの中に含まれてしまう。

c. <観想の祈り>とは (※注 17)

◆観想の祈りのスタイルにおいては、神の臨在が現実のものとして強烈かつ親密に迫ってくるので、神を言葉で説明しようとするなら神の臨在の認識は浅薄なものとなってしまふ。それゆえ、ここでは言葉や思考は必要なくなる。観想の祈りとは、私たちと共におられ、私たちの内におられる神の臨在をより深く、そして個人的に気づかせることである。

◆フーストンはこう述べている。「祈りには、ある種とらえどころのない面があります。他の問題に取り組むように、「ハウ・ツー」式で祈りに取り組もうとしてもうまくいきません。それは、祈りが方法論(祈り方)よりも、むしろ交わり(関係性)と深く関わっているからです。祈りでは、神に対する自己放棄の内に見られる率直さ、信頼、注意力、愛を問題にします。祈りに成長するのは、このような次元においてです。観想の祈りを学ぶために修道院に入る必要性はありません。ただ神ご自身のいのちと愛に自分の全人格をあずけると、祈りのあらゆる深みを知ることが許されるのです。」(210 頁)。またこうも述べている。「観想の道を行くとは、キリストのみが私たちの霊的渇きをいやす方であり、それに比べれば他のものは無に等しいと認識することです。」(211 頁)。

◆観想的な祈りは、神や愛などを味わう祈りである。「神について」考えるよりも、「神を味わう」ことに重点がある。そしてすべてのキリスト者は、神を知り、神を愛し、神に仕えるという観想の祈りの生活に招かれているのである。決して特別な人ではない。観想の祈りは聖霊の賜物であり、しかもこの賜物は無償の神の賜物なのである。この聖霊をとおして、御父と御子は私たちにご自分を示し、私たちは御父と御子を知り、愛し、共に住むということが可能となるのである。

◆特に、ヨハネの福音書、とりわけ14章から16章のイエスの告別説教と17章のイエスの祈りは、私たちを<観想の祈り>へと導く最高のテキストである。ここには御父、御子、そして御霊のうちにある交わりの神秘があり、その中に私たちは神の友として招かれているのである。

●「その方は、真理の御霊です。・・あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」(ヨハネ14章17節)

●「助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」(ヨハネ14章26節)

●「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします。・・だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」(ヨハネ14章21~23節)

(注16)

◆詩篇の77篇は、神との深い交わりにおいて、瞑想を表わす言葉が四種類用いられている。

1. 「ザーカル」 **remember** (原意は「突き刺す」)「思い起こす」(新改訳3、6、11節)、「思いつづけ」(新共同訳)、「思う」(口語訳)と訳されているこの語は、あの時、この時、あのこと、このことの恵みを一つ一つ思い起こし、一つ一つの重みを確かめる姿が浮き彫りされている。
2. 「シーアフ」 **contemplate** (原意は「歌う」)「思いを潜めて」(新改訳3節)、「(自分の心と)語り合い」(新改訳6節)、「静かに考える」(新改訳12節)、「思い巡らす」(新共同訳13節)、「深く思う」(口語訳)と訳されているこの語は、基本的には、「歌う」「語る」の意味を持っている。旧約の聖徒にとって、神を深く思うことは、すなわち、驚くべき恵みのわざを行なわれる神の名をほめ歌うことに進んでいった。
3. 「ハーシャブ」 **consider** (原意は「計算する」)「思い返す」(新改訳5節)「思います」(新共同訳)「思う」(口語訳)と訳されている。これはあれ、あれはあれ、として見極め、区別をしながら見定めることをその内容としている。計算、勘定、評価を旨とした瞑想といっても良い。「昔の日々」「遠い昔の年々」(5節)と歌われるように、かつての日、あの年に体験した恵みの数々を細かく思い返すことこそ瞑想の大切な局面である。この意味で、キリスト者に求められるのは、緻密さである。詩篇103篇でも、「主が良くして下さったことを何一つ忘れるな」と語られている。
4. 「ハーガー」 **meditate** (原意は「つぶやく」)「思い巡らす」(新改訳12節)「口ずさみながら」(新共同訳13節)「思う」(口語訳)と訳されているこの語の基本の意味は、「発音する」「つぶやく」「うなる」である。旧約の詩人にとって、神とその働きを瞑想することは口を用いて神

を言い表すことに直結されていた。口語訳で「思い」と訳されていたこの言葉は、新共同訳では「口ずさみながら」と訳されたのは、原語に近づけたものである。ちなみに、バルバ口訳では「瞑想し」となっている。

(注 17)

◆観想とは？ 辞書を見ると、「一つの心を集中して深く観察すること」(広辞苑)、「特定の対象に深く心を集中すること」(大辞林)、「自己の心情についての真の姿をとらえようと、心をしずめて深く思い入ること」(岩波国語辞典)とある。



作画 S. Shinohara

B 人々とのかかわりを育てる

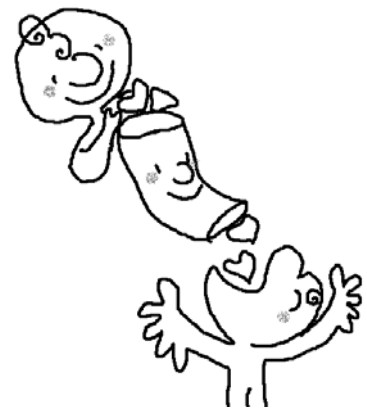
B-00 学びの視座

◆**Worship**—神との交わり—と **Intercession**—人との交わり—、このライフスタイルは密接なものであり、不可分な関係にある。この関係はワン・セットであり、車の両輪、コインの表裏の関係である。賛美(Worship)は純粹に神を礼拝し、神を知り、神を愛することである。とりなしは、人への愛、隣人に対する愛という動機に基づくものである。この二つは神の律法を総括する。しかも、賛美もとりなしもひとつの行為や奉仕のひとつということではなく、主にあるライフスタイルなのである。

◆前回の講義 A では「神との親しい関係を育てる」面に力点を置き、礼拝者としてのあり方を模索してきた。講義 B では「天の父があわれみ深いように、あなたがたもあわれみ深くしなさい」とあるように、「人との親しい関係を育てる」面に力点を置きながら、特に、あわれみの器としてのとりなし手のあり方について模索したい。ちなみに、人としての親しい関係は、神との親しい関係を土台として、とりなしの祈り、もてなし(ホスピタリティ・マインド)、人や社会に仕えていくという愛の働き、奉仕の生活を生み出すライフスタイルである。

◆「神との親しい関係を育てる」ことも、また、「人との親しい関係を育てる」ことも、一朝一夕には育たない。いずれの面においても、成長するためには訓練(熟練)を必要とすることを心に留めたい。

◆ヨハネの黙示録5章のヴィジョン・・「立琴と金の鉢」、ここには、四つの生き物と24人の長老たちが、天の御座におられる小羊を礼拝している姿がある。彼らは、それぞれ、立琴と香のいっぱい入った金の鉢とをもって、小羊の前にひれ伏して礼拝している。立琴は神を礼拝するための楽器であり、金の鉢の中にある香は、聖徒たちの祈り、つまり愛をもってとりなした祈りである。いつの時代においても、神が求めておられるのは、<礼拝者>と<とりなし手>である。「あらゆるときに主を賛美し、礼拝する者たち」と「絶えず破れ口に立ってとりなす者たち」、この二つの面を兼ね備えた者たちである。神のみこころを実現するために、神は人を求められる。というのも、神は人を通して地を支配するように定められたからである。私たち神の民は、そのための権威を神から与えられているのである。(※注18)



(注 18)

◆カンザスシティのマイク・ビクルはダビデの幕屋を立て上げるために、現在、毎日、絶えることなく、祈りの家で「24時間の賛美と祈り」をささげている。彼はその働きのディレクターである。その働きの目的は、キリストの再臨の前に神が約束しておられる魂の救いの大収穫を期待して、世界中にある教会に、この「24時間の賛美と祈り」の働きをもたらすためであるという。彼は、黙示録5章のヴィジョンを二つのキー・ワード、すなわち「立琴」と「鉢」(英語では Harp & Bowl)とし、しばしば「Harp & Bowl」セミナーを開催し、また祈りの学校を建て上げて、質の高い献身者たちによって、毎月はじめの月曜～水曜の3日間、それが11カ月、そしてあとの1カ月(12月)は、7日間(月曜日の午後から次の週の月曜の昼まで)、年間、合計40日間の断食聖会(The Global Bridegroom Fast)なるものを2002年の1月から始めている。ちなみに、この「24時間の賛美と祈り」は、キリストが再臨されるまで続けるとしている。

B-01 神はとりなし手を求めておられる <1>

神は人を通して働かれる

◆神がすべての支配者であり、全能者であられるなら、なぜ私たちは祈るべきなのか。なぜ神は私たちのとりなしの祈りを必要とされるのか。

◆その質問の答えは、神がアダムを創った最初の計画にある。アダムはすべての人間の代表である。神の当初の計画とは、アダムとエバとその子孫に、この世のすべて、そして、創造されたものすべてを支配するようにと神は定められた。創世記1章28節にはこうある。

「神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。『生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。』」

◆詩篇8篇6～8節にはこう書かれている。

「あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。すべて、羊も牛も、また、野の獣も、空の鳥、海の魚、海路を通うものも。」6節で、「治めさせ」と訳されている「マシヤール」というヘブル語は、アダムとその子孫が、この世における神のマネージャー、支配人、あるいは統治者であるという意味である。つまり、アダムは神の仲介者であり、間に立つ者であり、代理人であった。

◆詩篇115篇16節もこう記している。

「天は、主の天である。しかし、地は、人の子らに与えられた。」「与えられた」という原語(ナサーン)という語は、与えられたと訳されることが多いが、モファット訳では「神はこの世を人間にまかせられた」と訳している。神は所有者の権利を人間には与えなかったが、人間に

統治の責任を任せられたのである。

◆また、創世記2章15節には、「神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。」とある。この「守」らせたのヘブル語は「シャマー」で、「見張る・守る」という意味である。聖書ではよく見張り人の意味で使われている。アダムはこの世において、神の見張り人であった。

◆このように、アダムはこの世における神の代理人である。代理人は他の人の意思を再現する人である。この神を再現するということは、決して小さいことではない。それゆえ、人間がこの働きを果たすことができるように、神は、不思議なほど人間を自分に似たものとして創造された。神は、他の被造物には与えなかった永遠の霊を創造する力を私たちに与えられた。詩篇8篇5節には人間にご自分の「栄光の冠」をかぶせられた。これは権威の概念に結びつく。アダムはすべての権威において、神の代理を務めた。彼はその責任を負っていた。

◆この権威と務めの責任をサタンによって、合法的に奪われてしまった。それゆえ、今は、一切の権力と栄光がサタンの手に奪われており、イエスは3度も、サタンを「この世の支配者」と呼んでいる。しかし、神が人間を通してしか働かれないという決定があまりにも完全に究極的であったので、アダムが手放してしまったものをもう一度手に入れるために、神が人間となるという代償を払わなくてはならなかった。この事実が「人間をとおして」働くという神ご自身の決定を重々しく証拠づけるものはない。

◆ここに、私たちが祈る必要性があると信じる。神は創造の時から、人間と無関係にはではなく、人間を通して働くことを決めたのである。これまでもそうであったし、これからもそうである。神ご自身が人間にならなくてはならないという犠牲を払ってまでも、である

◆全能の支配者でありながら、神が自らを制限したと聖書にはっきりと書いてある。この世のことに関しては、人間を通して働かれると、ご自分を制限されたのである。

◆御国が来るように、みこころがなるようにと神に祈る人を、神が必要とされている。主は、日々の糧を求めるとともに私たちに教えられた(マタイ6章11節)。しかし主は、祈る前から、私たちの必要をご存知なのではないか。

◆主は、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさいと言われた。しかし、収穫の主が私たち以上に、それを望んでおられるではないか。・・・なぜ、私たちは神がすでに計画されていることを祈らなくてはならないのか。祈りが絶対に必要であるということ、証明してくれるいくつかの例。

①エリヤの熱心な祈り・列王記第一 18章

◆ここには神が人を必要とされ、その人の祈りを通して自らの計画を実行する話がある。18章の終わりで、他のいろんな出来事の後、エリヤは7回祈り、そして最後に雨が降る。1節で、雨を降らせると決めたのは神であった。ではなぜ、これが神の御心であると考えたら、人の祈りがその雨を「産み出す」必要があったのか。なぜエリヤは7回も祈り続けなければならなかったのか。その論理的な唯一の答えは、人間を通して働くという方法を神が選ばれたからというものである。神が何かをなさる時に、心からそれを望まれても、私たちが

それを求めることを必要とされるのである。

②ダニエル ―預言の成就ととりなしとの関係―

◆ダニエル・紀元前 606 年、罪のためにイスラエルは外国に支配された。何年も後、ダニエル書 9 章で、ダニエルはエゼキヤの預言を読んでいる時に、イスラエルの捕囚が終わる時期がきたことを見つけた。エゼキヤは、ダニエルが経験している捕囚を預言しただけでなく、その期間が 70 年であることをも預言していた。そのとき、ダニエルは、私たちが普通することとは全く違うことをした。私たちがリバイバルの約束、解放、いやし、回復の約束をいただくと、黙ってそれが起こるまで待っている。ところが、ダニエルは違った。神が自分の関与を必要としていることを。

「そこで私は、顔を神である主に向けて祈り、断食をし、荒布を着、灰をかぶって、願い求めた。」(ダニエル 9 章 3 節)

◆ダニエルが祈った直後に天使ガブリエルが送られたにもかかわらず、天にあった戦いを通るのに 21 日かかったということである。彼は次のようなメッセージを携えていた。「あなたのことは聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。」(ダニエル 10 章 12 節)

◆ダニエルは預言が成就することと、とりなしの間に、何かしらの関連があることを知っていた。神が預言される。しかしその成就の時がきても、主が期待した祈りがなければ、自動的に成就させることはしない。神はとりなしの重荷を負う心の準備のある人を探しておられるのである。

B-02 神はとりなし手を求めておられる <2>

(1) 神は私たちに天地を揺るがすほどの霊的権威を授けようとしておられる

◆驚くべきことであるが、神は私たちのような弱い、壊れやすい、傷ついた器を選んでくださり、天地を揺るがすほどの霊的権威を授けようとしてされているのである。

◆ダニエルのことばによって天使も動いた。天使が来たのは、「あなたのことばのためである」と、ダニエルは聞かされた。これこそ私たちが神を求める者たちに与えられる霊的権威である。ダニエルは私たちとは違う特別な人であったのか。そうではない。しかし、神を求めることにおいて、神に従うことにおいて、心を尽くした人であった。

◆聖霊は今の時代に、モーセやエリヤのような霊的権威を教会に授け、世界的に力の対決の場を設けようとしてされている。教会は聖なる神の力こそ本物であり、偉大であることを示さなければならない。そのときに、多くの迷える羊たちの心が、真の神に立ち帰ることになる。

◆イエスのミニストリーのユニークな点の一つは決して集会の案内や宣伝をされなかったこ

とである。それにもかかわらず、大勢の人たちが集まったのである。もし本当に神の権威と力が顕わされているならば、人々は引き寄せられるように集まって来るはずである。

(2) とりなし手の聖なる務めへの召し

62:1 シオンのために、わたしは黙っていない。エルサレムのために、黙りこまない。その義が朝日のように光を放ち、その救いが、たいまつのように燃えるまでは。

62:2 そのとき、国々はあなたの義を見、すべての王があなたの栄光を見る。あなたは、主の口が名づける新しい名で呼ばれよう。

62:3 あなたは主の手にある輝かしい冠となり、あなたの神の手のひらにある王のかぶり物となる。

62:6 エルサレムよ。わたしはあなたの城壁の上に見張り人を置いた。昼の間も、夜の間も、彼らは決して黙ってはいない。主に覚えられている者たちよ。黙りこんではならない。

62:7 主がエルサレムを堅く立て、この地でエルサレムを栄誉とされるまで、黙ってはいない。

62:8 主は右の手と、力強い腕によって誓われた。「わたしは再びあなたの穀物を、あなたの敵に食物として与えない。あなたの労して作った新しいぶどう酒を、外国人に決して飲ませない。」(イザヤ62章1～8節)

◆イザヤ書62章で語られていることは、主ご自身のご計画を実現するためには、忠実なとりなし手を神が求めておられるということである。主のご計画と主のみこころがこの地に実現されるためには、とりなしの祈りという聖なる務めなしには考えられない。神はご自身の偉大な計画を前進させるために、なんと私たちの協力を待っておられるのである。もし私たちが、主の語られるままに従うなら、私たちはやがて考えや思いにも及ばないすばらしい主の栄光を見ることになる、というのが聖書の約束である。8節では「主は右の手と、力強い腕によって誓われた」とある。「右の手」とは権威の象徴である。したがって、ここでは主の御名の権威と御力によって約束しているのである。主の誓いは決して変えられることはない。私たちが条件を満たすなら、必ず、その誓いは実現していく。その誓いとは、エルサレムの回復、教会の本来の回復の実現である。

◆誓いを実現するための条件とは、とりなし手(「見張り人」**Watchman**)の存在であり、とりなしの祈りという聖なる務めである。それゆえ聖書はこう語っている。「黙り込んではいない。主がエルサレムを堅く立て、この地でエルサレムを栄誉とされるまで、黙ってはいない。」と。

イエスのとりなしの教え(イエスのたとえから)

◆アンドリュー・マーレーは、ルカの福音書 11章5～8節のたとえを、「本当のとりなしの祈りに関する教えの完全な宝庫」であると述べている(参照『キリストとともに一祈りの学校一』76頁、いのちのことば社1981年)。

また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、『君。パンを三つ貸してくれ。友人が旅の途中、私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ』と言ったとします。

すると、彼は家の中からこう答えます。『めんどろをかけないでくれ。もう戸締まりもしてしまっ
たし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。』

あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないに
しても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。

◆このたとえには、弟子たちから「私たちにも祈りを教えてください」と言われて教えられ
た「主の祈り」に続くたとえ話である。いずれも祈りについて取り扱われている。前者の「主
の祈り」は天の父に対して祈るその内容について語られており、後者のたとえは、とりなし
の祈りについて語られている。とりわけ、とりなし手の大切な資質について教えられている。

① 人の必要に対する自発的な愛

◆このたとえには、自分の周囲に困っている人々を助けたい、何とかしてあげたい、という
自発的な愛が見られる。自分のことではなく、自分に関わる人の必要のためにとりなす姿が
ここにある。物質的な飢え、愛という心の飢え、風を追うような、ゆがめられた心の願望を
満たそうとする飢え。(※注19)

◆今日、飢えを満たそうとする心の渴望はさまざまな形となって現われている。また、生存
を脅かす飢えのみならず、防衛の保証(守り、助け)の必要もある。

◆「真夜中」とは象徴的である。それは不毛と絶望に私たちを閉じ込める闇であり、危機である。

② 自分の無力感

◆このたとえには、人の必要を感知し、受けとめる心がある。しかし自分の中にはその必要
を満たし得るものがなにもない。「出してやるものがない」とは、自分が人の必要に対して全
く無力であるという自覚である。そこからとりなしがはじまる。訪ねて来た者のために、必
要が満たされるようにと「三つのパンを貸してくれるように」友に頼んだ。「三つのパン」と
は、人が一日を生きるに必要なものという意味である。

③ 拒絶とその意味

◆しかしここで意外にも拒絶に出会う。この拒絶は何を意味するのだろうか。この経験の意味するところは、とりなしの祈りの真実の度合いがしばしばテストされるということである。どこまで本気に求めているか、その愛がどれほど本物であるかをさぐられるテストである。友に対する友情の確かさ、神に対する信頼の確かさのテストである。天の父は祝福を与えることのできる唯一の方であり、祈りに答えられる方でもある。しかし、天の父は祈りの答えを延ばされることがある。

④ あくまでも信頼し続けて祈ること

◆イエスは「彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないにしても」と語っている。これは、単に、友だちだからということで与えられるとは限らないとしても、「あくまで頼み続けるなら」、つまり必ず助けてもらえると信じて頼み続けるなら、その信仰のゆえに、友は「起き上がって、必要な物を与えるでしょう。」と語られているのである。執拗さは、信頼の絆の強さを意味している。(※注 20)

◆とりなしの祈りの務めにおいて本当に必要なのは継続である。その継続の力は計り知れない。今日、神はダビデの幕屋を回復しておられるが、そのダビデの幕屋における特徴のひとつは、「昼も夜も、絶えることのない賛美と祈り」である。神の御子イエスでさえ、ご自分の働きを全うするために何度も夜を徹して祈られた。十字架に直面する力を得るために、ゲッセマネの園で三度も苦しい祈りのときを過ごした。ヘブル人への手紙5章7節には「大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ」と記されている。

◆ところで、どうして祈りにおいてこのように何度も同じ事のために祈るという忍耐が要求されるのだろうか。祈りの答えが遅れるのはなぜか。そのひとつの理由として考えられることは、神が最も良いタイミングを持っておられるということである。しかしこれとて、一度祈ったならば、信仰をもって待てばよい話ではないか。なぜ、あきらめずに祈り続けることが必要なのだろうか。

(注 19)

◆旧約聖書の「伝道者の書」は、この世のすべてを手にしたソロモン王が、風を追うような心の願望のゆがみと、その願望の呪縛を解くまことの光を悟るまでの心の旅が記されている。彼は、実に自分の成功、自分の幸せ、自分の健康、自分の家、自分の財産、自分のお金、自分の快楽、自分のすばらしい教育について語っている。しかし伝道者の書2章11節には『しかし、私手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。』と記されている。

(注 20)

◆ イエスのたとえ話の中に、やもめの執拗さが、神を恐れず、人を人とも思わない悪徳裁判官の

気持ちを動かすという話がある(ルカ 18章 1～8節)。動くはずのない裁判官の気持ちを動かし、やもめの願いがかなうことになった。これは失望せずに、執拗に、常に祈ることへの励ましとなっている。やもめの執拗さが悪徳裁判官さえ動かしたのであれば、「まして神は」は、必ず「夜昼神を呼び求めている選民」の祈りを聞いてくださるのだということを教えようとしている

B-04 霊的な突破口を開くための祈り

(1) 霊的な突破口を開くための一定量の〈祈りの物質〉

◆霊の領域において、ある事を成すためには、ある一定量の力、いのちの川を流し出さなければならぬ。偉大な祈りの人で Christ For The Nations の創立者であるゴードン・リンゼー師はこれを〈祈りの物質〉と呼んだ。この考え方によれば、私たちの祈りは父なる神の心を動かして何かをしていただくという以上のものであり、私たちから聖霊の実際的な力が解き放たれて何かを達成するというものである。(ダッチ・シーツ著『天と地を揺るがす祈り』)

◆懐中電灯をつける量と、ある建物や、また町全体を明るくするために必要なエネルギーの容量とは違う。霊の領域においても同じである。神のみこころをなすためには、それぞれに応じた、異なる量の神の力が必要なのである。

◆たとえばマタイ 17章 14～21節。弟子たちは悪霊を追い出したり、病人をいやしたりすることができた。イエスが彼らにそれを行う力と権威を与えたからである。ところが、気の狂った男の子が連れてこられたときはいやすことができなかつた。イエスはこの種のものゝ祈りと断食によらなければ出て行かないと言われた。

◆違うことを行うためには、違った量、違ったレベルの力が必要であるというこの原則こそが、多くの祈りが答えられるまでに時間のかかる理由といえる。神に願えばそれでいいというものではなく、霊において、ことを成し遂げるためには、充分な力を流し出す事が必要なのである。

◆奇跡を作りだすためには、ある一定量の〈祈りの物質〉が貯えられなければならないのである。貯えられた祈りは、やがて洪水のように、人の手では到底動かす事のできない障害物さえも動かすようになるのである。

(2) 執拗に祈り続けることで神の力が解放される

① 預言者エリヤ

◆預言者エリヤは、やもめの死んだ息子の所に来た時、自分の体を子どもの体の上に伏せ、

顔と顔を合わせて三度祈った(1列王 17 章 21 節)。どうして 3 回も祈ったのか。信仰が足りなかったからだろうか。それとも最初のやり方が間違っただろうか。その理由は聖書には説明されていないが、3 回の祈りが必要だった理由は、エリヤが自分の霊的な胎から少しずつ命、または霊を流し出していたからだと信じる。死人を蘇らせるためには、たくさんの命が必要だったのである。

◆1列王 18 章 1 節で、主はエリヤに「アハブに会いに行け。わたしはこの地に雨を降らせよう」と言われた。そしてこの章の後半には、雨と雲が現われるまで、エリヤは産みの苦しみをする妊婦の姿勢で 7 回も熱心に祈ったとある。もし、これが神の計画、神のみこころであるなら、なぜ雨が降るまで 7 回も祈らなければならなかったのか。その理由は、十分な祈りをささげ終えるまで、祈り続けなければならなかったというのが、最も納得できる論理的な説明である。とりなしの祈りによって、十分な力が解放されるまで、エリヤは祈り続けなければならなかったのである。

② 預言者ダニエル

◆預言者ダニエルも、毎日忠実に祈ることで、霊の領域で力を解放した。霊の世界で悪霊の抵抗を壊すほどの力が解放されるまでは、神は答えを携えた天使を送ることはできなかったのである。もっとも、神の一言で、地獄のすべての悪霊を打ち破ることは可能であるが、しかし、神が人を通して働くという原則を忘れてはならない。人のとりなしの祈りは突破口を開く鍵になる。突破口を開くまでイエスはゲッセマネで 3 時間も祈られた。そしてこの間、霊の世界で力が解放され、それによって突破口が開かれたのである。

③ 使徒パウロ

◆使徒パウロはエペソ人への手紙でこう祈っている。「どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。」(3 章 2 1 節)。このみことばで大切なことは、「私たちのうちに働く力によって」という箇所である。ある訳では「働く力(の量)によって」とある。「量(カタ)」は「分け与える」という意味もある。つまり、私たちが分け与えた力の量に応じて、神はことをなしてくださるのである。私たちは自分のうちにある神の力を、祈りを通して継続的に解放しなければならぬ。

◆ヤコブ 5 章 1 6 節には「義人の祈りは働く、大きな力あります」とある。詳訳聖書では「義人の熱心な(心からの、たゆまない)祈りは、偉大な力(爆発的に働く力)を手に入れます」とある。この《たゆまない》ということばに注目しよう。私たちは神の力を解放しなければならぬのである。私の心の奥底から生ける水が流れ出るようにしなければならぬ。神の力を解放しなければならぬ。解放して、解放し、さらに繰り返す、解放しなければならぬのである。

◆このようにして私たちの祈りは集め蓄えられる。聖書によれば、天国には私たちの祈りを

貯めておくためのたくさんの器がある。私たちの祈りをちょうど良い時まで保存する器を神は持っておられるのである。

④ 24人の長老たち

「・・・24人の長老は、おのおの、香のいっぱいはいった金の鉢をもって」(黙示録5章8節)

「金の香炉、たくさんの香」「香の煙は、聖徒たちの祈りとともに」(黙示録8章3～5節)

◆この箇所によれば、神はご自分のもっとも良い時に、あるいは、祈りが充分集まったときに力を解放し、器をもって、祭壇の火と混ぜられる。主がシナイ山で降らせた火、カルメル山でエリヤのいけにえを焼き尽くした火、ペンテコステに降った火、敵をも滅ぼす同じ全能の神の火を、私たちの器の中であなたの祈りと混ぜられる。そして地にそれを注がれる。稲妻が光り、雷鳴がとどろき、地震が起こる。霊の世界でものすごいことが起こり、目で見える世界に影響を与えるのである。パウロとシラスが真夜中の牢の中で賛美をしているときに起こった地震はこれに違いない。賛美と祈りが立ち昇り、神がそれに油を注ぎ、器がいっぱいになったときに、それを注ぎだされたのである。地は文字通り揺り動かされ、牢の扉は開き、鎖は解かれた。その結果、アジアで最初の回心者がピリピで新しい命を得ることができたのである。

◆残念なことに、私たちの器にはまだその必要を満たすだけの祈りが入っていないのかもしれない。日本の上に神がその御力を現わしてくださるように・・・

B-05 とりなし手に与えられている霊的な立場

(1) 御座にある権威の座—神の右の座に着座されたキリスト—

◆使徒パウロはエペソの教会に宛てた手紙の中でこう述べている。

「神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。」(エペソ1章20～21節)と。

◆神の右の座・・・一般的な意味で「右に出る者がいない」という表現は、一番すぐれているということの意味する。あるいは「右腕」ということばも、最も信頼している補佐役を意味する。「神の右の座」とは、王に次ぐ栄光の座であり、これ以上ないという至高の荣誉と権威の象徴的表現なのである。神は、ご自身の御子イエス・キリストに万物を支配する至高の権威—「すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世に

おいてもとなえられる、すべての名の上に」ーを与えられたのである。

(2) キリストのパートナーとして共に座す

◆キリストは、地上で人間のためにあがないのわざを成し遂げられ、今や、驚くべきことに、何と神の右に私たちもキリストと共に座しているのである。エペソ2章4～6節には「あわれみ豊かな神は、・・罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、・・キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました」と記されている。キリストは天において私たちのためにとりなす働きをしておられるが、そのとりなしは何と私たちと共になそうとされているということである。この事実が目が開かれない限り、教会は神の力を現わすことはできないのである。

◆「キリストとともに天のところにすわらせてくださった」とは、私たちがとりなしの働きをするために、キリストとともに権威の座に着き、その聖なる権威による統治のわざに参与するためである。また、とりなしの祈りは神の御座につかれた御子イエスとの聖なるパートナーシップにあずかることでもある。「主が彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもって、みことばを確かなものとされた」(マルコ16章20節)は、初代教会の実に簡潔な歴史を表している。また聖書は、すべてのクリスチャンを「神の協力者」(1コリント3章9節)、「神とともに働く者」(IIコリント6章1節)と呼んでいるが、具体的に、それはとりなしの祈りを通して可能なのである。このように、私たちが、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けられて、それを行使する立場(位置)にあることを知ることはとても重要なのである。(※注21)

◆使徒パウロがエペソの教会のためにとりなしている祈りの中で、「神の全能の力によって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるか、あなたがたが知ることができるよう」と祈っている。この「神のすぐれた偉大な力・・を知る」とは、神の右に着座されたキリストに与えられた権威、すなわち<イエスの御名>の権威がもたらす力である。そしてこの力をとりなしにおいて実際に経験するように、というのがパウロの祈りであった。

(注21)

◆今日のキリスト教会は、<十字架についての教え(罪の赦し、義認・・等)>だけでなく、<御座についての教え(権威)>を必要としている。17世紀、イギリスのバプテスト教会が生んだ有名な説教家、チャールズ・ハンス・スポルジョン(1834～1892年)は、次のような体験を語っている。

◆ある日、彼は寝たきりの老婦人の家に呼ばれた。老婦人は栄養失調で今にも死にそうな状態であった。スポルジョンが彼女の家を訪れると、部屋の中に額縁に入れられた一枚の文書が壁に掛けられていた。彼は彼女に「これはあなたのものか。」と尋ねた。彼女は「そうです。」と答えた。そして彼女はかつて自分がイギリスの貴族の家でメイドとして働いていたこと、そしてその貴族の家の夫人が亡くなられる前に、それを自分にくれたことをスポルジョンに話した。彼女はなん

とその亡くなった夫人に半世紀近くもの間(50年近く)仕えてきたのであった。そしてその仕えてきた夫人がくれた文書を、彼女は額に入れて、その夫人がなくなられて以来10年間もの間、壁にかけてあるのだと説明した。スポルジョンは「それを私にお貸し願いませんか。もっと詳しくそれを調べてみたいのです。」字を読むことができなかったその婦人は言った。「ええ、いいですよ。ただ、必ずそれをお返しください」と。スポルジョンはその筋の権威のところにその文書を持って行って調べてもらった。するとそれはなんと遺産であった。イギリスの貴族の夫人が長い間仕えてくれたメイドに家とお金を遺していたのであった。老婦人はたった一部屋しかない木の箱のような小さな家に住み、飢えて死にそうになっていた。彼女が十分に世話をしてもらって、りっぱな家に住むことのできる遺産が与えられていたにもかかわらず、である。スポルジョンはその遺産が実際に彼女のものとして使えるように手助けをした。彼女がもっとはやくそのことを知っていれば、得られたであろう益は大きかったはずである。知らないばかりに、みじめな生活をしていたのである。

(ケネス・E・ヘーゲン著『イエスの御名』、信仰ミニストリーズ、1992年、49～50頁参照)

◆この話は、今日のクリスチャンを代弁しているかもしれない。というのは、主から偉大な遺産を与えられているにもかかわらず、遺産の文書をしっかりと読んでいないか、あるいは読んでいても、霊の目がふさがれていて、理解できていないかもしれないからである。それゆえ、パウロは祈っている。「心の目が開かれるように・・・」と。

B-06 権威をもって命令する祈り

◆キリストの権威—イエスの御名—を用いることは、しばしば「信仰の命令」として言及されている。この真理は、聖書の中で象徴や実例によって教えられている。

(1) モーセの神の杖

◆モーセの杖は、エジプトのパロに対する神の代表としての権威の象徴であった。モーセはエジプト王パロのもとから逃げてミデヤンの地に住んだ。そこで平穏な生活を過ごしていたが、ある時、モーセは神の山で燃える柴を見た。モーセはそこで神と出会い、神からエジプトにいる同胞イスラエルの人々を救い出すことを命じられた。

◆モーセの手には羊を飼うのに使用していた杖が握られていた。この杖が「神の杖」となった。この杖により、神のみわざ(奇蹟)が行われた。それはイスラエル人にとっては神のみわざと憐れみを知る杖となったが、エジプト人にとっては災いを運んできた不吉な杖であった。モーセは神の杖を伸ばして、エジプトと魔術師や、神々の背後にある悪魔的な力と戦った。

◆エジプトを脱出した民たちが紅海を前にしたとき、エジプト軍が後ろから追いかけてきた。モーセは祈り始めた。それに対して神は「あなたは、なぜわたしに向かって叫ぶのか」(出 14 章 15 節)と語られた。そして神はモーセに海の上に杖を伸ばすようにと命じた。モーセがそのようにすると、水は分かれ、人々は乾いた海の底の地を歩いて渡ることができた。

◆この出来事のほかに、民たちが水のことをつぶやいたとき、モーセは身の危険を感じて神に訴えた。そのとき神はモーセに次のような具体的な指示を与えた。「さあ、わたしはあそこのホレブの岩の上で、あなたの前に立とう。あなたがその岩を打つと、岩から水が出る。民はそれを飲もう。」そこでモーセが神の杖によって岩を打ったとき、水が出た。イスラエル人は神の杖により岩から水が出て、渴きをいやすという奇蹟を体験した

◆その後エジプトを出てからイスラエル人は初めての戦いをアマレクとする事になった。「モーセが手を上げているときは、イスラエルが優勢になり、手を下ろしているときは、アマレクが優勢になった。」(16 章 11 節) アマレク人はヤコブの兄弟エサウの子孫である。エサウとヤコブに関する聖書の預言は『兄が弟に仕える。創世記 25 章 23 節』であるが、今ここに預言通りの事が起こった。このときモーセは神の杖を持ち、イスラエル人によく見える丘の上に両手を上げ、イスラエルの勝利のために祈った。

(2) 信仰の命令の祈り

◆キリストと共にある立場を私たちが知ることによって、山に向かって、動いて海に入るよう、<信仰の命令>をすべく主イエスが語られたことを理解することができる。キリストの権威を用いることは、しばしば<信仰の命令>として言及されている。イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。もし、からし種ほどの信仰があったら、この山、『ここからあそこに移れ。』と言えれば移るのです。どんなことでも、あなたがたにできないことはありません」(マタイ 17 章 20 節)と。「山」は、聖書においては、しばしば大きな困難や不可能なことを示す時に用いられる。その山は私たちが命じるまで、神は決してその山を動かそうとはしないのである。

◆<信仰の命令の祈り>—この真理は、神の国が前進するうえで、あまりにも戦略的であるゆえに、イエスはこのことを繰り返された。マタイ 21 章 21 節では、イエスが実のないいちじくの木を呪われたことが記されている。「おまえの実は、もういつまでも、ならないように。」と。するとたちまちいちじくの木は枯れてしまったことが記されている。そのいちじくの木は偽物であった。イエスはここでサタンの働きがたとえそれがどんなに大きくても小さくても、枯れてしまわなければならないことを教えられたのである。

① イエスに見る信仰の命令の実際

◆イエスは繰り返して信仰の命令を実証された。主はツアラートに冒された人に向かって「きよくなれ」と命じられ、目の不自由な人の目に触って「開け」と命じられ、耳が聞こえず、口のきけない人に「エパタ」、すなわち「開け」と命じられた。また、中風の者に向かつては「起きて歩け」と言われた。また、汚れた霊たちに対しても「おしとつんぼの霊。わた

しがあまえに命じる。この子から出て行きなさい。二度と、はいつてはいけない。」と叱責された。さらに荒れ狂っていた波に向かって「静まれ」と命じられた。

②使徒たちに見る信仰の命令の実際

◆使徒たちも信仰の命令の祈りを実践した。たとえば、ペテロは生まれつき足の不自由な人に向かって「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい」(使徒3章6節)と命じて、彼の右手を取って立たせた。そしてこの出来事を見ていた人々に向かって、「イエスの御名が、この人を完全なからだにした」とペテロは証言した。また、ピリピで占いの霊につかれた若い女奴隷に対して、パウロは彼女を支配する霊に「イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け」と命じた。すると即座に霊は出て行った(使徒16章18節)。

③信仰の命令の祈りは聖書的である

◆このように信仰による命令は聖書的な祈りであり、とりなしの務めにおいて重要な武器となる。悪霊たちは、イエスの御名の權威によって命じられた時、その命令に従わなければならないのである。とりなしの祈りにおいては、こうした<信仰の命令>の祈りは、他の祈り(嘆願の祈り、宣言的祈り)と併用して用いられるべきである。

◆しかしこの<信仰の命令>を完全に、かつ、力あるものとして用いるためには前提がある。

- a. その生活において、神の御霊を悲しめるようなものを持っていてはならないこと。
- b. 信仰の命令は、神の御旨と調和していなければならないこと。自己中心的な目的のために、自分の栄誉のために決して用いてはならないこと。

(3) 実際的な命令の祈り

◆ところで、私たちはいつ<信仰の命令>を用いるべきであろうか。それは通常、サタンの領域を侵略する時、またサタンの激しい攻撃にあっているときなどになされる攻撃的な祈りの戦いの一つである。

- ①ある地域からサタンにそこを立ち去るように退去命令を下す。
- ②都市や町などを覆って、人々を盲目にしている暗闇の雲に散り失せるように命じる。
- ③ひとりの人、あるいは家族の問題から手を引くようにサタンに命令する。
- ④神の子たちを惑わし、あざむくことを許さない、とサタンに命令する。
- ⑤病気をもって人を悩ますことをやめるようにサタンに命令する。
- ⑥サタンがいかかわしい誘惑をもってあなたに近づく時、直ちに退くように命令する。
- ⑦神の民の中に分裂をもたらすことを止めるようにサタンに命じる。
- ⑧しばらくの間、風雨が止むように命令する。

◆このように、私たちはイエスの御名によって、信仰の命令を通してサタンを叱責する權威が与えられているのである。

◆詩篇にも信仰の命令による祈りが記されている。第68篇がそうである。そこでは嘆願の祈りと一緒に使われている。「神よ。立ち上がってください。神の敵は、散りうせよ。神を憎

む者どもは御前から逃げ去れ。煙が追い払われるように彼らを追い払ってください。悪者どもは火の前で溶け去る蠟のように、神の御前から滅びうせよ」(1、2節)

◆ここには、「神よ。立ち上がってください。」「彼らを追い払ってください」と嘆願しつつ、神の敵に対して「散り失せよ」「逃れ去れ」「滅び失せよ」という信仰の命令の祈りがなされている。

B-07 御国の鍵としてのイエスの名による祈り

<はじめに>

◆「主の御名」「イエスの御名」「キリストの御名」「主イエス・キリストの御名」によって祈る祈り—これこそが、クリスチャンの祈りの特徴である。この点について、私たちはどれほど明確な信仰的自覚をもって使っているだろうか。これは、「これで私の祈りは終わりです。次の方どうぞ・・・」というサインではない。イエス(キリスト)の御名とは、イエス・キリストの全存在—すぐれた権威と力—、全人格—教え、十字架と復活を頂点とするすべてのわざ—、さらに天にあるキリストの栄光の富を包含している。初代教会は「イエスの御名によって」大胆にみことばを語り、しるしと不思議なわざを行ない、すべてのことをイエスの御名によってなしたのである。

「イエスの御名によって祈る新しい祈り」

◆言うまでもないが、「イエスの御名」によって祈る祈りはだれかが思いついたものではなく、イエスご自身が最後の晩餐の席で教えられた祈りである。(※注 22)

①「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。」(ヨハネ 16 章 24 節)

②「その日には、あなたがたはわたしの名によって求めるのです。わたしはあなたがたに代わって父に願ってあげようとは言いません。」(ヨハネ 16 章 26 節)

◆上記のほかにも四つの箇所と同じことが繰り返されている。繰り返されているということは、非常に重要だということである。そこで強調されていることは、①「何でも求めよ」②「イエスの御名によって」、③そうすれば「父は、お与えになる」という約束である。

◆ヨハネ 16 章 24 節の「今まで」とは、イエスがここで弟子たちに話されるまでは、彼らがイエスの御名によって何も求めなかったという意味であり、同、26 節の「その日には」とは、ペンテコステの時に弟子たちの上に聖霊が注がれる日には、という意味である。

◆イエスの御名によって祈るとき、その祈りはイエスによって保証され、あたかもイエスご自身が祈ることと同義なのである。今も、イエスは「父なる神の右の座において、とりなしの働きをされているが、私たちがイエスの名によって祈ることと、イエスの御座でのとりなしとの関係はどうなっているのでしょうか。へブル人への手紙7章24~25節にこう記されている。「しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることはない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」

◆この箇所は、キリストがご自分によって神に近づく人々のとりなし手であることを明らかにしている。この中にある「とりなす」という言葉のギリシャ語の意味は、「間に立つ」「交渉する」「人々の間に立って平和と平等を作り出す」という意味である。キリストは神と罪人の和解のためにこの世に生まれ、人々の間に神の平和をもたらすために活動された。そして現在、天においてだけでなく、かつて地上においても、「キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられる」という。このことは教会にとってきわめて重要である。現在、キリストは天において私たち教会のためにとりなしておられるが、この意味をさらに明確にするなら、「キリストは天において教会のために神と交渉をしておられる」という意味になる。この交渉するというのは「取引をする」という意味である。キリストが教会のために神と取引がなされるためには<取引材料>が必要となるが、それが聖徒たちの祈りなのである。もし教会が地上で祈らないならば、キリストは天において神と交渉することができないのである。しかしもし教会が地上で祈るならば、キリストはその祈りが答えられるよう天において神と交渉してくださるのである。キリストが天においてとりなしをしておられるとはそういう意味である。

◆ヨハネ16章26節の「わたしはあなたがたに代わって父に願ってあげようとは言いません。」という意味は、私たちがとりなす材料をイエスに与えることをしないのに、イエスが私たちと関わりなく、代わってとりなすということとはできないという意味である。だからこそ、聖徒たちのとりなしの祈りはとても重要なのである。ちなみに、サムエルは「祈らないことは罪」だとしている。(1サムエル12章23節)。イエスの御霊は、私たちがうながして、祈りの材料をイエスに与えることを可能にしてく下さる方である。とりなしの祈りの息は、三位一体なる神と私たちのうちにいのちの連帯を作り出している。

◆キリストは、いつもキリストを通して神に近づく人々のためにとりなしておられるのである。「イエスの御名」によって祈る祈りを御父は聞いてくださるという主の約束を、私たちは信仰をもって真剣に受け止めなければならない。

(注22)

①ヨハネ14:13 「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。」

②ヨハネ 14:14 「あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」

③ヨハネ 15:16 「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」

④ヨハネ 16:23 「その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。」

B-08 共同体を建て上げるためのとりなしの祈り

<はじめに>

◆ところで、「イエス・キリストの御名による祈り」を最も深く、神学的、体験的に明示したのは使徒パウロであった。「わたしの名によって求めなさい」とのイエスのチャレンジを、パウロはその生涯のすべてを通して実行しようとした。使徒パウロこそ、祈りの真髄を私たちに示してくれる人である。一言でいうならば、パウロの祈りの基調は、他人のためのとりなしの祈りである。しかもそれは、<キリストのからだなる共同体を建て上げる聖徒たちのためのとりなしの祈り>である。本講義では、これから、パウロにみられるとりなしの祈りを取り上げ、その祈りの特徴について考えてみたい。そしてそうした祈りを実践することを通して、本講義の<学びの視座>である主にある「人との親しい関係を育てる」面をおいて成長することを模索したい。

◆その前に、まず、パウロの祈りを知るためには彼自身について知らなければならない。とりわけ、使徒パウロはどのようにして、とりなしの祈りの高峰にたどりついたのであろうか。

パウロの生涯におけるダマスコ経験が意味するもの

◆使徒の働きに三度記されているパウロの回心の記事において、復活されたイエスは、「パウロ、パウロ、なぜわたしを迫害するのか」と彼に呼びかけている。(9章4節、22章7節、26章14節)。この呼びかけは、復活のキリストがご自分と教会とを同一視され、切っても切れない関係にあることをパウロに認識させるためであった。さらに、パウロのもとに主がアナニヤを遣わすことにより、彼はキリストを土台とした聖徒の愛の交わりに触れた。この経験はパウロをして、それまでの生き方を全く変えてしまう出来事となった。

① パウロの生涯における回心の経験（※注 23）

◆パウロの回心は大体紀元 AD 33 年頃である。イエスの十字架の死が AD 30 年頃とすると、その後 3 年くらい経た時、パウロの 33 歳頃のことである。彼がローマで殉教の死を遂げたのが 64、5 年頃とすれば、ちょうどその生涯は半ば頃に回心して、同時に使徒、伝道者としての召命を受けた。それは復活の主イエス・キリストからであった。

◆パウロの回心の特徴は、彼が自由に自発的にしたのではなかったことである。われわれが回心する、悔い改めるという場合には、自らの罪の自覚がある。しかし、パウロの場合は事情が全く違った。彼は悔い改めるべき罪の意識を持たなかった。ダマスコに遠征し、キリストの輩を逮捕処刑することはユダヤ教の律法に忠実なことであり、当時、彼が信じ仕える神に忠誠を尽くすことにほかならなかった。それゆえ、ダマスコ到着の直前に突如として起こった出来事について、彼はその意味がわからなかった。今の今まで愛国者であった彼は、一瞬にして路上に投げ出され、見るも憐れな腰砕けの盲目となり、打ちのめされてしまったのである。真昼の暗やみの中で、彼は厳かな声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と。それは以外にもまだ見たことも会った事もなかったナザレ人イエスの声であった。ここで現われたのは、パウロがユダヤ教信仰で信じていた神ではなく、復活のイエスであった。パウロがそれまで迫害していたのはイエスを信じる者たちであったが、彼はこのイエスを知らなかったのである。

◆最早、この絶体絶命の窮地に追い詰められて祈った祈りは、「主よ、わたしはどうしたらよいのでしょうか」（使徒 22 章 10 節）というものであった。この祈りはパウロが回心して最初の祈りである。その祈りに対してパウロが聞いた主の声は、まず「起き上がりなさい」ということだった。そしてその次に、主はパウロに「どうしたらよいかはダマスコで告げる」と語られた。

◆パウロのために主の計画があった。すでに定められてあったパウロのための計画はダマスコで告げられる。主はダマスコの聖徒アナニヤを通して、パウロが今後、何をすべきかを告げられた。それはナザレのイエス・キリストの証人となり、地の極みまでキリストの福音を伝えるというものであった。

◆ここで注目したいことは、行き先も分からずに暗黒の中にいたパウロのもとに、主によって、アナニヤが遣わされ、「兄弟サウロ。見えるようになりなさい。」と言って、パウロの頭にあたたかい手を置いたことであった。サウロはこのことばによって自分が赦され、主の共同体の中に受け入れられたことを経験した。この経験はパウロの生涯にとってきわめて重要な経験であった。さらには後に、バルナバはパウロをアンテオケ教会の教師として紹介し、その働きに導いた。こうした受け入れはダビデがサウロの息子ヨナタンによって愛された経験に匹敵する。（※注 24）

◆聖書だけでは人々を強くすることはできない。人の暖かなぬくもりのある手と心が必要である。教会内のあたたかい交わりは、祈りや聖礼典と同じく、恵みの手段であるゆえに尊重しなければならない。初心者のためにもるもろの天を開くのは、兄弟姉妹たちのぬくもりである。

◆隣にいる人を愛する愛のない教会員が、どうして関係の薄いはるかかなたの人々を愛することができよう。愛がまず教会員相互の間に燃えるなら、それは炎となって世界の果てにまで及ぶであろう。使徒パウロにとって、愛の交わりはすべてであった。それゆえ彼の手紙は、交わりのことで埋め尽くされている。信徒同士を堅く結び合わせ、地方の各教会を、そしてユダヤ人の教会と異邦人の教会を堅く結び合わせることにこそパウロにおけるとりなしの祈りの目的があった。

② 兄弟愛の建設・・・パウロ書簡における「互いに」

◆パウロの書簡を見ると、「互いに」ということばが多く使われている。(※注 24) 教会において兄弟愛を育てること、これこそ私たちクリスチャンの仕事なのである。しかもこれは神が人に与えられた仕事の中で最も困難で、妨げの多い仕事である。なぜなら、この仕事に努めるときキリストの弟子でありながら心の底にひそむ醜さが顔を出し始めるからである。いろいろな段階にある兄弟姉妹たちと共に生活し、共に活動することの困難さを経験するのである。あるときは胸のほりさけるような思いを味わう覚悟をしなければならない。

◆イエスは言われた。和解は礼拝に先立たなければならないことを。主イエスは「もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい」(マタイ 5 章 23、24 節)と言われる。

◆教会は愛の実験場であり、工場である。ここで人々は兄弟姉妹として改造される。兄弟としての心を持つ存在こそ大きな力を発揮する。愛の精神、この精神をつくらなければならない。そして教会はこれを伝え、広めなければならない。この世は、まず教会内部に同情や親切が十分になれば、決してこれらに関する説教に耳を傾けることはない。教会員自らが実行しないことを、ただ理論だけでこの世に伝えようとするならば、何の役にも立たない。

◆兄弟を愛さないならば、神を礼拝する力を失うことになる。そのような人の礼拝は機械的、形式的になり、満足はもたらされないであろう。この秘儀は、早くから昔の使徒が述べている。「目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません」(1ヨハネ 4 章 20 節)。私たちは人によってのみ神を知り、人によってのみ神に至り、人を愛することによってのみ最も神を礼拝することができるのである。これがキリスト教の教えの本質である。このことを疎かにして、教会における礼拝に熱を投じようとしても失敗に終わるであろう。神を敬う精神を豊かにする共同体は、互いに知り合う交わりにあるからである。クリスチャンが互いに絶えず関心を持ち合い、「すべての聖徒たちのために」絶えずとりなすならば、ますます神に関心を持つようになる。人を愛することは、神を愛する恵みに成長するただ一つの道なのである。

(注 22)

◆パウロは故郷タルソで一般的教養を身につけた後、エルサレムに出て律法学者ガマリエルの下で、ユダヤ教の真髄を体得するため、律法の研鑽を積んだ。彼にとっては、律法に忠実に従うとはすなわち神に忠実なことであった。それは学究に甘んずることなく、信仰の実践に向かわせた。時あたかも律法を無視するかのごときナザレのイエスを、メシヤと仰ぐ新興運動がエルサレムを中心として拡大されつつあった。パウロはこの信仰運動を無視することができず、ユダヤ教指導者や権力者たちの支援を受け、キリスト教徒撲滅のために身をささげ、着々とその目的を達成していた。そのため首都エルサレム周辺にはキリスト教徒は影をひそめるに至った。それはパウロらのクリスチャン迫害運動が熾烈を極めたことを物語っている。ただし難を逃れたキリスト教徒たちは、はるかダマスコに残存していることがパウロの知るところとなった。パウロは長老、大祭司、律法学者らユダヤ教当局者たちから捕縛の権限を委任され、部下たちをも提供されて、ダマスコ遠征に向かったのである。

(注 23)

◆ダビデに対するヨナタンの友情は、神によって結び付けられたものであった。それは私欲のない、首尾一貫したものであった。この友情がもたらした遺産は、やがてダビデが王となったとき、人から忘れられ、弱く、寂しく歩む者に対する愛となって表われた。つまり、愛される経験はダビデに牧者の心をもたらした。ヨナタンの存在はダビデにとって大きかった。

(注 24)

◆私たちはキリストにあって、私たちはひとりひとり「互いに」器官であること(ローマ 12 章 5 節)。兄弟愛をもって心から「互いに愛し合うこと」、「尊敬をもって互いに人を自分よりまさっているとすること」(ローマ 12 章 10 節)。「互いに受け入れあうこと」(ローマ 15 章 5 節)「互いにいたわり合うこと」(1 コリント 12 章 25 節)。「愛をもって互いに仕えること」(ガラテヤ 5 章 13 節)。「寛容を示し、互いに忍び合うこと」(エペソ 4 章 2 節)。「互いに赦しあうこと」(エペソ 4 章 32 節)。「互いに従うこと」(エペソ 5 章 21 節)。「互いに教え、互いに戒めること」(コロサイ 3 章 16 節)。「互いに慰めあうこと」(1 テサロニケ 4 章 8 節)。「互いに励まし合い、互いに徳を高め合うこと」(1 テサロニケ 5 章 11 節)…等。

キリストの愛を、すべての聖徒とともに経験できるように

<はじめに>

◆パウロの書簡はパウロのとりなしの祈りによってもたらされた結晶である。パウロは教会につながる人々(聖徒たち)のために、「昼も夜も」「絶えず」「いつも」「思わぬ時がないほど」祈っていた。これはパウロが気まぐれではなく、毎日、定期的に祈っていたことを意味する。書簡の中でパウロが実際に「～のことを祈っています」という表現を使っている箇所のみならず、パウロが諸教会のために宛てた手紙の内容(感謝、勧告、命令等)そのものが、絶えずとりなされた祈りから生まれた結晶と言える。新約の書簡は旧約聖書でいうならば詩歌書に匹敵する。(※注 25)

◆パウロはエペソ人への手紙の中で二つの偉大なとりなしの祈りを記している。その一つの箇所は 1 章 15～19 節である。そしてもうひとつの箇所は今回取り上げる 3 章 14～21 節である。

(1) エペソ書 3 章 14 節～21 節の祈りの構造

「こういうわけで、私はひざをかがめて、天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいませように。こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいませように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができませように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。」

◆「どうか」で始まるパウロのとりなしは、16 節末尾の「強くしてくださいませように」と 17 節中央の「住んでいてくださいませように」と、19 節中央の「知ることができませように」と末尾の「満たされますように」によって、四つの祈願に分けられるように見えるが、内容的には三つのことが祈られている。その三つとは、以下の通りである。

- ①キリストが心のうちに内住されること(16～17 前半)、すなわち「内なる人の強化」
- ②キリストの愛を知ること(17 後半～19 前半)
- ③神の充満(プレローマ)に満たされること(19 後半)

◆ここで重要なことは、①②③は互いに並列しているのではなく、むしろ積み重ねるように関係しているということ、つまりクライマックスに上りつめるように並んでいるということである。キリストが心のうちに住んでくださるよという個人的な祈りは、聖徒たちとともに、人知をはるかに越えたキリストの愛を知るためであり、さらに、それは神のプレーンに満たされるための祈りなのである。たとえば、「キリストがあなたがたの心のうちに住んでくださいますように」という祈りは、神のプレーンに満たされますよという祈りの実現につながる。また、第二の祈願「キリストの愛を知ることができるよう」との関連で第3の祈願を見るなら、「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、ほんとうに自分のものとして把握」することは、私たちを変える力がある。そして「人知をはるかに越えたキリストの愛を知る」人は、キリストのようになりたいと願うようになり、キリストに似せられていくのである。そしてそれは神のプレーンへと満たされていくのである。

(2) 「あなたがたの内なる人」の解釈

◆ところで、16節で最も難しいのは、「あなたがたの内なる人」とは何かという問題である。「あなたがたは」は複数形なのに、「内なる人」は定冠詞のついた単数形なのである。

◆「内なる人」という表現は、ここ以外に2箇所しか出ていない。

①ローマ7章22節「すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに」

②Ⅱコリ4章16節「たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされている。」

◆そこで、コリントのほうから考えていく人は、これを、からだのような外から見た人に対比して心や魂から見た人、内面的な人、霊的な人と解釈する。反対に、ローマ書から考えて行く人は、聖霊によって新しく生まれ変わった人、と解釈する。しかし、エペソでは結論的に言うならば、イエス・キリストのことである。(脚注10) というのは、ギリシア語原文では、「あなたがたの内なる人を強くしてください」と書いてあるのではなくて、「あなたがたの内なるひとりの人へと強くされますように」と書かれているからである。「内なるひとりの人」とは、目的語ではなく目標なのである。つまり、「内なる人は」「強くされ」ていくゴールであると取る読み方が自然である。エペソ人への手紙の他の箇所でも、教会の成長のゴールはキリスト(2章20節、4章12、13節)、個々の信者の成長のゴールもキリスト(4章14、15節)であることがはっきりしているので、強化のゴールである「内なるひとりの人」はイエス・キリストと解釈できる。

(3) 17節前半は、16節の言い換えである

◆17節文頭の「こうして」という接続詞は原文にはない。したがって、17節前半は16節と並行し、同じ事の別の言い方(言い換え)と言える(榊原康夫氏)。つまり、私たちの心のう

ちに住むキリスト、それが「私たちの内なるひとりの人」キリストなのである。このように、私たちがかの内なる人キリストへと霊的に強められることを、別の言い方で、キリストが私たちの心のうちに住み込むことだと語っているのである。信者になっているからには、むしろすでにキリストは御霊において宿っておられる。「あなたがたの信仰によって」キリストの内住が生じる、と言われるように、信仰をもっているならば、キリストはすでにあなたがたの内におられるのである。16節の「御霊により」と並行した言い換えが、17節の「信仰によって」である。信仰のある人は、御霊が宿っておられキリストは内に宿っている。

◆「住んでいてくださいますように」の「住む」とは、「居を定める」ことを意味している。つまり2章19節の「寄留者」に対して、腰を下ろして定住することを表わす。御霊においてキリストはすでに信者の心に宿ってはあられるが、キリストが本当に心に定住し、心の王座に着いてくださることをパウロは祈っているのである。あなたがたのかの内なるひとりの人キリストに達するまで、霊的に強められるように、と祈ったのと同じように、その内なるキリストがクリスチャンの心の寄留者や間借り人のようではなく、本当の住人になること、いや、家長になってくださるように、という意味である。

◆キリストが私たちの心に本当に定住してくださるといことは、具体的に言うならば、どのようなことなのか。

①イエス・キリストに似た思いと心と性質が私たちの中で支配的になることを意味する。

a. ピリピ2章4、5節「自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。

b. コロサイ3章15節「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。」

c. 同上、3章16節「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませなさい。」

②キリスト者を受け入れることにおいて、キリストご自身をお迎えすることになるという、兄弟への尊敬、特にいと小さい者の尊重と愛とが教えられる。マタイ25章40節。「まことにあなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちにしたのは、わたしにしたのです。」

(4) 人知をはるかに越えたキリストの愛を知るために

◆人知をはるかに越えたキリストの愛、しかも「その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する」ためには特別な力が必要である。キリスト者の祈りの生活の大切さがここにある。「理解する」「知る」とは、単なる頭で分かるということではなく、本当に自分のこととして把握することを意味している。キリストの愛を知るためのライフスタイルは、

①「愛に根ざし、愛に基礎を置く」・・私たちの生活の土台をキリストの愛に置く、

②「すべての聖徒とともに」知る・・聖徒の交わりの生活を築く。キリストの愛の広さ(寛容、親切)、キリストの愛の長さ(すべてをがまんし、信じ期待し、すべてを耐え忍ぶ)、キリス

トの愛の高さ(この世にない神からの愛)、キリストの愛の深さ(どんな罪人をも受け入れていく勇氣)。「あなたの隣人を自分と同じように愛せよ」(マルコ 12章 31節)。

●【ポイント】このようなキリストの愛を、すべての聖徒たちとともに体験し、自分のものとしていけるように、互いに祈り合おう !!

(注 25)

◆旧約聖書は①モーセ五書、②歴史書、③詩歌書、④預言書からなっているが、新約聖書において、それぞれに対応する部分は、①福音書、②使徒の働き、③書簡、④ヨハネの黙示録である。旧約の詩歌書(ヨブ記、詩篇、伝道者の書、箴言、雅歌)は、歴史の断面において、神とその民の関係において、どのように礼拝し、祈り、人生の様々な状況において学んだ知恵について書かれているが、新約聖書における書簡は、神の民が神がキリストにおいてなされた救いをどのように理解し、どのように神に仕え生きるべきか、実際のとりなしの祈りの中で啓示された主の知恵と知識に基づいて書かれている。つまり、書簡は使徒パウロ、ペテロ、ヤコブといった使徒たちのとりなしの祈りによって生み出されたものと言える。

(注 26)

◆「内なる人」をイエス・キリストとする解釈は、榊原康夫師に教えられることが多い。その著『エペソ人への手紙<上>』(いのちのことば社、1989年)の510~512頁に詳しく論じられている。

B-10 パウロのとりなしの keyword <2> Worthy Life

召しにふさわしく歩むことができるように

◆パウロの感謝の内容を見ると、エペソ教会、テサロニケ教会、ピレモンに対して、主に對する信仰とすべての聖徒たちに対する愛との<バランスの良さ>に対して感謝をささげている。このバランスをもった歩みこそ、すべてのクリスチャンに求められるものである。

◆使徒パウロは比較的早く書かれたテサロニケ教会に宛てた手紙の中で、「・・・私たちはいつも、あなたがたのために祈っています。どうか、私たちの神が、あなたがたを召しにふさわしい者に・・・してくださいように。」(Ⅱテサロニケ 1章 11節)と記している。「召しにふさわしく生きる」—これはクリスチャンたちに対するとりなしにおいて、すべての嘆願を包括するキー・ワードであると考えられる。「Worthy life」、つまりバランスの取れた成長こそ、すべてのクリスチャンに対する祈りでなければならない。奉仕がうまく行くように、生活が

守られるように、試験に合格できるように、健康が守られるように・・・そうした類の祈りがしばしばあるが、果たして、自分のために、あるいは人のために、神によって召された者として「ふさわしく」生きることをのためにどれだけ祈っているだろうか。

◆「あなたがたは召されたその召しにふさわしく歩きなさい。」(エペソ 4 章 1 節) これはパウロ自身の生涯の重い課題であった。それはエペソ教会にとっても一番大切な勧告であった。「ふさわしく」という語は、同じ価値、同じ値打ち、という意味を持った言葉である。したがって「あなたがたは、主イエス・キリストがあなたがたを召してくださった、その召しと同等の価値、尊さをもった歩き方で生活するように努めなさい」と言う意味である。召されたからには、召しの中にある大きな価値を心に留めて、それにふさわしく生きなさいというのである。

◆このように、あなたがたが召し入れられた状態や身分に釣り合うように歩めというのは、<帝王学の勧め>である。「殿ッ! そのような事をされては、ご身分に差し支えますぞーッ!」という式の戒め方である。その召しの尊さをしっかり受け止めるべきであり軽々しく受けてはならない。

◆「ふさわしい」ということばを見てみよう。このことばには基本的に二つの意味をもっていて、そのどちらも重要である。

◆第一に、「ふさわしく」(アクシオース)は、もともと「秤の他の竿を持ち上げる、重さを測る」(アゴー)から由来した副詞で、値積もりをし、代価を払うために天秤を釣りあわせて測ったところからきた言葉である。「均衡(バランス)を保たせる」「重さが等しい」という意味である。

◆使徒パウロは、今ここで、聖書の教理と実践とが生活の中でいつも同じ重さを持って見られるようにと命じ、勧告しているのである。教理を重要視し、実践を軽んじてはならないし、その逆であってもならない。そのようなことをすれば均衡を失い、どちらか一方に傾いた状態になってしまう。このはかりが完全な均衡を保たなければならない。頭が知識でいっぱいであっても、実生活で誤りに陥れば、その人自身が神の国の進展の障害となりうる。そのために互いにふさわしく生きることができるよう祈らなければならない。

◆第二は、「似合う」ということである。「召された召しに似合うように歩みなさい」と。「キリストの福音に似合うように生活しなさい」(ピリピ 1 章 1 7 節)。何かに似合う。それは洋服の色を合わせて着ることであり、また、適合すること、あるいは、他の部分と釣り合いがとれるようにするという意味である。クリスチャン一人ひとりが「神にかたどり造り出された新しい人を身に着る」(エペソ 4 章 2 4 節)することができるよう祈らなければならない。

● [ポイント]・・・お互いに「召しにふさわしく」生活するように祈ろう。そして、こうも祈ろう。

- ①「神に愛された子どもらしく」(エペソ 5 章 1 節)・・・
- ②「聖徒にふさわしく」(同、5 章 3 節)・・・
- ③「光の子どもらしく」(同、5 章 7 節)・・・
- ④「賢い人のように」(同、5 章 1 5 節)・・・ 歩めるように

B-11. パウロのとりなしの keyword <3> Thanksgiving

とりなす相手のことを神に感謝すること

◆パウロは書簡の中で決まって宛先の人々のことを神に感謝している(ガラテヤ書を除いて)。と同時に、人々に対しても「すべてのことについて」「いつも、常に」「主にあって」父なる神に感謝するように命じている。特に、コロサイ人への手紙の中には数多く、神に「感謝しなさい」「感謝する人になりなさい」と命じている。(脚注 11)

◆礼拝の中で、私たちは「感謝と賛美を携え主の御前に進み」と歌う。なぜなら<感謝のいけにえ>をもたずして神を礼拝することはできないからである。感謝することがこれほどまでに大切な理由とは何であろうか。

(1) 神に栄光を帰すため

◆第一にパウロが必ず感謝しているのは、すべては神からはじまり、神を通して、神へと至ることを知って、神に栄光を帰すためである。その内容は様々である。

- ①「あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです」(ローマ 1 章 8 節)
- ②「あなたがたは、ことばといい、知識といい、すべてのことにおいて、キリストにあって豊かな者とされたからです」(1 コリント 1 章 4 節)
- ③「イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて」
(エペソ 1 章 15 節、コロサイ 1 章 3 節)
- ④「最初の日から今日まで、福音を広めることにあずかって来た」ことのゆえに
(ピリピ 1 章 3 節)
- ⑤「信仰の働き、愛の労苦、主イエス・キリストへの望みの忍耐のゆえに」(1 テサロニケ 1 章 3 節)「神の使信のことばを受けたとき、人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れたこと」(1 テサロニケ 2 章 13 節)
- ⑥「あなたがたの信仰が目に見えて成長し、あなたがたの間で、ひとりひとりに相互の愛が増し加わっているからです。」(II テサロニケ 1 章 3 節)
- ⑦「あなた(テモテ)の純粋な信仰のゆえに」(II テモテ 1 章 4 節)
- ⑧「主イエスに対するあなた(ピレモン)が抱いている信仰と、すべての聖徒に対するあなたの愛について聞いているからです。」ピレモン 5 節)

◆これらを総合すると何がみえてくるだろうか。

(2) 不平不満、つぶやきというサタンの要塞を打ち砕くため

◆一番の大きな理由は、私たちの心に人に対する不平不満やつぶやきという足場をサタンに

与えないためである。それらはその人の心に要塞となって、神が備えておられる恵みを受け取らせなくしてしまう。人間的に見て、たとえ感謝できないような状況の中でも、神の大きな愛の御手の中にあることを信じて口で感謝するとき、敵の要塞は崩され、今まで見えなかった神の恵みの御手を見ることができるようになるのである。

(3) 神からの良いものを受け取るため

◆私たちが父なる神に感謝をささげるとき、それは父が良いお方であることを告白していることになる。感謝することは、天の父が子である私たちに良いものしか与えることのできない方であることを宣言することである。また感謝することによって、神によって選ばれたクリスチャン一人一人の良い面が見えてくるのである。このように感謝することは、現状の様々な局面の中から「ほんとうに良いものを見分ける」ことなのである。

●〔ポイント〕・・・自分に関わる人のために、相手のために、まず、主にあって、感謝することから始めよう !!

●生活の中のあらゆる祝福を自覚し、それを神の御前で感謝の心を言い表してみよう。

①霊的な祝福・・・神にある立場とその祝福、神の導き、神の守り・等

②物質的な祝福・・・神が必要なすべてのものに満ちし、与えてくださることについて

③身体の健康の祝福・・・健康であること、目が見え、耳が聞こえることについても

④外的な祝福・・・神の様々な働き領域についての感謝

(注 27)

◆ある人は「感謝はキリスト者の品性の最高美である」と述べている。感謝といっても、イエスのたとえ話しに出てくるように「私は・・・する者ではなく、・・・の人のようではことを感謝します」という悪い意味の感謝もある。新約聖書における「感謝する」ということばは、ευχαριστω(ユーカリステオーという語(動詞)が51回使われている。56回。この語は新約聖書における新語である。この語は神が御子イエスを通して与えられる恵みに対する人間の応答としての独自性を持っている。コロサイ人への手紙の中には、「感謝」ということばが7回使われており、他の書にはない特徴をもっている。1章3節、1章12節、2章7節、3章15節、3章16節、3章17節、4章2節・・・ここで気づくことは、感謝している内容はいずれも純粋に霊的なことであるということである。

平和を作り出す者となるために

(1) 聖書における平和

◆「平和」は聖書の中で福音の理解に欠くことのできない重要な位置を占めている。聖書によれば、神は「平和の神」であり、イエスは「平和の主」であり、聖霊は「平和の霊」である。神を信じて神の子とされた者たちは、「平和をつくる者」(マタイ 5 章 9 節)と呼ばれ、福音は「平和の福音」と呼ばれる。神の平和は私たちがキリストの弟子として生きるライフスタイルであり、また宣べ伝えるべきメッセージの中心である。

◆パウロはとりなしの祈りの中で、「どうか、平和の神が、あなたがたすべてと共にいてくださいますように」(ローマ 15 章 33 節)、「どうか、平和の主ご自身が、どんなばあいにも、いつも、あなたがたに平和を与えてくださいますように。(II テサロニケ 3 章 16 節)と祈っている。

(2) ギリシア・ローマにおける平和

◆福音がエルサレム・ユダヤから始まって、ギリシア、およびローマの世界に入っていたときに、聖書の意味する平和(シャローム)は、その変質を免れることはできなかった。たとえば、ローマの社会における「平和」は、圧倒的な軍事力によって支配することからもたらされるものであった。つまりたえず力で抑えつけることによってのみ勝ち取られる平和であった。イエスの教え、あるいはヘブル的なシャロームが意味するところとは正反対のこのような平和の理解は、4世紀のコンスタンティヌス帝の時代以来、教会の支持を受けてきている。

◆また、ギリシアにおける平和は、主として心理的・霊的な調和、あるいは心の中の静穏、休息の状態、争いのないし平穏な感情を意味するようになった。聖歌にもあるように、「安けさは川のごとく・、心安し」の世界である。しかし本来のヘブル的平和(シャローム)は、もっとダイナミックであり、神と人との間に健全な関係があるときに実現する霊的・物質的な両面をも含んだ、社会共同体的な概念なのである。単なる心の安らぎ、魂の静けさという面だけではなく、新しい「聖霊の共同体」の中で神と人、そして人と人とが交わりを回復すること、これがシャロームの本質であった。特に旧約の預言者においては、「平和」は社会的な関係の中に正義を作り出すことと深いかわりをもっていた。イエスもペテロも、パウロもみなヘブル的なシャロームの意味で平和ということばを用いていたことを忘れてはならない。つまり、シャロームは共同体的概念である。シャロームは個人を新しい聖霊の共同体の中に位置づけ、その中で人々は、喜びと救いの生活を実現することを追い求めたのである。ただし、どんな危機のなかにあっても動揺することのない個人的な心の平和を否定しているわけ

ではない。しかし聖書の平和はそれ以上のものであることを教えている。平和は、契約で結ばれた共同体の中における神との新しい関係と直接結びついている。神の恵みによって、平和と正義の新しい共同体が生み出される。それは、愛を基とする共同体、神の霊がともにいてくださることによって保持される共同体である。残念なことに、多くの教会が「平和の福音」を神との個人的な、心の中の事柄としてしか理解せず、生活共同体、社会共同体としての面をとらえることができなくなっているところに、今日の教会の課題があるように思われる。

(3) 神の平和の新しい共同体

◆新しい神の共同体を建て上げるうえで、平和の福音がどのように力あるかを新約聖書の中からいくつかの例を挙げたい。

①平和の福音に応答して作られる新しい共同体の特徴（エペソ2章11～22節）

◆この共同体の中では、人間同士を分け隔てているいろいろな区別や障害が取り除かれて、霊的また物質的なものを含むあらゆる面において、兄弟たちとすべてを分かち合うことである。ユダヤ人と異邦人は共同の相続人となる。そこには「新しいひとりの人」を建て上げるヴィジョンがある。エペソ人への手紙によれば、神の救いの計画は、「すべてのものがキリストにあって一つにされること」であり、ユダヤ人と異邦人がキリストによる共同相続人となるべく、「新しいひとりの人」を造り上げて、平和を実現することである。

②エルサレムの初代教会の特徴

◆人々が平和の福音を聞き、それに従うとき、聖霊は互いに愛し合い、心を開き合う新しい共同体を作ってください。その共同体をルカは次のように記している。「信じた者の群れは、心を一にし、思いを一にして、だれひとりその持ち物を自分のものだと主張するものがなく、いっさいの物を共有にしていた」（使徒4章32節）。ここには社会関係における二つの相反する原理を示すことばが出ている。一つは<自己中心の否定>であり、もうひとつは<分かち合い>である。

a. 自己中心の否定

◆一つの原理は、「自分のもの」ということばによって表現される自己中心の生き方である。これはなりよりもまず、自分、自分の持ち物、物を所有すること、また持っている財産などを中心に考えるライフスタイルである。この自己中心的な立場は、偶像礼拝の同じであり、やがて人を孤独にする。今日の社会は、私有財産の上に成り立っており、教会もそれに準じている。それはイエスと使徒たちが目指したシャロームよりは、むしろ、ギリシア的、ローマ的平和の影響といえる。初代教会はだれひとりその持ち物を自分のものだと主張するものがなかったのである。

b. 分かち合い

◆エルサレム教会の特徴となっていたのはもうひとつの原理、すなわち共通の益のためにすべての者が協力する共同体の生き方である。コイノニアは個人の人格を否定するものではない。いやむしろこの平和の共同体の中でこそ、もっとも深い意味で個性が発揮される。人は

この共同体の中にいるとき、自己中心的な偶像礼拝の誘惑に打ち勝つことができるのである。神がすべての人間関係の中心におられ、生活のあらゆる面を分かち合うことが行なわれるからである。

◆言うならば、エルサレムの初代教会は、「ヨベルの年」すなわち「負債赦免の年」を実践したの。これはイエスが宣教の最初にナザレの町で宣言され(ルカ4章18、19節)、その後、主の弟子たちの間で実践されたライフスタイルである。聖霊によってそのように導かれたのである。もし今日、教会の革新がなされるならば、初代教会の形そのままを真似することはないまでも、聖霊による共同体的な生き方を真剣に考える必要はないだろうか。それはイエスの宣べ伝えた神のシャロームから出てくるライフスタイルであった。

◆主イエスは「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしが与えるのは、世が与えるものとは違います。」(ヨハネ14章27節)と語られた。ここでの平安とはシャロームを意味している。そして、それがエルサレムにおける初代教会において現実のものとなった。

(4) 私たちは、平和を作り出す者であるときに神の子どもと呼ばれる

◆「エルサレムの平和のために祈る」とは、神の救いの歴史に参加することである。なぜなら、神の救いの歴史はキリストによってすべてのものがひとつになるということが目指されているからである。私たちは今、救いの歴史の中の大きな転換期に生きている。1948年、イスラエルの独立宣言の後、イスラエルの民(ユダヤ人)の帰還が始まった。これは世界史最大の奇跡である。彼らは2千年もの間、土地も王も領土も神殿もなく、離散の民として地上のあらゆる国民の間に散らばって生きてきた。何百問もの間、幾度も流血の迫害を受け、今世紀には民族根絶の危機にさらされ、世界中に「枯れた骨」として散らばっていた。しかし今や、この民が集まり、目に見える国家として形をとったのである。これは預言者エゼキエルが語っているように、まさに死からの復活である(エゼキエル37章)。しかし彼らはまだ霊的に生き返ってはいない。

◆今日、ブリッジズ・フォー・ピース(BFP)やエベネゼル緊急基金、等の働きはすべてイスラエルの民が霊的に生き返り、異邦人とユダヤ人との和解の架け橋をつくるための働きである。ユダヤ人が救われてはじめてキリストは再臨される。私たちが「神の平和の福音」を宣べ伝えるとき、このユダヤ人と異邦人との間にある問題を避けて通ることは出来ない。なぜなら、その溝はキリスト教の歴史におけるすべての「隔ての中垣」の出発点だからである。

◆クリスチャンは和解の使者として、「平和を作り出す者」としてユダヤ人のために祈らなければならない。しかもその祝福は甚大である。神は「アブラハムを祝福する者を祝福し、アブラハムをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、アブラハムによって祝福される」と約束されたからである(創世記12章3節)。

(マザー・テレサの愛した祈り — 聖アッシジのフランシスコの祈り—)

私は平和をつくる神さまの道具になりたいのです。

憎しみのあるところに 愛を
罪のあるところに ゆるしを
争いのあるところに 一致を
誤りのあるところに 真理を
疑いのあるところに 信仰を
絶望のあるところに 希望を
闇のあるところに 光を
悲しみのあるところには 喜びを
慰められるよりも 慰めることを
理解されるよりも 理解することを
愛されるよりは 愛することを

B-13 パウロのとりなしの Keyword <5> His Will

神のみこころを深く知ること

<はじめに>

◆コロサイにある教会はエパfrasによって開拓された教会である。エパfrasはパウロのエペソ伝道で主に導かれた人である。パウロはコロサイの教会に一度も訪れたことはないが、言うならば、霊的な孫たちのために祈り続け、手紙を書いた。ところで、コロサイ人への手紙にはパウロ自身とエパfrasのとりなしの祈りが以下のように記されている。

「こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。」(コロサイ 1章9節)

「あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfras・・・はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。」(コロサイ 4章12節)

◆パウロもエパfrasも共にコロサイのクリスチャンたちのために「絶えず祈り求め」「祈りに励んで」いた。これは文字通り、自分で定めた毎日の祈りの時間に彼らのためにとりなしを

しているということである。そして、繰り返されたとりなしの祈りの内容(嘆願)には共通点がある。その共通点を一言でいうなら、「神のみこころを深く知り、従うことができるように」ということである。使徒パウロとエパfrasは、コロサイの教会の人々が神のみこころをわきまえて、みこころに自ら進んで、喜んで従っていくことができるように、そして成熟したクリスチャンとなるようにと祈ったのである。神のみこころに生きるためには、聖霊による霊的な知恵と理解力を必要とすることは言うまでもない。

(1) 神のみこころの二面性

◆ところで、パウロが「神のみこころに関する真の知識にみたまされるように」と祈ったその「みこころ」には、二つの意味合いが含まれていると考えられる。一つは<神の定まったみこころ>であり、もう一つは<神の望んでおられるみこころ>である。(※注 28)

①<神の定まったみこころ>

◆神が主権をもって必ずなされるみこころ、環境や人間に支配されないみこころがある。この種のみこころには奥義があり、私たちは神の一部分しか知ることが許されていない。そのみこころが行なわれる目的は、神の栄光がほめたたえられるためである。だれも神の計画に逆らうことはできない。たとえば、パウロは「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロ」とある(エペソ 1 章 1 節)。使徒となることは、神がパウロの人生に起こるように定められた。一見、クリスチャンたちを迫害していた彼は、自分はまさか自分が「この道」に入るとは考えもしなかった。しかし神はこの世の基が置かれる前から、彼をキリストの使徒として選んでおられたのである。「だれが神のご計画に逆らうことができるだろう。」答えは「だれもできない。」である。特に神の選びと救いはそうである。それは起こってみてはじめて知ることが出来る。

◆また、自分がどのような両親から生まれ、どのような環境に育ち、どんな人との出会いを与えられるのか、どんな経験をするのか・私たちの人生において起こったすべてのことは、神が私たちに定められたみこころの一部である。神が定めたからこそそうだったといえる。それを私たちは変えることはできない。自分がいつまで生きていられるのかも、それが起こってみるまでは分からない。しかし神はそれを定めておられるのである。ただ大切なことは、神の定まったみこころに対してどのような態度をとるべきかである。神の定まったみこころは最善である。そして「神は、神を愛する人々のために、すべてのことを働かせて益としてくださる」のである。このことを信じないかぎり、光は見えてこない。

②<神の望んでおられるみこころ>

◆神がすべての人に望んでおられるみこころがある。それは絶対的なものではなく、私たちの決断に基づいている。それは奥義ではなく、それを知ることができ、また行なうことが出来るものである。それゆえ、「神のみこころは何か」をわきまえるために、心を一新して自分を

変えること、が求められている(ローマ 12 章 1 節)。

◆たとえば、エペソ人への手紙 4 章 1 節からあるように、「召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍びあい、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい」と。「召しにふさわしく歩む」・「神に愛されている子どもらしく、神にならう者になりなさい。」「聖徒にふさわしく、不品行・・またどんなむさぼりも口にすることさえいけません。」「光の子どもらしく歩みなさい」・・・と。ここには神が私たち一人ひとりに、こうあってほしいと望んでおられるみこころがある。

◆神のみこころは、いつも喜んでいること、絶えず祈ること、すべてのことについて感謝すること、聖くなること、成長してキリストのようになることである。もし、私たちが喜んでいないなら、祈っていないなら、またすべてのことについて感謝することができずに不平とつぶやきをこぼしているならば、私たちは神のみこころからはずれているのである。

③<神の望んでおられるみこころを実現するための父の訓練>

◆私たちはパウロと同じく「神のみこころを深く知る」ために祈りはじめるとき、そのプロセスにおいて私たちがしばしば予想できない出来事(痛み)が起こってくることを知らなければならぬ。というのも、私たち人間は神が望んでおられるみこころに対してなかなか「Say, Yes」と言えないからである。それゆえ神は、しばしばその愛する子に訓練を与えられるのである。そしてその訓練は、私たちに對する霊の父の愛の表現なのである。愛するゆえにそうするのである。

a. 罪には楽しさが伴う

◆罪には楽しさがある。たとえば麻薬のように一時の興奮を得るだけだとしても、罪は確かに楽しいのである。罪は快樂をもたらす。もしそうでなかったら、罪にまつわる厄介な問題は起こらないに違いない。罪と戯れることは楽しい・・そのように悪魔は私たちを惑わすのである。悪魔は悪いものを良いものと思わせる天才なのである。これが悪魔の基本的な策略である。だから、神のみこころに反したことをしていながら、事はうまく運んでいるように見え、人生を結構楽しみ、幸せと感じている。私たちはしばしば自分たちの楽しい結果に欺かれる。罪にはある種の楽しみがあるからである。

b. 自業自得の原理・・自分が蒔いたものは必ず刈り取るという原理

◆しかし罪の楽しみははかない。楽しくない結果を生む。ガラテヤ書 6 章 6～8 節で「思い違いをしてはならない。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです」とある。「神を侮る」とは、神に向かって「鼻を高くすること」である。「肉に蒔く」とは罪を犯すこと、神のみこころを退けること。「肉から滅びを刈り取る」とは楽しくない結果が起こることを意味する。これが原理であり、警告である。もし神のみこころに反したことを行なうならば、その結果に責任を取らなければならない。

◆しかし私たちの霊の父は私たちを愛しておられる。もし私たちが、神の望まれるみこころのうちを歩んでいないなら、そのわがままのゆえに、神はむち(懲らしめ)を私たちにお与えになる。それは私たちのための父による矯正であり、それが神の愛の表現なのである。ヘブル 12章6節。

c. 悔い改めに至る悲しみ

◆神のみこころからはずれたために味わう楽しくない結果(悲しみ)に対して、私たちがどう反応するかが重要である。ダビデも詩篇32篇で、自分が罪を犯したことのゆえにもたらされ罪責感で苦しんだ。しかしそれを神の前で告白したとき罪の赦しが与えられ、彼はそこから解放された。

◆神は、私たちが神のみこころに従って生きることを学ぶために、悔い改めに至る悲しみを私たちに与えられる。「神の知恵と知識の富は、何と底知れず深いことか。」(ローマ11章33節)

●このように祈ろう!

「主よ、あなたのみこころを知り、それを行なうことを教えてください。」

「父よ、あなたの子にふさわしい平安の義の実を結ばせてください。」

(注 28)

◆これについては、J・グラント・ハワード Jr 著『みこころを知り、みこころに従う』(聖書図書刊行会、1979)の良著がある。

B-14 パウロのとりなしの Keyword <6> Excellent
--

真にすぐれたものを見分けること

(1) あなたがたの愛が・・いよいよ豊かになるように

◆パウロはピリピの教会の人々に対して「私が、キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、そのあかしをしてくださるのは神です」(1章8節)と述べている。パウロのピリピに対すとりなしの祈りは、キリストの愛の心からでたものであった。その彼が「あなたがたの愛が・・いよいよ豊かになるように」と祈っている。

「私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。」

(ピリピ 1章9～10節)

◆ここでの「あなたがたの愛」とは、ピリピ教会における主にある者の共同体における愛である。「豊かに」とは「洪水のようにあふれて流れ出す」という意味である。パウロがこうした祈りをした背景には、確かに、ピリピ教会の中にも不一致やねたみによる愛の欠如があったが、1コリント 13章に「信仰と希望と愛・・・その中で一番すぐれているのは愛です」とあるように、愛こそ最も尊いもの、信仰生活においてもっともすぐれたものだと信じていたからである。愛がなければすべては空しいのである。しかし、私たちの愛はしばしば歪んだ愛となりやすい。盲目的な愛や溺愛によって子どもをスポイルし、子どもの自立を妨げたり、偏愛によって家族の中に多くのゆがみを生じさせてしまうといったことが起こる(イサクとリベカの偏愛、ヤコブのヨセフに対する偏愛、等)。それゆえパウロは、愛が「真の知識」と「あらゆる識別力」という霊的な知性に裏打されたものとなるようにと祈っているのである。

(2) 真にすぐれたものを見分けるための霊的な知性

◆ちなみに「真の知識」(新改訳、柳生訳)と訳されたことばは、口語訳では「深い知識」、新共同訳では「知る力」、リビングバイブル訳では「霊的な知識」と訳されている。「真の知識」とは、霊的な知識を意味し、神との人格的な交わりを通して、また神のみことばの理解によって得られる個人的・体験的な神知識のことである。これは神の愛によってのみ与えられる知識である。

◆「あらゆる識別力」(新改訳)と訳されたことばは、口語訳では「するどい感覚」、新共同訳では「見抜く力」、柳生訳では「正しい判断力」、リビングバイブルでは「洞察力」と訳されている。これらのことばは、霊的な事柄の真相をするどい感覚をもって、正しく見抜く、洞察力といえる。

◆口語訳の「するどい感覚」とは、痛みを痛みとして感じる感覚である。道徳的無感覚は良心の痛みのないところに生まれる。耳たぶや、指先が凍傷にかかると痛みを感じなくなるが、これは恐ろしいことである。痛みはとても大切な警告なのである。痛みを感じなくなった良心は、道徳上のあらゆる無感覚な行いを引き起こすようになる。今日の教会において、クリスチャンひとり一人が自分の中にこの痛みを感じる「するどい感覚」を養うことを神は求めておられると信じる。でなければ、私たちも、昔のイスラエルの民と同様に「うなじのこわい民」となってしまうであろう。それは「かたくなな心」であり、「石の心」である。

◆私たちが「真の知識」、「識別力」という霊的知性に裏打ちされた愛に満たされるならば、多くの問題が、個人的な感情に走ることなく、冷静に解決することができたに違いない。愛における知性と感性の両面におけるバランスが重要である。

(3) 真にすぐれたものを見分けること

◆パウロは「真の知識」と「あらゆる識別力」によって、「真にすぐれたものを見分けること」

ができるように」と祈っている。「真にすぐれたものを見分ける」と訳されたことばを他の聖書でみてみよう。口語訳では「何が重要であるかを判別すること」と訳し、新共同訳では「本当に重要なことを見分けられる」とし、柳生訳では「最善のものとそうでないものをはっきりと区別すること」、リビングバイブル訳では「善悪をはっきりと見分ける力がいつも備わること」と訳している。新改訳聖書の欄外注では別訳が記され、「異なっているものを区別する」とある。英語訳で、What is best と訳している聖書もある。

◆これらを総合するなら、何が重要なことかを見分けて Best と Better を区別すること、と定義づけることができる。あるいは、宝石の鑑定士のように真偽の違いを見分けることとも言える。

◆私たちの人生において、すべてははっきりとした善悪の区別をつけることのできない多くの決断がある。たとえば、

①お金の使い方の場合、十分の1を主にささげた残りの分をどのように使うべきであろうか。残りは自分のものだとみなしてかなり自由に使っているだろうか。それとも自分は主の管理者として考えて、手にあるお金はすべて最終的に主のものであるとみなし、天に宝を積むために最善に使おうとしているだろうか。

②時間の過ごし方についてはどうであろうか。

③読書においてどうだろうか。真に素晴らしいものにふれようとしているだろうか。

④個人的な祈りのためにどれだけ時間をとっているだろうか。主にあって向上しようという熱意を保っているだろうか。

⑤思いやり心はどうであろうか。思いやりのない人に対して、どれだけ皮肉な態度をとらずに、その人に仕えることができるだろうか。

⑥多くのなすべきことに翻弄されて、果てしなく動き回ってはいないだろうか。じっくり学んだり、黙想したり、思索したり、祈ったりする時間を取っているだろうか。果たして聖書的な優先順位を保っているだろうか。

⑦アルバイトの時間と学びや祈りの時間のバランスはどうだろうか。

◆こうした問いかけに対して、ひとり一人の答えには実に選択の幅がある。何がベストであるかについて、その答えは違ったとしても、私たちの神と人に対する愛が真の知識と識別力によって豊かにされるならば、これらの問いかけに対して、すぐれたものを選びたいと願うようになると信じる。

◆パウロ自身は、霊的に「真にすぐれたもの」が何であるかを見分け、それを求めることにおいて熱心で、かつ秀でた人であった。ピリピ書3章10～17節にその姿を見ることが出来る。

「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えるとはいません。ただ、こ

の一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目標として一心に走っているのです。ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう。もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてください。それはそれとして、私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。」（ピリピ3章10～17節）

◆パウロ自身、いつも「真にすぐれたもの」を祈り求めていた。パウロにとって、それはキリストの復活の力をますます味わい知ることであった。それが彼の礼拝者としての、またとりなし手としてのライフスタイルであった。そしてパウロは、ピリピの人々のためにも「真にすぐれたものを見分けることができるように」なるようにと祈り、励ましている。クリスチャンの人生において「真にすぐれたもの」「素晴らしいもの」を得るためには、最も良い決断・選択をするための識別力が必要なのである。

● **Better** ではなく、**Best (The thing that are excellent)** を見分け、それを選び取ることができるように祈ろう !!

B-15 パウロ自身のためのとりなしの要請

<はじめに>

◆講義 B では教会という共同体の枠におけるとりなしに強調点を置き、パウロ書簡に見られるとりなしの祈りをフォーカスしてきた。前にも述べたように、現代の教会の課題は、教会が共同体としての祈りを発見して、それを共同体の歩みの中心に据えることである。共に分かち合う共同体を建て上げることである。そのためのそのモデルとして、使徒パウロのとりなしの祈りを学んできたが、そのすべてを取り上げることができたわけではない。まだまだ不十分である。使徒パウロのとりなしの祈りに学ぶことは、単に、その祈られている内容にとどまることなく、その重要性を痛感し、その奥義にふれてそれを実際に生きることにある。

◆講義 B の終わりとして、パウロが書簡の中で自分自身のためにとりなしの祈りの要請をしている箇所注目し、その意義を考えてみよう。

(1) パウロ自身に対する祈りの要請・・個人的な祈りのパートナーの価値

◆使徒パウロは自分が執筆した書簡の中で、何と以下のように懇願している。

- ①「兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。」(ロマ 15: 30)
- ②「また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるよう私のためにも祈ってください。」(エペソ 6: 19)
- ③「私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」(エペソ 6: 20)
- ④「同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください」(コロサイ 4: 3)
- ⑤「私がこの奥義を当然語るべき語り方で、はっきり語れるように祈ってください。」(コロサイ 4: 4)
- ⑥「兄弟たち。私たちのためにも祈ってください。」(1テサロニケ 5: 25)
- ⑦「終わりに、兄弟たちよ。私たちのために祈ってください。主のみことばが、あなたがたのところと同じように早く広まり、またあがめられますように。」(2テサロニケ 3: 1)
- ⑧「私たちのために祈ってください。私たちは、正しい良心を持っていると確信しており、何事についても正しく行動しようとしているからです。(ヘブル 13: 18)

◆このようにパウロは、キリストのからだの一部分として、他の兄弟たちの祈りに依存している。20年間福音を宣べ伝えてきた後も、彼はなお語るべきことを十分に語れるように祈ってほしいと、兄弟たちに頼んでいるのである。それも一度だけではない。しばらくの間でもない。毎日、絶え間なく、彼の働きのために恵みが求められるように祈りの要請をしているのである。これは何を意味しているのだろうか。

◆ピーター・ワグナーは『祈りの盾』(1992年)という本を執筆しているが、彼はその本を執筆した理由をこう記している。「それは霊的力の源が、今日、教会で最も活用されていない<霊的指導者のためにとりなす祈り>にあると個人的に確信しているからである。・・現代のクリスチャンは、霊的指導者のための個人的な祈りのパートナーの力を活用しないばかりか、祈りのパートナーの存在自体がそもそも認識されていない」と述べている。この『祈りの盾』という本は、単なるとりなしの祈りについて扱われているのではなく、牧師をはじめとする「霊的指導者のためにとりなしの祈り」という明確な主題が取り扱われている。

◆パウロも書簡の中で、自分のために祈ってほしいと切願している。「私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください」(ロマ 15章30節)は、とりなしの務めが、祈る相手と共に霊的な協力体制をとることを意味している。ピーター・ワグナーは、パウロの個人的な実際の祈りのパートナーとして、ピリピ教会のユウオデヤとストケという二人の人物がいたと述べている。彼は、彼女たちがパウロの日常的なサポートよりもはるかに重要な役割を果たしていたと述べている。その根拠は「私に協力して戦ったのです」(ピリピ4章3節)という表現に用いられている言葉が非常に強い意味合いを含む動詞(シナスレオ)であることをあげている。このことばは「反逆し、戦いに挑んで来る敵を前にして一致団結して、戦いを進めること」を意味する。つまり、ピリピの町に福音が定着するために、彼女たちはパウロの兵卒として戦いを共にしているということである。それゆえワグナーは、彼女たちがパ

ウロの個人的な祈りのパートナーであるとしている。

◆イタリアの経済・社会学者ヴィルフレード・パレートは、19世紀の終わり頃、驚くべき発見をした。それは「パレートの法則」といわれるもので、20パーセントの人の働きが他の80パーセントの人を動かすという法則である。しかし、ピーター・ワグナーは、とりなし手にあてはめた場合、全体を動かす必要不可欠な数は全体の5パーセント程度だとしている。そしてこの少数派のとりなし手の働きがいかに驚くべき霊的力をもったものであるかを、多くの教会は理解していないとしている。

(2) とりなしの祈りを必要としている牧師、霊的指導者

◆クリスチャンであるならば、だれもがとりなしの祈りを必要としている。しかながら、牧師をはじめとする霊的指導者の場合は、キリストの体なる教会の中でもひとときわ多くのとりなしを必要としているのである。その理由は以下の通りである。

① 牧師はより大きな責任があるゆえに

◆ヤコブ書3章1節に「私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。」とある。世の終わりにすべてのクリスチャンはキリストの裁きの座に立たなければならないが、牧師や他の霊的指導者に対しては、二重のさばきがなされると警告されている。言い換えるならば、神の目からすれば、同じ罪でも他の人々が犯す罪よりも牧師が犯す罪の方が、刑罰が重いということである。このように指導的立場に立つことは大きなリスクを伴うのである。もし信頼が失われるような罪を犯すならば、キリストの体に対して多大な損害を与えることになるということである。それゆえ、霊的指導者はより多くのとりなしの祈りを必要とする。

② 牧師の方がより多くの誘惑に会うゆえに

◆霊的指導者として用いられればもちいられるほど、サタンのブラックリストの上の段階に名前が記されることになる。サタンは「食い尽くすべきものを捜して歩き回る、ほえたける獅子のような存在」である。それゆえだれよりも先に、指導者を食べ物にしようと狙っている。

③ 牧師はより大きな影響力を持っているゆえに

◆牧師が他のクリスチャンよりもとりなしの祈りを必要とする理由は、働きの性質上、多くの影響力を持っているからである。牧師が霊的に倒れると、他の人々が倒れた場合よりも、より多くの人々が傷つき、また霊的生活もダウンする。霊的に成熟したクリスチャンは裏切られたという思いに押しつぶされ、また、まだ成熟していないクリスチャンは牧師があのようなことを行っているのだから、私も同じ事を行なおうと思うようになる。また、牧師が倒れるならば、諸教会にも大きな痛手を与えることとなる。

④ 牧師は目立つ存在・・つまり批判の対象となりやすいゆえに

◆仕事の性質上、牧師は人の前により多く立たなければならない。そして当然、絶えざる噂話、そして批判の対象となりやすい。人々は牧師の良い点ばかりを見ているわけでは決して

ない。

◆このように、牧師たちは超自然的な助けを必要としているのである。そしてその超自然的な助けを提供するのが、とりなしの祈りであり、個人的な祈りのたちの存在なのである。しかも頻繁に、継続的なとりなしが必要なのである。

◆もし、こうしたとりなしの祈りによる霊的な協力体制を取ることが出来るならば、以前にはなかったほど、心の健やかさ、聖霊の実の豊かな現われ、個人的な祈り生活、すぐれた上からの知恵、新しい啓示、そして指導者としてのすぐれた面が現われてくるのである。それゆえ、パウロは自分のために祈りを要請したのである。

◆とりなしの祈りのパートナーとなって霊的指導者をカバーすることは、キリストの体なる教会に大きな霊的力を生み出すことである。その祈りの務めに献身する者を主は求めておられるのである。

C 社会とのかかわりを育てる

C-00 学びの視座と教会の今日的課題

(1) 学びの視座

◆講義 A では、「神との親しい関係を育てる」面に、講義 B では、「人との親しい関係を育てる」面において、特に、教会という共同体の交わりの枠におけるとりなしに強調点が置かれた。講義 C では、さらにホスピタリティ・マインドをもって人をもてなし、人と関わりながら、人と社会とに仕えていくという愛の働き、奉仕の生活についての模索である。

◆神のしもべとされた者が、神と教会、そして人(社会)に仕えるという視座から、愛の実践が単に教会内だけに通用するようなものではなく、ボランティア活動、社会福祉活動といったキリスト者の社会的責任についても触れる。これはまた、おのずと召命、職業、宣教とビジネスといった事柄にも抵触することになる。

(2) 教会、およびクリスチャンの今日的課題

① 自分の身を守ることに精一杯な現代社会において、しもべとして「仕える」ライフスタイルは必ずしも歓迎されるものではない。少しでも自分が得をし、楽することはばかり考えてしまう者が多いのではないか。神と人に仕えることを喜び、しかも自発的になすその生き方こそ、イエス・キリストご自身のこの世における生き方であったことを思い起こし、そこに光を当てること。

② 私たちは「霊的」であることを強調するがあまりに、社会の諸問題(飢餓、貧困、高齢化、障害者、子どもへの虐待、中絶、等)に無関心、無頓着であったりする傾向がある。「世の光」「地の塩」としての教会が、社会から遊離することなく、世(社会)に対する愛の実践者としての責任を果たしていくために、教会が、あるいはクリスチャンひとり一人が主から明確な召しをいただく必要があること。

◆以上の点こそ、教会、および私たちクリスチャンの今日的課題といえる。

(3) 主要聖句・マルコの福音書 10 章 45 節

「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕える(ディアコニア)ためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」

◆ここにキリストのしもべとしての姿がある。主の生涯はしもべとして仕える生涯であり、「主は、私たちのために、ご自身のいのちを与えられた」のである。このように、人の生涯は、「だれが」「だれのために」「自分のなにを」「どのようにしたのか」というワン・センテンスで言い表すことができる。

(4) キー・ワード

◆「しもべ」「仕える」「奉仕」「もてなし」「執事」、等

C-01 仕える(奉仕)ということ

(1) ディアコニア (ギリ = δ ι α κ ο ν ι α) 発端とその意味

◆上記の成句(マルコ 10 章 45 節)で使われている「仕える」は、ギリシャ語ではディアコニアである。主イエスはこのことばを自らの生涯の目的を表わす言葉として用いておられる。また同時に、このことばは主イエスに従う者のライフスタイルを表わすことばでもある。

◆ディアコニアは聖書の隣人愛の根源にある奉仕概念であり、またキリスト教社会福祉の原点でもある。自由意志を尊重するボランティア精神のルーツもこのことばから由来する。

◆「ディアコニア」の本来の意味は「給仕をする」「食卓に仕える」で、それは奴隷が全く自分の意志を殺して、ただひたすら主人のために仕える無私の給仕の心を表わす言葉である。ルカ 2 章 27 節では、キリストはご自身を「給仕する者」になぞらえている。

他にも「仕える」(奉仕)を意味するギリシャは数種類あるが、(※注 29) 主イエスがここでなぜあえて魅力的でないこのことばを選ばれたのか。不思議なことに、ギリシャ語訳旧約聖書 LXX には、このことばは全く使われていないのである。

◆以下にこのことばの意味を紹介しよう。(門脇聖子著『ディアコニア その思想と実践』— 愛の働きの源流—、キリスト新聞社、1997 年。14～15 頁参照)

①ディアコニアは第一に、奴隷の給仕の行為を意味するように、徹頭徹尾、他者の幸福を願い他者に仕える姿勢を表わす。ディアコニア憲章と呼ばれるマタイ 25 章 32 節以下には、飢えている人に食べさせ、渴いている人に飲ませ、裸の人に着せ、孤独の人を見舞う等の行為の総称をディアコニアと呼んでいる。ここには、何が本当に必要かを洞察する愛の感受性と具体的行為が要求されている。

②第二に、苦しんでいる人に仕えることは、「わたし(イエス)にしてくれたことである」という主イエスのみことばに心をとめたい。「死にゆく人々」に仕えているマザーテレサは「愛してもらえない人、飢え、裸で家のない人のなかにキリストはおられます」と言っている。ディアコニアの対象は、苦しんでいる人であり、同時にイエス・キリストである。主イエスに仕える心で困窮にある隣人に仕える時、ともすれば、私たちの心に頭をもたげる差別の心、感謝や報いを期待する心から自由にされ、心から相手を尊重する気持ちがわきあがってくるのではないだろうか。

③第三に、ディアコニアは私たちに与えられている様々な賜物—物質、知識、技術、愛の心、生命・・を人々のために役立てることである(ペテロ第一、4章10節)。私たちは神より与えられている理性、手足、心を用いて、より豊かな感受性を、技術を養わなければならない。そして一生をささげる心も。主イエスは「仕えるために来た」と言われ、続いて「多くのあがないとして(身代金として)自分のいのちをささげるために来た」と言われ、事実、ご自分のいのちを、私たちの罪と死のあがないのためにささげ尽してくださった。真の意味で、主イエスのみがディアコノス(仕える者)であられる。

④第四に、このようなディアコニアをいったい私たちは生きることができるのであるか、という問いである。主イエスが高熱で苦しむペテロのしゅうとめをいやされた時、婦人は「起き上がってイエスをもてなした(ディアコネオー)」。ディアコニアは、イエスによって受け入れられ、赦され、愛されている喜びからあふれ出る感謝の行為なのである。「神はそのひとり子を世につかわし、彼によって私たちが生きるようにして下さった。・・・ここに愛がある。神がこのように私たちを愛して下さったのであるから、私たちも互いに愛し合うべきである。」(1ヨハネ4章9～11節)

(2) 礼拝と奉仕の関係

◆礼拝ととりなしの働きが密接な関係があったように、礼拝と奉仕も密接な関係にある。しもべは聖書において理想的な人間像である。イスラエルで最もすばらしい人は仕えることのできる人、「神のしもべ」である、神に仕える人こそ最も栄誉ある人と言われる。「神のしもべ」こそ、聖書における神の民として最高の肩書きである。アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、エリヤ、そしてパウロはみな神から「神のしもべ」と呼ばれた。

(注 29)

◆ 例えば、①ラトネオー(λατρεω)、これは雇い人として仕えること。15回。②レイトールグオー(λειτοουργεω)、これは国や国民のための職務上の公的な奉仕を意味する。3回。

③ドゥーレノー(δ ο υ λ ε ν ω)、これはしもべ。奴隷として仕える。苦役につく、権力に服従する。強調点は仕えることの服従、屈服性にある。22回。④セラペノー(θ ε ρ α π ε ν ω)仕える。癒す。仕えることへの意志とそこから生まれる諸配慮の現実態に強調点がある。しばしば礼拝との関連で用いられる。1回。⑤ヒュペーレテオー(υ π η ρ ε τ ε ω)元来、下手のこぎ手をつとめることを意味する。奉仕する。仕えるべき主人との関連が強調される。1回。以上の③④⑤奉仕者と被奉仕者との関係を表わしている。そして最後、⑥ディアコネオー(δ ι α κ ο ν ε ω)給仕をする。お世話する。仕える。この言葉は特に、全人格的に他者に仕えること、他者のために存在することを表わすことばである。31回と最も多い。

C-02 旧約聖書におけるディアコニア <1>

特に、申命記における福祉理念について

<はじめに>

◆神の律法の二つの側面一つつまり神と人を愛すること―は、聖書全体においていつもバランスを保つよう求められている。それは教会の大きな機能として位置づけられる。一つは神に対する礼拝的側面であり、もう一つは人に対する神の愛の証言的側面である。へブル人への手紙13章15節と16節にそのことがまとめられている。

①〔礼拝的側面〕・「私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。」

②〔証言的側面〕・「善を行なうことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。神はこのようないけにえを喜ばれるからです。」

◆このように、隣人に対する奉仕は実際に神ご自身への奉仕であり、律法を真に完成するその愛の凝結したものにほかならない。神の愛の命令を具体的に表わした他者への心からの犠牲的奉仕と神への礼拝は旧約聖書においても完全に結びつけられている。参照。申命記10章12～19節。イザヤ書1章10～17節。「善をなすことを習い、公正を求め、しいたげる者を正し、みなしごのために正しいさばきをなし、やもめのために弁護せよ。」(17節)という倫理的命令は、礼拝の純粹さと誠実さに対する訓戒と結びつけられている。貧しい者、寄るべのないみなしごとやもめたち、あるいは在留異国人に対して親切に思いやりをもって取り扱うことの命令は、神への礼拝と密接な関係を持っているのである。

◆以下、旧約聖書の申命記を通して、旧約聖書におけるディアコニアの精神、特に、申命記における福祉理念を取り上げてみよう。

レビ人、および在留異国人、みなしご、やもめに対する福祉規定

①3年毎に収穫の十分の一を与える(12章18、19節、14章27～28節)

「・・・あなたの町囲み(※注 30)のうちにいるレビ人とともに・・・食べ、・・・あなたの手のわざを喜び楽しみなさい。あなたは一生、あなたの地でレビ人をないがしろにしないように気をつけなさい。(12章18、19節)

「あなたの町囲みの中にいるレビ人をないがしろにしてはならない。彼には、あなたのうちであって相続地の割り当てがないからである。三年の終わりごとに、その年の収穫の十分の一を全部持ち出し、あなたの町囲みの中に置いておかなければならない。あなたのうちであって相続地の割り当てのないレビ人や、あなたの町囲みの中にいる在留異国人や、みなしごや、やもめは来て、食べ、満ち足りるのであろう。あなたの神、主が、あなたのすべての手のわざを祝福してくださるためである。」(14章27～29節)

◆申命記15章からイスラエルにおける民の社会生活の福祉規定が記されるが、その前に、まずレビ人を大切にすべきことが記されている。イスラエルの生活共同体においてレビ人が軽んじられるような生き方、姿勢、または考え方は問題(危険)であるという思想がこの規定の背後にある。そしてそこから、在留異国人、みなしご、やもめの福祉が真剣に考えられ、取り扱われるような生き方が生み出されるということである。これは神の民としての社会が祝福されるための規定である。

②落ち穂について(24章19～21節)

「あなたが畑で穀物の刈り入れをして、束の一つを畑に置き忘れたときは、それを取りに戻ってはならない。それは、在留異国人や、みなしご、やもめのものとしなければならない。あなたの神、主が、あなたのすべての手のわざを祝福してくださるためである。あなたがオリーブの実を打ち落とすときは、後になってまた枝を打ってはならない。それは、在留異国人や、みなしご、やもめのものとしなければならない。ぶどう畑のぶどうを収穫するときは、後になってまたそれを摘み取ってはならない。それは、在留異国人や、みなしご、やもめのものとしなければならない。あなたは、自分がエジプトの地で奴隷であったことを思い出しなさい。だから、私はあなたにこのことをせよと命じる。」

(注 30)

◆「町囲み」とは信仰生活共同体を意味する。現代のキリスト教会は、個人主義的な傾向が強くなり、共同礼拝中心となっているため、町囲み(生活共同体)ぐるみで生きる教会形成のために、こうした旧約聖書の契約の教えに大いに注目する必要がある。

貧しい者、奴隷に対する福祉規定

(1) 貧しい者に対する負債の免除(15章1～11節)

◆七年目ごとの負債の免除は、すべての負債が七年目にゼロになることではなく、その年の収穫からは取り立てられないという意味である。なぜなら、七年目は安息年だからである。

「・・・貸し主はみな、その隣人に貸したものを免除する。その隣人やその兄弟から取り立ててはならない。主が免除を布告しておられる。・・・そうすれば、あなたのうちには貧しい者がなくなるであろう。あなたの神、主が相続地としてあなたに与えて所有させようとしておられる地で、主は、必ずあなたを祝福される。」(15章2節、4節)

◆町囲みの内に貧しい兄弟がいる時、困窮している兄弟に対して「あなたの心を閉じてはならない。また手を閉じてはならない」(7節)。心を「閉じる」とは、貧しい者を見ると貝のように警戒して即座に自分を「固くする」ことである。「手を閉じる」とは、持っているものを握り締めて離さないこと。そうではなく「進んであなたの手を彼に開き、その必要としているものを(必要なだけ)十分に」快く貸し与えなさいと言われる(8節)。

◆免除の年が近付いていることから、邪念をもって、貧しい兄弟に対して「物惜しみして」「目をつぶり」与えることなく、自分を守り、そのために貧しい者「主に訴えるなら、あなたは有罪となる」とある(9節)。従って、「必ず彼に与えなさい」と命じられている。与える時も決して「心に未練を持ってはならない」。報いを求めず進んで行う心からの愛をもって与えることが命じられている。このことにより、神はその者のすべての働きと手のわざを祝福してくださると約束しておられる。

◆この福祉規定は「あなたがたの中に貧しい者がいないように」(4節)するためである。と同時に、「貧しい者は国の中から絶えることはない」(11節)とも記されている。ここに理想と現実のギャップがある。しかしこの4節と11節のギャップを埋めるものは「分かち合いの精神」である。

◆8節に「貸し与える」ということばが出てくる。ただ与えるのではなく、貸し与えるのである。貸すことであって、そのまま与えるということではない。困窮している者がやがて自ら独立できるように、貸し与え、それをもとに取り組んでいけるようにサポートすることである。しかし、貧しい者は努力しても返せないことがあり、そのために安息年という制度が設けられた。どんなに良い制度でも人によって悪用されうる可能性は残る。ここで大切なことは、借りたら返すという考え方が根底にはっきりとあることである。借りたら返すという意識の中でやっていくという考え方が大切にされないとなれば、健全な「分かち合いの精神」を育てることは難しいと思われる。

(2) 奴隷に対する人格的な扱い(15章12～18節)

◆ここで「奴隷」ということばが登場するが、現代でいう「雇用関係」と考えるほうが正しい。売買による奴隷ではなく、契約による「住み込み雇い人」である。確かに、貧しさのゆえに身を売らなければならない状況が生じたと思われる。そうした同胞に対して、人格を認め、雇用契約が交わされた。七年目には自由の身となり、自分の意思表示をすることができた。

◆七年目に自由の身となり、雇用関係から自由になる場合、何も与えずに去らせてはならない。雇用の働きによって得た収益を神からの祝福として、その奴隷に対し、これからの生活保証となるものを与えて去らせる義務があった。もし、本人が七年目になっても主人のもとを去りたくないという場合、いつまでもそこにとどまり仕えることができる。去るかとはどまるかは、主人の意志ではなく、奴隷本人の自由意志によって決められるところに、この世の倫理的対照がある。

◆まさに、この箇所には、聖書の示す雇用関係の美しさを見ることができるのである。このことは、今日のクリスチャンのビジネス経営ということを考えるとき、その経営理念に大きな影響を与えることになる指針といえる。

C-04 しもべなるキリスト <1>

<はじめに>

◆新約聖書の福音書におけるイエス・キリストのディアコニア(奉仕一仕えること)を学ぶ前に、旧約聖書、特にイザヤ書の後半に預言されている「主のしもべ」としてのメシヤに注目してみたい。

◆預言者イザヤは、四つの「主のしもべの歌」を記している。その歌にはメシヤ、すなわちキリストが「主のしもべ」として来られることが預言されている。その歌の箇所は以下、① 42章1～4節、② 49章1～6節、③ 50章4～9節、④ 52章13節～53章12節の四つであり、しもべの姿が実にいろいろな角度から描かれている。(※注31)

しもべなるメシヤの四つの姿

(1) しもべの召命(イザヤ書42章1～4節)

「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。彼は衰えず、くじけない。ついには、地に公義を打ち立て

る。島々も、そのおしえを待ち望む。」

◆神がしもべとしてお選びになった方は、神の圧倒的な支持を受け、しかも神が心から喜んで託すことのできる方である。イエスが洗礼を受けられたとき、天から声がして「あなたはわたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ」と言われたが、まさにこのイザヤ書4章2節1節のことばであった。この方は「国々に公義をもたらし」(口語訳「道をしめし」)、「まことをもって公義をもたらす」(口語訳「真実をもって道を示す」)とある。4節には「彼は衰えず、くじけない、ついには公義を打ち立てる」(口語訳「・・遂に道を確立する」)と預言されている。

◆神のしもべは、本当の道を見失い、行き詰まってしまった人々の「いたんだ葦を折ることもなく」「くすぶる灯心を消すこともない」方として、弱い人々に行き届いた配慮を持って、くじけることなく道を教えるお方として預言されている。やがて来られたイエスはまさにそのようなお方であった。マタイ12章18節参照。

(2) しもべの使命(イザヤ書4章9節1～6節)

◆「島々よ。私に聞け。遠い国々の民よ。耳を傾けよ。主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた。主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私を隠し、私をとぎすました矢として、矢筒の中に私を隠した。そして、私に仰せられた。

『あなたはわたしのしもべ、イスラエル。わたしはあなたのうちにわたしの栄光を現わす。』しかし、私は言った。『私はおだな骨折りをして、いたずらに、おなしく、私の力を使い果たした。それでも、私の正しい訴えは、主とともにあり、私の報酬は、私の神とともにある。』今、主は仰せられる。——主はヤコブをご自分のもとに帰らせ、イスラエルをご自分のもとに集めるために、私が母の胎内にいる時、私をご自分のしもべとして造られた。私は主に尊ばれ、私の神は私の力とされた。——主は仰せられる。『ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。』

◆この箇所はしもべの使命について触れている。つまりこのしもべが、その生涯においてどのような働きをするか、その働きについて記されている。「あなたはわたしのしもべ、イスラエル。わたしはあなたのうちにわたしの栄光を現わす」 しもべは真のイスラエルとして神の栄光を現わすために立てられた。しかしその働きは、「おだな骨折りをして、いたずらに、おなしく、・・力を使い果たすような」ものであった。人々はこのしもべを斥け、拒絶して受け入れないと預言されている。しかしそのような挫折感を味わうような困難の中でも、しもべはなおも「私の正しい訴えは、主とともにあり、私の報酬は、私の神とともにある」と神を信頼してその使命を主人のために全うしようとする。

◆またしもべの使命はイスラエルのみならず、諸国の民の光として、地の果てにまで神の救いをもたらすと預言されている。

(3) しもべの受難(イザヤ書50章4～9節)

◆「神である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、朝ごとに、私を呼びさまし、私の耳を開かせて、私が弟子のように聞くようにされる。神である主は、私の耳を開かれた。私は逆らわず、うしろに退きもせず、打つ者に私の背中をまかせ、ひげを抜く者に私の頬をまかせ、侮辱されても、つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。しかし、神である主は、私を助ける。それゆえ、私は、侮辱されなかった。それゆえ、私は顔を火打石のようにし、恥を見てはならないと知った。私を義とする方が近くにおられる。だれが私と争うのか。さあ、さばきの座に共に立とう。どんな者が、私を訴えるのか。私のところに出て来い。見よ。神である主が、私を助ける。だれが私を罪に定めるのか。見よ。彼らはみな、衣のように古び、しみが彼らを食い尽くす。」

◆この神のしもべは、単に挫折感を感じただけではない。人々に真の道を教えようとしようとするとき、かえって、ひげを抜かれ、つばきをかれられ、迫害を余儀なくされる。なぜそこまでするのか。ところが、このしもべは主人を愛している。何が起ころうともしもべとしての務めを果たそうとする。なぜなら、主人である神は、しもべの耳を開かせ、いつでもその声が聞こえるようにしてくださったからである。聞くとは従うことである。しもべは主人の声を聞いて、迫害の中に立ち向かっていかれた。主イエスのゲッセマネの祈りとその後の毅然とした姿を思い起こそう。

(4) しもべの身代わりの死とその克服(イザヤ書52章13節～53章12節)

◆「見よ。わたしのしもべは栄える。彼は高められ、上げられ、非常に高くなる。多くの者があなたを見て驚いたように、——その顔だちは、そこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。一彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。・・彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。・・彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。・・・・彼は多くの人の罪

を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。」

◆しもべは自分の罪のゆえではなく、人々に代わって神に打たれた。その打ち傷によって人々はいやされる(救われる)。しもべは、自分のいのちの激しい苦しみの後を見て、満足する。しもべの身代わりの死は多くの人を義とする。そして今もなお、主イエスは神に背く人々のためにとりなしおられるのである。

(注31)

◆小林和夫著『イザヤ書講解説教(下)』(日本ホーリネス教団出版社、1992年)を参照のこと。

C-05 しもべなるキリスト <2>

(1) 完全なしもべ、キリストの二つの面

◆預言者イザヤは「主のしもべの歌」の中で、やがて来られるメシヤ、すなわち主イエス・キリストを二つの面から描いている。ひとつは〔受動的な面〕であり、もうひとつは〔能動的な面〕である。この二つの面が組み合わされることにより、完全な神のしもべの姿が浮び上がってくる。

① 受動的な面

- a. 自分の苦難を忍耐をもって忍ばれた。
- b. 私たちの身代わりとしての罪を負われた。

② 能動的な面

- a. 神のみこころを行なうため、神に栄光を帰すために選び召し出された方に従われた。
- b. 弱い者に対して情け深く、憐れみ深い方である。
- c. 疲れた者に励ましのことばを語られる。
- d. 盲人であり、囚人に対しても霊的な助けをもたらす。
- e. 反抗に直面してもゆるがない。

(2) 新約聖書における「しもべ」としてのイエス・キリスト

◆イエスはその生涯とその働きにおいて、奉仕(ディアコニア)の完全な模範を与えられた。イエスは御足の跡を踏み従うようにと模範を残された。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕える(ディアコニア)ためであり、また、多くの人のための、贖いの代価と

して、自分のいのちを与えるためなのです。」(マルコ10章45節)と語り、「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。人の上に立ちたいと思う者は、みなのもべになりなさい。」(マルコ10章43、44節)と教えている。

◆福音書でディアコニアを「給仕をする」という意味で使われている箇所は、他にルカ12章37節、ルカ17章8節、ルカの福音書22章27節、ヨハネ12章2節である。

【検証】 その1・・・ルカ17章7～10節

◆「ところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野らから帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい。』としもべに言うでしょうか。かえって、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい。』と言わないでしょうか。しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちが役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。」

◆ここに登場するしもべは、当時のしもべと主人の関係をよく表わしている。当時のしもべは普通、畑仕事と家事の両方をあわせ持っていた。一日中畑で仕事をし、ひと息する間もなく、帯を締めて主人の食事の給仕に当らなければならなかった。「帯を腰に締める」ことは主人のしもべとしての関係を表わしている。しもべの務めは、主人の所有物であるため、当然のこととして報酬を考えずに、ただひたすら主人の意志に従い、主人に仕える存在であった。このようなしもべと主人の関係を表わすことばが「給仕する(ディアコニア)」という言葉である。ところが、この関係を逆転する話がルカ12章に登場する。

【検証】 その2・・・ルカ12章36～38節

◆「腰に帯を締め、あかりをともしていなさい。主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、いつでもそのようであることを見られるなら、そのしもべたちは幸いです。」

◆ここには、婚礼から突然帰ってきた主人を、目を覚まして迎えたしもべたちに「主人のほうで帯を締めて」進みよって給仕をしてくれるということに驚かされる。なぜなら、それは当時全く考えられないことだったからである。立場の大逆転が起こっている。

◆主人自ら彼のしもべの給仕人となるということは、主人がしもべのものとなり、主人がしもべに自分自身をささげ尽くすことを意味する。これこそ、イエスが死の前夜、最後の晩餐の談話の中で語ったことであつた。ルカ22章27節。

【検証】 その3・・・ルカ22章26～27節

◆「食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょう。むしろ、食卓に着く人でしょう。しかしわたしは、あなたがたのうちにあって給仕する者のようにしています。」

◆給仕される者(接待される者)は、給仕する者(接待する者)よりも上の立場にあるということはこの世の人間関係の常識である。ところがイエスはこの世の権威と支配の常識を真っ向からくつがえし、神の国における真の偉大さの基準が実に「給仕すること(ディアコニア)」であると主張された。それゆえ、イエスは、だれが一番偉いだろうかと議論していた弟子たちに、「あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようにになりなさい。また、治める人は仕える人のようでありなさい。」(ルカ2 2章26節)と言われたのである。まさに、「仕えることは、支配すること」である。これが御国の原理である。

〔検証〕 その4・・・ヨハネの福音書13章の〔洗足の行為〕

◆「さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。・・・夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとしておられる手ぬぐいで、ふき始められた。こうして、イエスはシモン・ペテロのところに来られた。ペテロはイエスに言った。『主よ。あなたが、私の足を洗ってくださるのですか。』イエスは答えて言われた。『わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。』ペテロはイエスに言った。『決して私の足をお洗いにしないでください。』イエスは答えられた。『もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。』・・・イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。『わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。わたしがあなたがたにしたとありに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさるものではありません。あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行なうときに、あなたがたは祝福されるのです。』

◆ルカはイエスが「給仕をする」ということばで仕えることを表わしたが、ヨハネはイエスが自ら弟子たちの足を洗うという行為でそのことを表わした。足を洗うのは当時、奴隷の仕事であった。イエスは、弟子たちに模範を示された。そしてそれを行なうなら祝福されると約束された。ディアコニアのライフスタイルは、単に、主に従う個人の生き方のみでなく、教会そのものが、ディアコニア共同体とならなければならない。

◆「給仕する」というディアコニアの本来の意味をまとめてみると、・・・

- ①ディアコニアは給仕すること、すなわち手、足、体を使っての全身的・具体的行為。
- ②完全に他者中心の行為、生き方を現わす。(※注32)
- ③仕える根拠は主の贖いに対する感謝のゆえである。それゆえ、仕えるとき人からの感謝も報酬も期待しないで為すことである。

(注 32)

◆日本において10年前から「モノからココロの時代」と言われて久しいが、最近、こうした考え方は「ホスピタリティ・マインド」(Hospitality Mind)として注目され始めてきている。これまで企業は製品志向であったが、今や、顧客志向に移行して生きている。このことに無関心な会社は生き残れないとさえ言われる。これからの教会においてもホスピタリティ・マインドはキーワードである。それは神のもてなしの精神であるから。

C-06 新約聖書におけるディアコニア

〈はじめに〉

◆現代の日本社会においては介護の時代を迎えている。介護とともによく使われる二つのことばに、①デイ・ケア ②デイ・サービスがある。ケア **care** とは「お世話する、気にかける、もてなす」という意味であり、サービス **service** とは「仕える、奉仕する」という意味である。いずれも、そのことばの源泉は「ご自分を無にして、仕える者の姿」をとられたイエス・キリストにある。イエス・キリストこそ愛に満ちた真のディアコニアの最高の模範である。イエスは「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。」と述べている(ヨハネ12章26節)。ここにはイエスとイエスに従う者との親密なつながりと、忠実な奉仕に対する確かな報いとの関係が明らかにされている。

◆ここでは、模範として示されたイエスのディアコニアとその教えが使徒たちにどのように受け継がれ、新しく造られた教会においてどのようにして具現できるのかを考えてみよう。

(1) 新約聖書におけるディアコニアの教え

◆新約聖書において、教会につながるすべての者のディアコニアが繰り返し強調されている。たとえば、使徒パウロはエペソ人への手紙4章11～12節において、キリストご自身が「ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。それは、聖徒たちを整えて奉仕(ディアコニア)の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり・」と述べている。キリストのからだを建て上げるために、奉仕の働きに加わっているのは、ある一部の者たちではなく、「すべての聖徒たち」である。そして「すべての聖徒たち」は、ひとりひとり、キリストの賜物のはかりに従って(つまり、神のみこころによって)、恵みとして与えられているのである(エペソ4章7節)。

◆使徒ペテロは、「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。語る人があれば、神のことばにふさ

わしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。・」(1ペテロ4章10～11節)。

◆このように、横の面においてディアコニア実際に活用すべきことを、自分の置かれた場所で、与えられた賜物を用いて、隣人の利益と幸せのためにディアコニアに加わるべきことが奨励されている。これはすべての聖徒が隣人のための祭司となるよう召されているということである。ルターは、これを全祭司制と言っている。

(2) 御霊の賜物について

◆御霊の賜物は、個々のクリスチャンの中に与えられた特別な資質(超自然的な賜物)であり、才能である。御霊はこれを用いて、教会を建て上げ、神と人、そして社会(世)へのティアコニアのための有用な手段とする。

◆使徒パウロはコリント人への手紙第一12章1節で「さて、兄弟たち。御霊の賜物についてですが、私はあなたがたに、ぜひ次のことをしていただきたいのです」と述べている。これは御霊の賜物について決して無知であってはならないということである。無知であってはならない理由を、ピーター・ワグナーは次のようにまとめている。(※注33)

- ① 御霊の賜物は、キリストのからだなる教会を成長させ、建て上げていく上で、欠かすことのできない、絶対に必要不可欠な力であること。
- ② キリストのからだにおけるあなた自身の存在価値(目的)は、あなたに与えられている御霊の賜物によって決定されること。
- ③ 御霊の賜物の理解は、教会の組織を理解していく鍵になること。

◆それゆえ、私たちは自分に与えられている賜物がなんであるかを見出すことが重要となる。賜物を見出すための5つのポイントは、

- a. 祈ること
- b. できるだけ多くを試みる(与えられた機会、重荷と感ずるところは何か)
- c. 喜びがあるかどうか(自分が用いられ、生かされているという実感)
- d. 実際の効果(良い結果)があ.かどうか
- e. 教会による確認(第三者による評価)

◆自分の賜物を早急に判断することをせず、時間をかけ、慎重に、柔軟な姿勢をもっていることが大切である。

(3) 神の恵みの良い管理者として生きる

①タビタ(ドルカス)

「ヨッパにタビタ(ギリシヤ語に訳せば、ドルカス)という女の弟子がいた。この女は、多くの良いわざと施しをしていた。ところが、そのころ彼女は病気になって死に、人々はその

遺体を洗って、屋上の間に置いた。ルダはヨッパに近かったので、弟子たちは、ペテロがそこにいると聞いて、人をふたり彼のところへ送って、「すぐに来てください。」と頼んだ。そこでペテロは立って、いっしょに出かけた。ペテロが到着すると、彼らは屋上の間に案内した。やもめたちはみな泣きながら、彼のそばに来て、ドルカスがいっしょにいたころ作ってくれた下着や上着の数々を見せるのであった。」(使徒9章36～39節)

◆彼女は服を作ることが得意だった。彼女は服を作ることによって人々に奉仕した。それは多くの人々に感謝された。私たちがこの世を去る時に意味を持つのは、自分のためにしたことではなく、他の人のためにしたことである。今回のドルカスがその良い例である。イエス様の言われた「受けるよりも与える方が幸いなのです。」これはこの世の価値観と全く逆である。

◆三浦綾子は「人がどれだけ豊かであったかは、その人がどれだけ得たかではなく、どれだけ散らしたかということである」と述べているが、彼女の人生もまさにそうであった。旭川市にある『三浦綾子文学記念館』は彼女を通して励まされた多くの人々によって建てられた。

◆三浦綾子が正式に小説を書き始めたのは、42歳の雑貨屋の主婦であったときである。しかし彼女が作家活動にはいるまでには測り知れない苦しみを経験の下地があった。戦時中に小学校の教師として偽りを教えてしまったという自責の念、その後の肺結核と脊椎カリウスによる13年間の闘病生活、そしてその間のイエス・キリストとの出会いと受洗・という土台の上に、彼女は書くということを始め、天に召されるまで80冊ほどの本を書き続けた。その一冊一冊の本によって多くの人々が感動し、慰められ、生きる勇気が与えられた。

◆タビタは服を作ることによってやもめたちに奉仕し、三浦綾子はものを書くことによって多くの人々の心に語りかけるという賜物を与えられた。それは、二人とも、神の恵みの良い管理者として、他の人の幸せのために自分に与えられている賜物を大切に用いたということである。

②フィベ

「ケンクレヤにある教会の執事で、私たちの姉妹であるフィベを、あなたがたに推薦します。どうぞ、聖徒にふさわしいしかたで、主にあってこの人を歓迎し、あなたがたの助けを必要とすることは、どんなことでも助けてあげてください。この人は、多くの人を助け、また私自身をも助けてくれた人です。」(ローマ人への手紙16章1、2節)

◆彼女は、パウロから頼まれて本書をローマに運ぶ重大な使命を託された。フェベはケンクレアイ教会の女執事(δίακονία δειψα)であった。彼女は「多くの人々の援助者、特にわたしの援助者」であった。ケンクレアイはコリントの東にある港町。東方との貿易が行われていた。そこには貧しい人、やもめ、孤児、旅行者などが多くいて、教会はその人たちの世話をしていた。

(注33)

◆ピーター・フグナー著『あなたの賜物が教会成長を助ける』(いのちのことば社、1978) 参照。

〈はじめに〉

◆今回は、初代教会がイエス・キリストの出来事から生まれたディアコニア共同体(仕える共同体)が、どのように教会を組織し、主イエスのディアコニアの教え生かしていったのか。また使徒時代に続く「使徒教父時代」(約90年～140年)において、それがどのように展開していったかを概観したい。使徒教父とは使徒の教えを受け継いで正統的信仰を生き、伝えた人々で、文書も残しており、これを使徒教父文書と呼んでいる。

◆以下の多くは、門脇聖子著『ディアコニア・その思想と実践』に拠っている。

(1) 使徒時代におけるディアコニア

① 相互扶助

◆まず、紀元30年代に誕生した初代教会の生活を要約している箇所は、使徒の働き2章42～47節、4章32～35節である。

「一同は、ひたすら、使徒たちの教えを守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈りをしていた。・・信者たちはみな一緒にいて、一切のものを共有し、資産や持ち物を売っては、必要に応じてみんなのものを分け与えた。」(使徒2章42～47)

◆使徒たちの教え、パンさき、祈りのすべてにかかわる「ひたすら」という言葉は、ギリシャ語のプロスカルテローンテスという動詞で「強い」を表わすカルトスを語源とし、「固執する」「専念、熱中する」など強い執着心を表わすことばである。また「交わり」は「施し」とも解釈することができることばで、そこから「日々の配給」(6章1節)、あるいは「食卓の交わり」すなわち「愛餐」と考え得る可能性もある。いずれにしても、イエスをキリストと信じる者の群れは、教え、交わり、パンさき、祈りにひたすら固執し、専念し、そこからイエスにあって一つであるという強い一体感が生まれ、2章45節、4章32～35節に記されているように、一切の持ち物を共有にし、必要に応じて分かち合う生活が営まれた。

◆このように初代教会の相互扶助の前提には、まずイエスを信じ、ひたすら使徒たちの教えを守り、パンをさき、祈り交わる信仰共同体があったこと、そしてこの信仰共同体に属する者たちの間で、積極的、自発的に所有を共有し合い、助け合う生活が生まれてきていることに注目したい。

② パンさき

◆初代教会が固執したことの一つに、「共にパンをさく」ことがあった。使徒2章42節、46節。ユダヤ教では単にパンの塊を裂く行為であり、感謝の祈りと結びついて食事を始める儀式を意味したが、初代教会においては、それに続く交わりの食事、すなわち、信仰を共にし、所有を共にした信徒たちの愛餐を意味していた。これはコイノニア共同体としての大切

な面であった。

◆しかし後に、使徒パウロはコリント人の手紙の中で、異邦人クリスチャンたちのある人々が、教会に共に集まっている貧しい人々への配慮が怠りがちになって来ている事を指摘し、貧しい人々への愛の配慮を怠らないようにと勧めている。

③ ディアコノス(執事)の誕生

◆使徒時代の教会は、先に触れたように自発的な愛の相互援助の共同体となり、成長していった。しかし会員の増加と共に、この共同体の特徴である相互援助をめぐる問題が生じた。そのことが使徒6章1～6節に記されている。つまり、ヘブル語を話すユダヤ人とギリシャ語を話すユダヤ人、すなわちヘレニストの寡婦(やもめ)たちへの日々の配給に不公平が生じたのである。そこで使徒たちは、相互扶助が公平かつ円滑にいくように手助けする七人を選んだ。この七人が最初のディアコノス(執事)と呼ばれるようになった。

◆彼らを選出した目的は、第一義的に施し物の配分者という実践的な奉仕であったが、彼らは同時に「言葉のディアコノス」でもあった。七人の一人ステパノは迫害の中で宣教し、ピリポはエチオピアの宦官に宣教し、洗礼を施している。

◆最初は教会の指導の責任を使徒が負っていたが、次第に教会が拡張すると、具体的必要から「監督」「長老」「執事」が置かれるようになった。また、ローマ書16章1節には女性執事「フィベ」がいたことを記している。彼女は、ケンクレヤの教会で、貧しい人々、病人たちの世話をし、異邦人やおそらく婦人たちの洗礼の手伝いをもしていたであろう。フィベは執事(ディアコノス)と呼ばれているが、女性の執事が教会の必要に応じて自然に生まれていることは注意すべきである。男女の差別の激しかった当時の社会において、愛の奉仕においては、性の差別なく世話役が生まれていたのである。

◆このように、初代教会においては共同体での必要に対応するために、執事(ディアコノス)が生まれたが、監督や長老も含めての教職制度として統一整備していく関心は、この時期にはなかったようである。あくまでも、信仰共同体として、それが証と愛の相互扶助の共同体であり続けるために、現実のニーズ(例えば、旅人をもてなし、獄にある者を見舞うこと)にどう仕えていくかに関心があったようである。

(2) 使徒教父時代におけるディアコニア

◆第一世紀より二世紀前半(90年～140年)は、使徒教父時代と呼ばれている。(※注34) 教会は成長したとはいえ、当時の社会の中ではまだ小さく統一組織を持たず、不安定な時期にあった。それは使徒たちが世を去って、使徒にかわる後継者がなく、教職制もまだ確立していなかったからである。このような時代に指導的役割を果たしたのが、使徒教父と呼ばれる人々であった。「教父」とは、使徒の教えを受け継いで正統的信仰を保持し、教会の発展に献身的な努力をし、後の教会が、なお教えの基準をそこに求めることのできる人々を指している。この時代の教会生活は、彼らが残したわずかな文書を通して推測できるのみである。(※

注 35)

① 隣人愛の教えの変質—功績思想の芽生え—

◆教会はヘレニズムの世界へと拡散していった。この異教徒の取り巻く社会の中で、キリスト者の群れは、互いに愛し合う群れという印象を与えた。しかし残念なことに、それが少しずつ変質していったのである。

◆教会が異端の迫害に耐えて愛し合う群れとして生き続ける努力の中で、愛の行為によって罪が赦されるという罪障消滅思想が、使徒後教父たちの教えに芽生え始めている。当時の教会生活を知るうえでの良い資料となっている「ディダケー」には、すでに、隣人を愛することは、罪のあがないになるという暗示がある。クレーメンスの第一、第二の手紙にも純粋な愛の戒めがあると同時に、・・「愛のゆえに私たちの罪が赦される」「施しは罪の悔い改めと同様に立派な行いである。断食は祈りよりも優れている。しかし施しはその両者に勝るものである。・・施しは罪を軽くしてくれるからである。」と記されている。ここに明らかなことは、愛の業が、罪のゆるしに役立つという功績思想が入り込んでいることである。相手のための施しであるべきものが、自分の罪帳消しためという動機にすりかえられるとき、相手のニーズへの無配慮な施しとなっていったことを裏づけている。

② ディアコノス(執事)の職制化へ

◆この時代は監督を頂点とする職階制度が形成されていった時代で、信徒の隣人愛の活動も、執事という職制の中に統一されていく方向を取っている。それは組織化されていくという利点はあったかもしれないが、信徒の自由な愛の業が枯渇していく方向を取ったことは否めない。確かに、現実のニーズから、監督、長老、預言者、教師たちが生まれた。しかし、やがて監督職の権威が徐々に重んじられ、イグナティオスの時代(170年代)には、監督を頂点として、その下に長老団が属し、一般信徒の指導に当たり、さらに、数名の執事がこれを助けて教会の統一を司るという組織が成立していった。もっとも、イグナティオスは、異端による危機を見て、会衆と司教の固い結束を勧めたのであり、職階制度の意味に理解されることを意図していなかった。にもかかわらず、彼の監督、長老、執事職への過度の尊重の姿勢が独裁監督制への道に拍車をかけたといわれている。

◆本来、教会内の相互補助を円滑にするために選ばれ、隣人愛の業の担い手であった執事も、このような職階制成立の歯車に組み込まれ、監督の支配下の下に置かれ、その自由さを失っていった。監督と執事との関係は、父と子のごとくであり、執事は監督の耳、口、心と一体でなければならなかった。行動する時は、必ず、監督の許可を得なければならぬし、報告を怠ってはならなかったために、やがて独裁監督制への途上にある監督と密接な関係を保ちつつ生きねばならなかった執事たちは、しもべの道から離れて、支配者への道をたどっていった。状況に呼応した隣人愛の働きは、この時代では例外的になりつつあったのである。

(3) 今日における執事(ディアコノス)の働きの復権

◆歴史的には執事の職務は教会の活動において最も基本的な部分を受け持つ職位であった。今日の教会において、この執事の職は、もっと強調されても良いのではないか。執事の主要な職務は教会活動全般にわたって、牧師を助け、「仕える」働きの中核に位置するものである。古来、執事の働きによって教会の活動は円滑に行なわれてきました。とすれば、現代の、キリスト教会においても、この執事の職務について再検討されるべきではないだろうか。

◆執事の職務は教会堂や財政の管理のみならずのみならず、貧しい教会員の方の世話、家庭訪問、教会員の相談を受けたり、その他牧師の補助、一切の奉仕をまかされたりしている。

① 執事は牧師の協同者

◆執事は、教会がその使命と職務を十分果たしていけるように、教会の働きのすべての面において、牧師と共に働く務めを託されている。助け手とは、男女関係においてと同様（創世記2・18参照）、上下関係でなく、パートナーという意味である。執事は、牧師の働きを助ける務めを通して、キリストのからだなる教会に仕える人なのである。牧師個人のためということではなく、教会の使命遂行のために牧師を助けるのである。そういう意味で、執事が牧師の良き相談相手になれば素晴らしいことだといえる。それは牧師個人の相談相手である以上に、牧師が教会の働きをなす上での協力者という意味である。パートナーシップをもって、牧師は執事のために祈り、執事は牧師のために祈るのでなければならない。

② 執事は牧会協力者

◆執事は牧会の協力者でもあります。牧会とは、人がキリストのからだなる教会につながり、教会を建て上げ、クリスチャンとして証の生活を続けていくよう、配慮し、励まし、支え、指導、訓練、訓戒、保護することです。そういう意味で牧会は教会全体の働きです。

◆一人の牧師の働きには限界がある。当たり前であるが、牧師もただの弱い人間、罪人にすぎない。長所や短所もある。時に、牧師自身も他の誰かからの牧会を必要とする。したがって、教会の牧会がよりよくされるために、牧師を補い、支える牧会協力者が必要なのである。特に執事にはその役割が期待されている。

③ 執事は教会員の模範

◆教会の働きのすべての面において、牧師と共に働く務めを託されている執事の働きは、牧師と同様、教会の使命と職務を十分に認識し、その使命と共に生きようという決意がなければならない。執事は教会員の模範となるように、主日礼拝だけではなく、祈禱会をはじめ他の集会も大切に守らなければならない。そのようにして初めて教会の現状を知り得る。説教を最も熱心に聞き、時間やお金の使い方についても模範とならなければならない。

◆主に対して誠実な執事は、牧師と教会員との双方から信頼され、牧師の相談相手だけでなく教会員の良き相談相手にもならなければならない。様々な相談が持ち込まれ、教会や牧師・役員に対する不満を聞く機会もあるかもしれない。信頼される執事は、そんな時でも単なる「不平不満まとめ係」「信徒利益代表」になってはならない。執事はつねにキリストのからだ

なる教会の徳を高める立場・教会形成的視点から考え、発言し、動かなければならない。その時、その執事は信頼のおける牧会協力者としての務めを果たすことになるはずである。

④ 聖書の教える執事の資質

◆「執事もまたこういう人でなければなりません。謹厳で、二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利をむさぼらず、きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人です。まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事の職につかせなさい。婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。執事は、ひとりの妻の夫であって、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。というのは、執事の務めをりっぱに果たした人は、良い地位を占め、また、キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信を持つことができるからです。」(1テモテ3章8～13節)

<3章8～9節>

a. 謹厳、尊敬にあたいする人

b. 生活上の自制力が問われている。

[会話]・・・2枚舌を使わず(人によって言葉の使い分けをしない)舌は人を自分に引き付ける手段や蹴落とすために使われやすく、あざむきの道具となりやすいことに気づいている人。

[酒]・・・酒に飲まれてしまわない人→罪につながる危険がある。酒に酔わないで、御霊に酔う。

[金銭]・・・不正な利を貪らない人、無欲な人。献金や教会財政を扱う機会が多いので。

c. きよい良心をもっている人…1章5、8節にも繰り返し出てくる。

<11節>

◆当時女性執事もいた。あるいは執事の妻も執事の妻も監督や執事と同様に、要求されている事柄として、

a. 威厳があり=謹厳と同じ意。

b. 悪口を言わず=教会破壊に繋がるから。

c. 自分を制し、

d. 忠実に仕えていくことを大切に感じている人。

<12節>

◆道徳的に一人の妻の夫で、子供と家庭をよく治める人。神様から与えられている家庭によく仕え、また教会にも仕えることのできる人。

<13節>

◆霊的な表現であるが、責任ある立場に立つことによって得る事柄。良い地歩を占め、キリスト・イエスを信じる信仰によって成長し、強い確信を得ることができる。途中で「大変だ、やめよう」ではなく、自分の足りない弱さを認めながら、神様に助けていただきながら、やっていくことがなによりも信仰成長の出来事となるということである。

◆執事とは、〈ナンバー・ツー〉に徹する能力を与えられた人です。女房役とも言われます。この能力を持った人材が今日求められているのです。

(注 34)

◆新約聖書時代あるいはその直後に書かれたキリスト教文書の著者の中で使徒たちの直接の弟子と信じられていた者たちの呼称。一般に使徒教父とは、ローマのクレメンス（著作年代は 1 世紀末）、アンテオケのイグナティオス（2 世紀初め）、スミルナのポリュカルポス（2 世紀初め）、「ポリュカルポスの殉教伝」（2 世紀中頃？）の著者、ローマのヘルマス（2 世紀前半）、アレキサンドリアでバルナバの名で書かれたと推測される手紙の著者（2 世紀前半）、「ディダケー」（12 使徒の教訓）の著者（2 世紀中頃）、「クレメンスの第 2 の手紙」の著者（2 世紀中頃）、「ディオグネートスへの手紙」の著者（2 世紀末—3 世紀初め）、「パピアスの断片」の著者（2 世紀）を言う。

(注 35)

◆「キリスト教が発祥の地ユダヤから、当時の世界を支配していたヘレニズム文化圏へと発展していったころ、正統信仰の擁護や基本的な教義の確立に貢献した多くの思想家たちは、その後の教会の歴史の中で「教父」として敬われている。日本のキリスト教界では、聖書に関する研究は相当に進んでいても、教父たちの思想に関する研究はまだあまり盛んではない。しかし、教会の成立と発展の過程において彼らが果たした役割を考えると、私たちが教会の真の伝統を知り、さらに日本における教会の未来の発展を望む上で、教父たちの歴史と思想を学ぶことにもっと意識的に取りくんでもよいのではなからうか。」（『キリスト新聞社』社説、1995.4.29）

C-08. ディアコニア共同体となるために

〈はじめに〉

◆講義 C で述べてきたことを振り返りたい。講義 C における〈学びの視座〉は、私たちが神のしもべとして、神と教会、そして人と社会に仕えるというものである。マタイ福音書 25 章 32 節以下に記されている有名な『ディアコニア憲章』にあるように、この世の苦しむ人々に仕えることは「わたしにしてくれたことである」と主は語っておられる。

◆使徒の働き 13 章 36 節に「ダビデは、その生きていた時代において神のみこころに仕えてのち、死んで・・・」とあるが、私たちも同様に、今の時代に仕えなければならない。私たちは、自分の置かれている時代以外に生きることは不可能なのであるから。

◆私たちはキリストのしもべとして、教会と社会の間に隔ての壁を造って、社会から遊離してはいないだろうか。講義 C では中世のディアコニアの新しい担い手としての修道院について触れることはできなかった。修道院は教会の発展に伴い教会が世俗化していく中で、信仰の純粋性を保とうとして出現した。と同時に、隣人愛の働きも必然的に燃え上がった。ディアコニアの実践は、修道院の堅い壁を破って外にあふれ、貧しい人々の世話をし、旅人や孤児、病人、老人、困窮者の保護の必要に迫られ、宿泊所、病院、孤児院を併設していったのである。中世の暗黒期に、キリスト教の信仰と隣人愛を保ったのはまさに修道院であったのである。

◆西欧修道院の祖と言われるベネディクトス(480~543年頃)は、イエスの教えに基づいて清貧と貞節と服従を守り、祈りと労働の生活をなし、基本的姿勢として隣人愛を保つよう説いている。そして「修道院長自ら客人に手洗いの水を与え、足を洗ってあげなさい。その後、神の慈愛を祈りなさい」と言っている。

◆講義 C の最後として、主にある教会が、ディアコニア共同体となるために、ディアコニアを生きるために、次の三つのことを提案し、チャレンジしたい。

(1) オープン マイセルフ (Open Myself)

◆神と人、そして社会に仕えていくために、人と人、自分と他者、教会と社会…私たちの周りにある様々な"壁"を開いていくことはできないだろうか。"壁"が開かれたその先に何かあるのかわからない。しかし、私たちの周りに、何か開いていかなければならないものはたくさんあるはずである。

◆教会の未来を担っていく者たちにとって大切なことは、未来は今現在とつながっているということを忘れてはならない。今、私たちが触れているもの、教会の中に起こっていること、そのひとつひとつは決して未来と無関係ではない。

◆たとえば、私たちの教会に介護を必要とするお年寄りがいるなら、その人を通して、日々の介護とそれを担う家族のあり方、介護社会における教会のなすべきヴィジョンを見ることができるかもしれない。心に病を持つ青年がいるなら、その青年を通して現代の青年に共通する心のパーソナリティを見ることができるかもしれない。もし、親に虐待された子どもがいるならば、そうした子どもを里親として育てるヴィジョンが与えられるかもしれない。あるいは、クリスチャンホームの子弟がいるならば、今日の学校教育のみに頼らず、信仰を継承するためにホーム・スクーリングのヴィジョン、不登校生の存在を通してより社会に開かれた宣教的な働きとしてのチャーチ・スクールのヴィジョン見るかもしれない。また、ビジネスに関心を持っている人がいるなら、起業精神をもって神のための会社を起こすヴィジョンを見るかもしれない。

◆教育の領域、行政の領域、医療の領域、福祉の領域、治安の領域、メディアの領域等において、今私たちが直面し、今起こっている事柄を通して、教会と社会との間に新しい橋を掛けることができるかもしれない。

◆神と人に仕えていくために、クリスチャンすべてに、それぞれが神からの恵みの賜物が与えられていることを学んだ。そのためには、まず私たち一人ひとりが、〈オープン マイ・セルフ〉し、自分の殻を抜け出さなければならない。神学校に行くだけが献身の道ではない。むしろ、今、私たちが生き、生活しているところから「私自身を開く」ことである。それから、教会を外へ、地域へ、と開いていけないだろうか。そのためには、私たちひとりひとりに神からの召しが必要であるのは言うまでもない。

(2) ホスピタリティ・マインド (Hospitality Mind)

◆ホスピタリティ・マインドとは、「もてなしの心」である。今日、最も元気のある企業は、ホスピタリティを志向した企業であると言われる。つまりホスピタリティ・マインドを持った人々からなる組織である。それは公式の命令系統にそって行動せず、臨機応変にいつも変化する「形のない組織」であり、そこには創造性と自主性が求められ、活かされている。しかも従業員は相互に信頼し合い、強い連帯感を持っている。今は、ホスピタリティ・マインドはビジネス界においては常識であり、これを有しない企業の明日はないと言われているほどである。人間性が大きな比重を占めている。

◆このホスピタリティ・マインドが、今日のクリスチャンの中に、あるいは教会の中に欠けてはいないだろうか。電話の応対一つで、教会の雰囲気分かってしまうような教会では人の心をつかむことはできない。今、社会が求めている人間は、ホスピタリティ・マインドを持った人であり、ビジネス界においてもホスピタリティの質が戦略的位置の主要な部分になってきている。今日、どの顧客に対しても、「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」「次の方どうぞ」と言ったマニュアル化されたサービスはロボットでもできる。もっと血の通った人間性が求められているのである。これからの社会の動向として、これまでの「規模が大きいことは良いことだ」という量的な考え方から、「小さいことは良いことだ」「小さいけれども、温かい」という質への時代へと移行しつつある。

◆人に夢と希望を与え、喜びと感動を与え、心地良さを与えるホスピタリティ・マインドを持った人こそ、真の仕え人であるといえる。とはいえ、このような人材は、一朝一夕にして育たない。日本の茶道の本質はホスピタリティ・マインドである。今日、茶道というと、作法のうるさいイメージがあるが、お茶を立てるということは、もともと茶をたてる人と飲む人の関係がより重要であったはずである。初対面であったとしても、あたかも何年も付き合ってきたかのような温かいもてなしをする、そんな心こめたもてなしは、短期間の稽古でできものではないらしい。ただお茶を飲むだけのように見えるが、お茶の世界を極めるには、何十年の時間を要しても終わりのない道のりだと言われている。確かに、日本の茶道、華道のように、庶民の伝統文化の中で何十年もの練習を必要とするものは、世界でもあまり類を見ない。茶道における「一期一会」は、まさにライフスタイルそのものなのである。

◆ホスピタリティという単語を英和辞典で調べると、だいたいどの辞書にも「思いやり」「気配り」「もてなし」「態度」「身のこなし」「物腰」「振る舞い」「厚遇」あるいは「饗応」とい

うことばで説明されている。しかしそれはいずれも表面的な形での説明である。ホスピタリティというのは、その人の性格や教養、そして文化的・社会的背景や経験などをベースにして、どれだけ相手の立場や気持ちにそって対応できるかということである。

◆本来のホスピタリティとは、相手の喜びや幸福に対する無償の心配りであって、対等の関係が求められる。そして、その関係においては、より精神的なもの、より人間的なものが最も重要な要素である。究極的には、人間の世界においては、「モノではなくココロ」しか相手に通じないのである。

◆「人には親切、しかし自分には厳しく」相手に対してはホスピタリティ・マインドをもって対応する。人間は、そもそも他人に対しては厳しく、自分には寛大である。そうではなく、他人にはいつも温かくやさしく接するべきである。

◆聖書では、「何ごとでも自分にしてもらいたいことは、人にもそのようにしなさい。」とイエスは語られた。これは聖書における人と人との関係における黄金律である。

(3) 人の心を知る (Personality Mind)

◆人に仕えようとするとき、私たちは人の心を知ることが知らなければならない。とはいえ、人の心というものにはきわめてミステリアスで奥深い。人の心を知る知恵と知識を身に付けなければならない。教会の働き者の多くは、人と関わるものでありながら、その人間理解についてはきわめて無知であることが多いのである。

一つの例として・・・「アダルト・チルドレン」という名のパーソナリティ特性

◆例えば、最近の若者の心が見えなくなっている。どう理解すればよいのかわからない。今日の若い世代は、ひと昔前の若者と比べて大きく変容している。それゆえ、教会の牧師やリーダーである年長者が若者と関わろうとすると、つまづかせる可能性が高い。あなたは〈アダルト・チルドレン〉ということばを聞いたことがあるだろうか。

◆アダルト・チルドレンとは、「安全な場所」として機能しない家族、つまり子どもにとってトラウマ(心的外傷)が継続的に生じてしまう家族の中で育った人々のことであるが、程度の差があるにせよ、普通の子も、その根底に「アダルト・チルドレン」と共通するパーソナリティの特性を有している。そうした今日の若者の思考と行動を理解していくことが、これからの教会において重要である。これからの時代、家族崩壊による心の傷をもった人は増え続けるであろう。

◆その特徴は、

- ①周囲が期待しているように振舞おうとする。
- ②ノーが言えない。
- ③しがみつきと愛情を混同する。
- ④楽しめない、遊べない。
- ⑤フリをする。

- ⑥自己処罰に嗜癖。
 - ⑦他人に自分の真価を知られることを恐れ、恥じる。
 - ⑧他人に承認されることを渴望し、淋しがる。
 - ⑨何もしない完璧主義者である。⑩変化を嫌う。⑪被害妄想に陥りやすい。
 - ⑫表情に乏しい。
- ◆人の心を知る人、人の心を理解する人が必要とされる時代である。

C-09 おわりに

◆神を知ること、自分を知ること、人を知るとは、三位一体的真理である。神を知るとは自分を知ることであり、自分を知ってはじめて人を知ることができ、人と共感できるようになる。主を愛すること(**Worship**)と人を愛すること(**Intercession**)ことは両輪なのである。これは聖霊なる神の働きであり、主の御父のわざである。

◆最初から、私たちは人を愛し、人に仕えて行くことには限界がある。必ず、行き詰る。神との親しい交わりを通して、暗闇にいる自分が見えてくる。そして神との交わりの中で、自分がいやされ、少しずつ変えられていくのである。自分を知ること、自分の周りにいる人々の心と共感する心が生まれ、とりなしの働き(かかわりの働き)がはじまっていく。

◆講義 A、講義 B、講義 C は、おのおのが密接な関係を持ち、三位一体的関係を持っている。私たちは、三位一体の神の愛の交わり—そのいのち—の中に生かされることを通して、このいのちのかかわり—永遠のいのち—が成長させられていくのである。